

---

# 10月の少年

夏野梨生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

10月の少年

### 【Nコード】

N3810N

### 【作者名】

夏野梨生

### 【あらすじ】

聖クレマティス学園のアイドル、人見知りでシャイな中学二年生の天川忍の寮に、一年下の転入生、藤枝紫朗が入寮してきた。美貌と洗練された振る舞いで学園一の人気者となる紫朗だが、徹底的に抑制された感情の、本性をみせることはない。生まれつきの優しさから紫朗を気づかう忍に対し、「壊してやる」と宣告する紫朗。家族に捨てられた忍と、家族を失った紫朗の心が結びついたときが、別れの時だった。

あなたは

秋の澄みわたる薔薇色の 美しい空。

けれども私の胸の中に

悲しみが 潮のように満ちて来て、

その汐の引くとき、

私の陰鬱な脣の上に

苦い泥土の焼け爛れる思出を 残す

—— ボードレール ——

金木犀が強く薫っていた。

蒼く冴えた空に朱が滲み、赤煉瓦の道に並んだ銀杏は風にざわめいて、金色の光を荘厳に放つ。

東京から電車で小一時間。

聖クレマティス学園へのスクールバスが発着する葛籠錦駅前つつらにしきに戻って来て、天川忍はほおつと息を吐いた。  
あまかわしのぶ

山のふもと。田舎の駅である。

バブル時代のばらまきで駅前の道は整備されているが、小さな商店街がならぶだけの、閑散とした駅だ。

それでも夕暮れの時間は通勤客や通学客で、ゆいいつのにぎわいを見せる。

天川忍は腕時計をみた。

バスの時間まではまだ小一時間ある。

せわしなく行き交う人の流れに左へ右へと流されながら、裏通りにはいつてほつと肩から力を抜いた。

頬までのびた薄茶色のコシのない髪を、耳の後ろへ流す。

表通りの喧騒が幻覚のように、静かである。

平屋の小さな住宅、こじんまりとしたアパートやどこかの会社の社宅が並ぶ、古くも新しくもない、地味でこじんまりとした、ありふれた住宅地だ。

スクールバスまでの時間、人ごみを避けてここで避難していいように、忍は塀にもたれた。

野菜を煮込む、湿っぽい匂いが漂っている。遠くで猫が鳴いた。陽はもう落ちて、灰色を薄く溶いたような空気が、忍の視界を覆っている。

薄闇の中に少年がひとり、立っていた。

膝の高さにつくられた植え込みに、白い花が植えてあり、少年は上体を前に傾けて、白い花を弄んでいた。

忍とおなじくらいの年齢だろうか。

スリムジーンズにセーターを着、カラフルな大きいスポーツバッグを肩から斜めに下げている。

浅黒いひきしまった肌に、意志のはっきりした眼。

ぞっとするほどの美少年だ。

いちど見たら忘れられそうにない顔だった。

少年はちらりと忍を見て、茎を切ろうとしている指先に力をこめた。少年の手首に触れた白い花が、禁忌を破ろうとする処女のようにわなないている。

少年は白花をちぎりとると、顔をあげた。

白目の部分が青みがかって、澄んだ、意志の力と理性を宿した瞳で忍を睨みながら、右手に持った花を顔に近づける。

花が、少年の凜々しい口元を隠す。不思議と薄闇に溶けることなく、哀しくなるほど、鮮やかに白い。

花の向こうにある双眼は、忍を見すえたままだ。

風が少年の前髪を揺らして、吊り上りぎみの一文字の眉と、形のよい、広いひたいを、忍に見せた。

「花盗人」

忍はつぶやいた。

少年は光る瞳で忍を見つめたまま、早くもなく遅くもない足取りで、忍に近づき、白い花を突きだした。

忍がたじろいで身をひくと、少年は忍の指をこじ開け、白い花を握らせた。

「共犯」

言い捨てて、少年は通りすぎた。

手のひらに残された花盗人の犯罪の証を、天川忍は持てあました。

これはあの少年の好意か悪意か悪戯か。

そのどれもでない気がするし、全てでもある気がする。

迷ったが捨てることはできずに、忍は掌たなひらに白花をくるんでスクールバスに乗りこんだ。

学校に戻る最終バス。

忍のほかに乗客はいない。

中ほどに窓際に座って、日没後のほんのり朱い街並みとその向こうの山並みを眺める。

運転手がドアを閉めて発車しようとした時、先ほどの少年が駆けこんできた。

「クレマティス生？」

運転手がびっくりして言う。

乗車はクレマティスの関係者が原則だし、生徒なら校則で、外出時には制服着用が義務付けられている。

私服だとしても見覚えのない顔。

これだけの美少年なら、学園内にいたら噂になっているはずだ。

「そうです。明日から」

少年は通る声で応えて学生証らしきものをみせ、物怖じすることなくバスに乗り込んできた。

中ほどに座っている忍を一瞥することなく、まっすぐに通路を奥にすすむ。

バスが動き出した。

忍は体がすくんだ。

後方の座席に座った少年が、あの強い瞳で座席を通して忍を見ている気がする。

気のせいだ。

忍の考えすぎ。

妄想。

いちど後ろを振り返って、少年が寝ていたり別の方を見ていたりするのを確認すればいいのに、怖くて身じろぎできない。

膝の上。

水を掬うように半球を作った両手に、さきほどの白い花が乗っている。

その花のしっとりとした重さに、精神がざわめく。

バスが学園に着くまでの半時、天川忍は全身をずっと緊張させつづけた。

先に少年が降りるのを待ってから、忍はバスから降りた。

少年が自分の前を歩いて行くので、ほっとする。

歩調を調整して少年からどんどん距離をとった。

少年はまっすぐに第三寮に歩いていく。

忍とおなじ寮だ。

明日から生徒というのは、本当らしい。

聖クレマティス学園は全寮制の中高一貫校だから、転校生は珍しい。

とくに、10月からというのは妙に半端な時期である。

何年生なのだろう。

どういう事情なのだろう。

何にせよ、あれだけの美少年なら明日には閉鎖された学園の注目を一身に浴びるだろう。

少年が寮に入ってから数分待つて、忍は寮に入った。

初老の寮監と先ほどの少年が、快活に話しこんでいた。目を細め、くったくのない明るい笑顔で陽気に話している。通り過ぎようとした忍に、寮監が気づいて呼びとめた。

「天川君、紹介しておくよ。」

今日から天川君とおなじ部屋になる、藤枝紫朗君だ。ふじえだしろう学年はひとつ下だよ」

藤枝紫朗は忍を見て驚いた顔をしたが、ひとなつつこい笑顔をつくり、礼儀正しく頭を下げた。

「藤枝紫朗です。今日からよろしくお願いします」

忍は茫然とした。

「おなじ部屋、って……？」

「天川君はひとりだったから、半分余っていただろう」

「で、でも。」

「ぼくはずっとひとり部屋って理事長とずっと前に話して決めています。」

それに学年も違うじゃないですか」

すつと藤枝紫朗の貌から表情が消えた。

強く光る瞳で忍を見る。

「天川君、理事長が藤枝君を君とおなじ部屋にするように言われたんだ」

「理事長が」

忍は俯いて、視線を黒ずんだ床に向けた。

信じられなかった。

あの理事長がだれかを忍と相部屋にするとは思えない。

これは、なにかの間違いではないのだろうか。

「いいですよ、オレは。」

廊下でも、物置でも、なんならこの食堂で寝泊まりしても」

感情を押し殺した声で、藤枝紫朗が淡々と言った。

「なにを馬鹿なことを。」

君の荷物はすでに部屋に運び入れてある。  
天川君、藤枝君の面倒をみてあげなさい。  
先輩だろう」

忍は答えなかった。  
顔も上げられない。

たぶん。

これは何かの間違い。  
何かの連絡ミスだ。

忍がだれかと相部屋になることはありえないのだから。

「天川君？  
どうしたんだ」

寮監の声に、忍ははっとなった。

「あ、いえ、すみません。  
ぼうつとしてました」

「天川君らしくない。  
じゃあ、頼むよ。」

藤枝君、きみはすごく運がいい。

天川君と同室なんて、学園中から恨まれるよ」

寮監は朗らかに笑って、はやく荷物を置いて、夕飯にきなさい、  
と言って去っていった。

藤枝紫朗の強い視線を全身で感じる。  
忍は床を見たまま、こっち、と階段を指差した。

これはなにかの手違いだと思う。

理事長と直接話せば解決するだろう。

それまでの辛抱、と我慢することにした。

共有設備とか、寮のルールとかを説明しながら、2階の角部屋に案内した。

ドアを開いた瞬間、うつ、と、藤枝紫朗が呻いた。

ふたり部屋は線対称のつくりになっている。

左右の壁に、それぞれベッドとクローゼットと本棚。  
窓に向かってふたつの机が並んでいる。

部屋の中央はカーテンで区切ることできる。

忍の部屋は、ひとりで占有しているため、めいっばいに散らかしてあった。

両方のベッドの上に洗濯済み、洗濯前の衣類や夏服、冬服の制服やらが山高く積まれている。

机と床には何十台ものパソコン関連の機器が並び、その透き間にいろいろなメモをした紙が散らばっている。

教科書、ノート、筆記具、学習道具、すべて、部屋中に点在していた。

床は、まったく見えない部屋だ。

さまざまな機械が24時間稼働しているため、部屋は廊下よりもかなり温度が高かった。

部屋の片隅に、申し訳なさそうに、運び込まれた紫朗の荷物らしき段ボール箱やらバッグがちんまりとある。

「どうしよう」

忍は困ってしまった。

ええと、と、片方の上のベッドにあった衣類を抱えて、もう片方のベッドにどさりと重ねる。

床に散らかっていたメモ用紙も拾い、分類わけをしようとして、また、床の上の機器の上に順序をそろえて並べ替えた。  
逆に前よりも広がっていく。

「なにしているんだ」

藤枝紫朗が言った。

「ええと、藤枝君の分のスペースを空けようと思って」  
「これ、どかしていいか」

藤枝紫朗は靴で、足元の金属の立方体をぐっと押した。

「ああつ、θ 姫」

忍は紫朗の靴を払いのけ、θ 姫をぐっと抱えてかばった。

正確には、忍が3番目に自作したPCで、θ 姫と名付けた本体の残存だ。

もう稼働はしていないが思い入れがあるし、いつかは復活させたいと思っている。

「ふたり部屋のはずだ。

部屋の半分はオレのスペースじゃないのか。

オレの分を空けてくれ」

「それはそうなんだけど」

忍はオロオロとうろたえた。

それはまったくの正論だ。

けれどもこれだけいる $\alpha$ 王子や $\beta$ 王子から $\gamma$ 女王まで、どうやったら半分のスペースに納められるのだろう。

散らかしているのではない。

忍には必然の置き方をしているだけ。

紫朗がほおを緩めた。

白い歯をみせて、笑顔になる。

「だから、オレとの相部屋を嫌がったのか」

「そうじゃないけど」

藤枝紫朗の顔がまた硬く強張った。

ずかずかと部屋に入り、忍が明けたベッドの上に自分の荷物を置く。

「境界線そこだな」

カーテンレールに沿って、ゆびで、室内の中央線をしめす。

「早くそちら側に全部移動させてくれ」

「うん……」

忍はうなずいた。

それは理事長がどうのというより、ルールとして忍が守らなきゃいけないこと。

広げたメモ用紙をまた一枚一枚回収して行く。

そして一枚一枚、こんどはベッドの上の洗濯済み、洗濯前の衣類、夏服、冬服の制服が積み重なった上にひろげて並べた。

教科書やノートも集め、また、その上に並べる。

藤枝紫朗に足蹴にされたθ姫をかかえて、またうろろし、今度は枕の上に積んだ。

紫朗は極力、忍の行動を見ないようにして、自分の荷物をひろげ、制服をハンガーにかけたり、勉強道具を棚に収めたりしていたが、

「いったい、どうやって寝るつもりだ」

耐えきれなくなったように、苛々と言った。

「別に、机とか。

寝なくてもいいし」

紫朗は胸をふくらませて、大きく息を呑んだ。

天井を仰ぎ、目を瞑って深呼吸をしている。

「分かった。

すぐには片付けなくてもいい。

ただ、早い段階でスペースを空けるように努力してほしいけれど」

忍は、端正な横顔をまじまじと見てしまった。

心底、ほおつとする。

たぶん、明日には藤枝紫朗はこの部屋から出ていくから、片付けなくてすむ。

逆に、紫朗を追いつくとして自分嫌悪を感じてしまう。申し訳なさのあまり、自分の非礼を詫びて、この部屋にいてほしい、と言いたいところなのだけれど。

でもダメなのだ。

それは忍にはできない。

藤枝紫朗には明日には出て行ってもらわなくてはいけない。

罪の意識に苛まれながら、忍はうなずいた。

翌朝は気持ち良いほどの秋晴れの、青空が高く澄んだ日だった。

カーテンで仕切られた向こうで、藤枝紫朗はかなり早い時間に部屋を出ていき、忍はほっとしながら身支度を終えて校舎に向かった。

チャイムが鳴って、稲穂ひさし先生が「おはよう」とにこやかに教室に入ってきた。

新卒で昨年に忍たちの担任になったまだ若い先生だけど、すでにこの一年半で髪は白髪が交じり、すべてを達観したように落ちつきはらい、ベテランのように見える先生だ。

日直が起立、礼、と号令をかける。

先生は出席簿をひらいて、はたと動きを止めた。

「麻井くんは？」

出席番号一番の、麻井芙弥也がいない。  
窓側。

いちばん前の席がぽっかりと空いている。

教室中にイヤな沈黙が落ちる。

いたらいたで大変な生徒だが、いなければ、やはり担任としても、クラスメイトとしても心配ではある。

「今日は起きていたよね」

「うん、今日は起きてた」

「文化祭がどうか言って、やたら張り切っていたけど」

がやがやとクラスメイト達が騒ぐ中、バンと勢いよく引き戸がひらいて、麻井芙弥也が教室に飛び込んできた。

「大変っ」

と小さな体を弾ませ、ほおを赤く染めて興奮している。

「大変だって、大変なんだ、大変」

両手を広げて、大きな声で騒いでいる。

「麻井くん、もうホームルーム始まっているから席について」

にこやかな声と顔で、稲穂先生が言った。

ここで、うっかりと「なにが大変なの」と聞いたらそれこそ大変なことなる。

麻井芙弥也のペースに巻き込まれてはいけない。

入学式以来、このクラスでは麻井芙弥也対策がつねに課題だった。

麻井芙弥也はつぶらな鳶色の瞳をぱちくりした。

「そこに張り紙してあるでしょう」

淡々と先生が言う。

麻井芙弥也の席の前の壁には、「授業中は私語禁止」「授業中は勝手に歩かない」「発言は挙手して指されてから」「授業中はその

授業の勉強と関係ない話はない」「授業中にお菓子を食べない」「授業中にクラスメイトにお菓子をあげない」などの張り紙がべたべたと貼られている。

麻井芙弥也は張り紙を真剣に読んで、こつくりとうなずき、席についた。

とても素直なコだ。

だから、なんだかんだ言っても、どれだけ迷惑をかけられても、先生もクラスメイトも麻井芙弥也のことを嫌いになることはできなかった。

「ええと、じゃあ、みんないるね。

それで、文化祭の出し物をこのクラスは決めていないのだけれど、そろそろ計画書を委員会に出さないといけないから。

なにかやりたいこととかある人いる？」

「はいっ」

いきおいよく麻井芙弥也が手を挙げた。

先生は困った顔で、他に誰か挙手しないか、してくれないか、目を泳がせて訴えている。

「はい、はい、はい」

麻井芙弥也は小さな体で、めいっばい腕をのばして主張する。  
ものすごく気まじめな顔。

ここまでされると、なんだか気の毒になって誰も麻井芙弥也に対抗して挙手できない。

稲穂先生が根負けした。

「じゃあ、麻井くん」

「大変なんだっ」

麻井芙弥也はまってましたとばかり、がたんと立ちあがって言った。

「転校生なんだ、1年下、すっごくカッコよくて、天川とおなじ部屋なんだって」

クラスにどよめき起きた。

「本当？」

忍の前の席の浅葉檸檬が振り返った。

忍は答えられず、両手で顔を覆った。

今日中にも、理事長と話をして藤枝紫朗には出て行ってもらおうと思っていた。

なるべく人に知られる前に、穏便に済ませたかったのに。

「ひどいんだ、親友のぼくに何も教えてくれないんだもの」

麻井が声を張り上げた。

親友……。

親友だったんだ。

昨年から同じクラスではあったけど、はじめて知った。

「麻井くん、ええとね、文化祭の話をしたいのだけど」

稲穂先生が麻井芙弥也の発言を遮った。  
サラサラの猫っ毛をゆらして、麻井は首を振った。

「これ、文化祭の話。  
だいじな話」

麻井はぐるりと教室を見まわした。

「ぼくね、親友の天川のために一生懸命考えたんだ。  
天川ってすごくいいヤツなのに、いつもひとりでパソコンなんか  
いじって、すごく可哀想。  
だからね、文化祭には天川がみんなと仲良くなれるようなのがい  
いて、考えていたの。」

なのに天川は転校生のこと、親友のぼくになにも教えてくれない  
から、ぼくすごく傷ついたんだ。  
でも、ぼく決めた。

やっぱり天川は親友だし、天川のためにやってあげたいって」

忍の背筋に冷や汗が流れた。  
すごく嫌な予感がする。

たぶん、途方もなく、ひどいことが起きる気がするけど、麻井芙  
弥也の暴走が始まると、先生ですら止められない。

麻井芙弥也は両手をひろげて、高らかに宣言した。

「メイド喫茶やろう！」

は？ とギョツとしたのは、浅葉檸檬と天川忍だけ。  
ほかの生徒は、へー、いいんじゃない、面白そう、麻井くんにし

てはまでもだね、と言っている。

先生ですら、うん、いいんじゃない、このクラスにはぴったりだね、と笑顔で頷いている。

忍は浅葉とおもわず顔を見合わせた。

早く、止めないと。

取り返しのつかないことになりそうだ。

天川忍はおずおずと手を挙げた。

クラス中の視線が忍に集まる。

すごく緊張して、のどがカラカラになる。

コンと咳をして、小さな声で忍は言った。

「そのう、麻井くん、なんでそれがぼくと関係あるの」

「天川がメイドやるに決まってるじゃない。

絶対、似合うもん。

だいじょうぶ、親友のぼくも一緒にやってあげる。

おかえりなさい、ご主人さまあ、もえもえビーム、っとか。

おそろいのメイド服着ようね。

超ミニスカートでフリルたっぷり」

「え……」

忍は頭が真っ白になった。

へなへなと体の力が抜ける。

そのまま採決がとられると、浅葉と忍以外の全員が賛成で、メイド喫茶をやることに決定した。

忍はくらくらめまいを起こし、立ち上がれなくなり、そのまま医務室につれていかれた。

医務室のベッドはひんやりと清潔だった。

窓からは澄んだ秋の空気が流れ込んでいる。

昨夜はカーテンで仕切られているとはいえ、藤枝紫朗とおなじ部屋でひとばんじゅう気を張り詰めていた。

ベッドも使えなかったから、ずっと机に向かったまま、寝ずにPCをいじってしまった。

ベッドに横たわった瞬間、忍は気絶するように、爆睡してしまった。

——忍くん、貧血で倒れたんですって？

睡眠不足？ また、一晩じゅうパソコンをいじっていたのかしら。

柔らかい声が、しきりのカーテン越しに聴こえ、忍は目を覚ました。

カーテンにシルエットがふたり分、浮んでいる。

（理事長だ）

ふっと心が温かくなる。

——そうだ、理事長にいろいろ話をしないと。

忍がベッドに体をおこすと、

「あ、気づいたようですね。

忍くん、いいですか」

カーテンがざあっと開いた。

漆黒のスーツに、長い黒髪、優しい微笑を浮かべた聖クレマティ  
ス学園の理事長、架奏恭一郎が立っていた。

「また、おそくまでパソコンでしょう?」

架奏恭一郎は指を軽く曲げてくちびるにあて、くすくすくすと笑った。

「ええと、ええ、まあ」

「ダメですよ、ちゃんと夜は寝ないと」

「はい」

架奏恭一郎は漆黒の瞳を細めて、ほほ笑んだ。

天川忍が視線をあわせて会話のできる、ただひとりの人。とても優しい人だ。

まるで闇のよう。人の罪もあやまちも、そつと覆い隠して包みこんでくれる。

「理事長、ぼく、理事長にお話があつたんです」

「わたしもです。」

昼食、まだですよね。

忍くん、つきあつてもらえませんか」

理事長室に、カフェテリアからふたり分の食事がデリバリーされた。

B L T に ローストビーフのサンドウィッチ、ふわふわに柔らかいポテトサラダとさっぱりしたオニオンスープ。

カモミールティとレオニダスのチョコレートまでついている。

まだ授業中である。

クラスメイトの顔を思い浮かべると後ろめたさを感じるけれど、やはり理事長とふたりきりで食事できることが嬉しい。

文化祭でメイド喫茶をやるかもしれないと愚痴をいうと、

「それは楽しみですね、芙弥也くんもたまにはいいと言いますね」

「理事長まで、そんなこと言っんですか」

「私もぜったいに行きます。」

頑張ってください」

心底嬉しそうに言う。

大好きな理事長にそう言われてしまうと、嫌だけどやるしかないのかな、と思ってしまう。

会話をしていると本当に、この人は子どもが好きなのだな、といつも感じる。

忍のことも、忍以外の生徒のことも、生徒でなくても無条件に子どもが好きで、子どもの笑顔も可能性も未来も見護ろうとする意志をつねに感じる。

その一方で無力な子どもが犠牲となる事件が巷で起きるたび、忍ですら危なっかしいと感じるほど、無防備に傷ついていた。

食事をすませ、チョコレートを齧りながら藤枝紫朗のことをどう切り出そうか考えていた。

理事長から話してくれないかな、と虫のいい期待もあるけれど、架奏恭一郎は笑みをたたえたまま、じっと忍が話したのを待っている。

忍から話したすべきと思っているのだったら、この人は一時間でも二時間でも、じっと待ち続ける。

それが分かっているから、忍はコシのない髪を弄びながらおずおずと話した。

「あのう、転校生が来たようで、学年が一つ下なのですけど、寮でよくとおなじ部屋だと言われて。」

そのう、変ですよ、ぼくはずっとひとり部屋にするって理事長、前に言ってくれましたよね」

架奏恭一郎はソファーに深くもたれた。

「忍くんから見て、紫朗くんはどんな子に見えましたか」

その眼差しと口調で、理事長が同室にすると決めたと寮監が言っていたのは、真実だったのだと悟った。

「ええと、カッコいいと言われているみたいです」

「忍くん自身は？」

「カッコいいんじゃないかと思えますけど」

正直なところ、よく分からない。

ひと晩一緒にいたけれど、忍は自分のことで精一杯で、藤枝紫朗のことまで気にしていられなかった。

「そうだ、花をもらいました。」

白い花」

花ですか、と架奏恭一郎はびっくりしたように言った。

「花束とか、そんな買ったような立派なのじゃなくて、そう、雑草。雑草のような花」

「雑草？ ペンペン草？ そっいえばペンペン草の花言葉は『あなたに全てを捧げます』だとか。」

さすが紫朗くん、気障ですねえ。

「というか余裕があるんですね、そんな状況じゃないと思うのですけれど」

「ペンペン草じゃないし……、ええと、そんなに意味はなさそうですね。」

押しつけられた、というか嫌がらせかも」

「嫌がらせで花を贈ったりはしないでしょ。」

「そういえば、クレマチスの花言葉、知っていますか」

忍は胸元のエンブレムを見た。

黒の地に、金糸と銀糸でクレマチスの花と鳶の曲線が優美に描かれている。

正門の鉄柵にもこのエンブレムが装飾されているし、プリント類や文房具品、学校のいたるところで目にする。

けれども、深く気にしたことはなかった。

忍は首を振った。

「心の美しさ、高潔。

そして精神的な愛」

「精神的な愛」

思わず、忍はオウム返しに返した。

精神的な愛とは何だろう。

家族愛、友情愛といったものだろうか。

たとえば理事長が生徒たちに注ぐ感情を、精神的な愛というのだろうか。

「紫朗くんはものすごく辛い経験をしているのに、自立しようと気丈に振る舞っています。」

でも、彼は今のまま生きようとするなら、心を失くすでしょう。

わたしは紫朗くんには忍くんが、忍くんには紫朗くんが必要だと思います。

だから、忍くんがずっとひとり部屋でいることを望んでいるのを知っていましたが、それでもあえて、同室にしたのです」

忍は指の色が白くなるほど硬く、手を組み合わせた。

忍が誰かに救われることも、誰かを救うことも、出来るとは思えない。

理事長はじつと忍を見つめていた。

吸い込まれそうな、美しい黒い瞳。

その瞳の前に、「嫌だ」とは言うことはできなかった。

「ぼくにできるでしょうか」

「わたしはそう思います」

「また何かあったら、相談に来てもいいですか」

架奏恭一郎は漆黒の髪を流して、微笑した。

「何もなくても、おしゃべりしに来てください。

忍くんならいつでも歓迎します」

理事長室を出て、忍は深呼吸を何度かした。

すっかり目論見が狂ってしまった。

藤枝紫朗と、理由はよくはわからないけれど仲良くやらなきゃいけないし、部屋も片付けなきゃいけない。

すでに昼休みになっていたようで、廊下の窓からは、生徒たちが校庭で走り回っているのが見える。

ぼんやりと見下ろしていると、渡り廊下を中学一年生の一団が歩いていた。

中心に、藤枝紫朗がいてにぎやかに笑っている。

半日で、もう、クラスの中心になったらしい。

いまだにクラスメイトの大半と挨拶を交わすことすらできない忍とは、すごい違いだ。

これだけ違う二人が、ほんとうにうまくやっていけるのだろうか。

藤枝紫朗が視線を上げた。

忍に気づいたようだ。一瞬、険しい視線で忍を睨みあげる。

すぐに笑顔に戻って、周りの生徒たちと朗らかにじゃれあった。

忍は心臓の上で、拳を握った。

ばくばくと、音を立ててなっている。

そう言えば、昨夜も、人なつっこい笑顔のすぐあとに、ぞつとするほど冷たい視線を向けてきた。

なんでこう極端に表情が変わるのだろう。

どっちが彼の本心で、どっちが偽りの表情なのだろう。

軽快な足音が慌ただしく近づいてきた。

藤枝紫朗が現れる。

階段を一気にのぼりあげたらしい。すこし髪が乱れていたが、端正な紫朗の顔立ちを損ないはしていない。

クレマティスの制服がよく似合っている。

まるでどこかの貴族の少年のようだ。

「アンタ、あの人にいったいなにをチクったんだ」

憎悪燃える目で、藤枝紫朗は忍を真正面から睨みつけた。

忍はチクったつもりではなかったけれど、藤枝紫朗からしたらそうなのかもしれない。

「部屋を別にしてほしいと言ったのだけど、ダメだって言われた。藤枝くんにはぼくが、ぼくには藤枝くんが必要なんだって」

藤枝紫朗の、浅黒いピンとはりつめた頬が、ピクリと痙攣した。

「オレにアンタが必要？」

あごをつき上げると、蔑んだ、馬鹿にしきった眼で忍をねめつける。

「それはない」

忍は髪を撫でながら言葉を慎重に選んだ。

「そうかもしれないけれど、でも、理事長がそう言うのだから」

どたどたと複数の足音が響いてきた。

「紫朗さん、どうしたんですか急に」

「こっちじゃないですよ、あれ、天川先輩？」

さきほど藤枝紫朗の周りにいた少年たちだった。紫朗を追いかけてきたらしい。

紫朗はえくぼを作って、人なつっこい、誰にでも好かれそうな笑顔をつくった。

「悪い。」

同室の先輩が見えたから」

へー、と一年生たちはぺこりと忍に頭を下げた。

「ほんとうに天川先輩と同室なんだ」

「すご……、羨ましい」

「いいなあ、紫朗さん、紹介して」

忍はいたたまれず、視線を伏せ、身をすくめて紫朗の背に隠れた。

紫朗が眉根を寄せ、首をねじまげて忍に顔を向けた。

「なにしてんだ？」

「ちよつと、ぼく、こついの苦手で」

「でも、」

と言いかけて、藤枝紫朗はがつと髪を掻いた。

「話は放課後、部屋に戻ってから。」

それでいいな」

忍としゃべりたがっている同級生たちを急き立てて、階下に下りていく。

ほっとした。

奇妙な感じだ。

藤枝紫朗は露骨な敵意を忍には向けるのに、でも、忍が困っていると、先回りして助けてくれる。

昨夜も片づけができずにうろたえている忍に、紫朗が折れてくれた。

（根はものすごく優しいのかもしれない）

そんな気がする。

そもそも性根の悪い少年なら、理事長は忍と一緒に居させはしないだろう。

ぼくが一学年上なのだし。

ぼくの方が先に色々失礼なことを言った。

忍の方から歩み寄ろう。

理事長もそれを望んでいるのだし。

忍はぐつと意志を固めた。

放課後。

忍はホームルームが終わると、真っ先に教室を出て、寮に帰った。紫朗はまだ戻っていないようだ。

二人部屋を区切ったカーテンを開けた。

藤枝紫朗のベッドと机のまわりだけ、整然と片づいていた。

ベッドにはピシッとカバーが掛けられている。

ベッドカバーをかけている生徒だなんて、寮には他にいないだろう。

衣類はきちんとハンガーにかけているか、たたまれて積み重ねら

れており、教科書やノートも狂いなくきっちりと並んでいる。

忍のPCはまだ、藤枝紫朗の空間を侵略したままだ。  
片付けなきゃいけない。

紫朗のスペースにあるメモや紙類を拾い上げ、整理をせずにひとまとめにして重ねた。

忍からすれば、心持ち、すっきりしたと思うのだけど。

忍の机の上に、紙コップに挿した白い花がある。

大きな花だ。

ペンペン草でないのは確かだけれど、花の名は知らない。

みつめていると、純白と言ってもいいくらいの、澄んだ白さに意識が吸い込まれる。

「食べるなよ、死ぬぞ」

藤枝紫朗が帰ってきた。

下校時刻をだいぶ過ぎている。

人気者だけに、中々解放してもらえなかったのだろう。

バッグを机に置き、ジャケットをハンガーにかけて、アスコットタイを弛める。

ひとつひとつの動作がきっちりとしている。

ちゃんと躡けられてきたんだろうな、と思う。

「食べないけど。」

死ぬってどういうこと」

「死ぬ、ってのは大げさだけど、中毒を起こす。」

チヨウセンアサガオ、別名、ダチュラ、キチガイなすび。

有名な話じゃない、華岡青洲が世界で初の全身麻酔手術を行ったって。教科書にも載っている」

知らなかった？ という顔を、タイをほどこしながら紫朗はした。

「なんでそんな花をぼくに」

「綺麗だったから」

「え？」

藤枝紫朗はベッドに乗ると、背を壁につけて片足をのびし、片足を曲げて抱えた。

白と黒のコントラストがはつきりした瞳で、挑むように忍を見据える。

「アンタも、その花も。」

綺麗だったから。

綺麗な物を見ると、壊したくなる」

呼吸が止まりそうなほどの、露骨な敵意だった。

「昨日、ぼくが色々失礼な態度だったと思う。

すまなかった。

藤枝くんに出て行ってもらえるよう、理事長にお願いしに行ったんだ。でも、理事長はぼくらはお互いに必要で、一緒に居るようにといった。

だから、ぼく」

「アンタ、紺良の血族じゃないんだな」

「紺良？」

いきなり出てきた単語に忍はびつくりした。

紺良、といえば大きな企業だ。

自動車とか、銀行とか、商社とか、そんなイメージがぼんやり浮かぶ。

「たぶん、ぜんぜん関係ないけど」

「だろうな。」

紺良の血族なら、あまりに無防備に近づきすぎている。ただの生徒として仲がいいだけか」

「理事長のこと？」

理事長は誰に対しても親切だよ。

藤枝くんのことだって色々気にしていた」

藤枝紫朗はたてひざに肘をのせ、じっと考え込んでいた。

「アンタ、結構、学園内じゃ人気があるんだ」

「……よく分からないけど」

「そして、あの人も、オレたちが仲良くやることを望んでいる。

ならば少なくとも人前では仲良くしよう」

「人前では？ 理事長が言ったのはそういうことではないと思うんだけど」

藤枝紫朗は大人びた表情で、苦笑した。

「オレにアンタが必要だって？」

オレは誰も必要としていない。オレが必要な人は、オレを必要としている人は、もうこの世の中には」

紫朗はそこまで言って、顔をそむけ、口をつぐんだ。

哀しい横顔。

見ている者の胸が痛くなる。

藤枝紫朗は立ちあがった。

「夕食の時間だ。

一緒に食べませんか、天川先輩」

作りものの笑顔。

偽りの口調で。

藤枝紫朗は忍を誘った。

食堂は、まだ早いこともあって、だいぶ空いていた。

紫朗と向かい合わせに着席する。

夕食のトレイを前に、忍は両手を組み合わせた。

短く食事の前に祈りをささげる。

「カトリック？」

藤枝紫朗が箸を渡しながら言う。

「プロテスタント、父が牧師だから。

こつこのつの気になる？ 嫌がる人もいるからそういう時はやめて  
いるし」

「別にイヤじゃないけど。

なんかからしいな、って」

味噌汁をすすりながら、紫朗は言った。

綺麗な箸使いだ。

やはり、相当いい家に育っているのだろう。

見た目もいいし、頭もよさそうだし、すぐくもてるんだろうな、  
と思う。

「そういえば今月、文化祭だった？」

今日いきなり聞かされて、びっくりした。

まだ何も決まっていなくて言うし」

「学校全体がけつこのんびりしているかも。いざとなれば徹夜で  
寮でやればいいや、ってみんな思っているし。」

高校生だともう慣れちゃって、1週間前にやっと決めたりするんだって。

ウチのクラスも朝のHRで」

と言いかけて、ひじょうにイヤなことを思い出した。

アレは本当に決まったのだろうか。

麻井芙弥也のことだから、いちど言いだしたことをひっこめることはまずあり得ない。

ということは。

メイド喫茶をするんだ。

それで、メイド服を忍は着なきゃいけない？

あたまがグルグル回る。

気持ち悪くなる。

「どうした？」

「ちょっと……、イヤなことを思い出して」

「なに」

忍は箸を置いて、俯いた。

「なんかウチのクラス、メイド喫茶をやるとか言ってる、なんでだろ、ぼくがそれをやるとか……」

「ごっくん、と音を立てて、紫朗が味噌汁を飲み下した。目を驚いたように見開いている。」

「アンタ、男だろ」

忍はさらに深くうつむいて、頷いた。

「嫌なら嫌だと言えば」

「言いたいけど、麻井くん——発案者が、人の言うこと聞かないから。半端なく、人の言うこと聞かないし。」

「そもそもぼくのためだって言うから、絶対に引かないだろうし」

「へえ。」

「どうして」

「ぼくがパソコンばっかやっているから。」

「みんなと仲良くできるようにって。」

「先生も賛成するし、理事長も楽しみとか言うんだ。」

「どうしよう」

「ぶつと、紫朗が吹き出した。」

「あ、悪い」

「とあわてて真顔を取り繕ったが、目が笑っている。本気で笑っているようだ。」

「メイド喫茶って行ったことある？」

「ないよ、藤枝くんはあるの」

「ない。けどそうか。」

「今度の文化祭で行けるわけだ」

「忍は思いつきり身を引いて、ぶるぶると首を振った。」

「来てほしくない？」

「そりゃあ」

「じゃあ、行かない。」

気が変わったら、行くから教えて」

紫朗は人なつっこく笑うと、食事を続けた。  
きれいな作法である。

一緒に食べていて、気持ちいい。

「藤枝くんはなにやるの」

「うーん、まだよく固まっていなくて。

放課後も色々打ち合わせしてみただけど」

「すごいね、藤枝くんは。

転校早々みんなと仲良くて」

藤枝紫朗は顔をこわばらせた。

「そうなるようにオレは努力している。

オレには、じぶんでは何ひとつ努力しないのに、まわりがすべて、  
色々と気づかってくれるアンタの方が、よっぽどすごいと思うけど」

忍は返答できなかった。

紫朗も何も言わない。

無言の食事が続いた。

食べ物の味が分らない。

理事長はどうしてこの少年が忍に必要ななどと考えたのだろう。  
すこし打ち解けても、すぐに衝突してしまう。

相性が非常に悪いとしか、思えない。

ふたりは無言で食事を終え、部屋に戻るとすぐ、磁石のように左右にぱつと分かれた。

忍はパソコンの画面に没頭する。

「言語のプログラミングを延々と続けていくと、気が休まってきた。」

「ここが忍の世界。」

他人の目には不格好な残骸と見える金属の箱が、忍の家族、忍の王国だった。

消灯時間が過ぎても、小さなデスクライトでずっとキーを叩き続け、藤枝紫朗だけでなく寮内が寝静まるまで待つて、忍は浴場に向かった。

生活全てにおいて人とは関わりたくない忍だが、とくに入浴時はひとりになりたかった。

だから消灯時間をだいぶすぎてからか、場合によっては早朝に入浴する。

脱衣所に誰もいないことに安心し、服を脱いだあと、Ｔシャツを着て風呂場へ行った。

湯船につかると、疲れがどつと出てくる。

藤枝紫朗とこれからどうしようか。

文化祭のことも、自分では耐えられるとは思えない。

あれこれ悩んでいると、がらりとドアが開いた。

パジャマ姿の藤枝紫朗が立っていた。

ささくれ立った声で、笑う。

「へえ、ここまで露骨に他人を避けて、なのにＴシャツ着たまま風呂に入るんだ。」

「すごいね。」

「そこまで自分は特別だと思っている？」

いいね人気者で」  
「出てって」

忍は両手で体を抱き、浴槽に体を沈めた。

紫朗は着衣のまま湯船に入ってきた。  
湯をかきわけ、忍の体を押さえこむ。

「アンタのその綺麗な顔、みているだけで苛つくんだ。  
ぶっ壊してやる」

忍はしぶきを上げて抵抗したが、1年下の紫朗の方が体格もよく、圧倒的に力が強かった。

Tシャツがはぎとられる。

あつ、と紫朗が声を立てた。  
ぎよつとしたまま、硬直している。

そんなにも、強烈なのか。

その藤枝紫朗の反応に、ぎゃくにショックを受けた。  
まだ子どもだし、成長するにつれいずれ体の傷は目立たなくなる、  
と医者は言ったのに。

一向に、跡が消えない。

「じ、ごめん……」  
「返して」

忍が手をのばすと、藤枝紫朗は血の気のひいた顔で、濡れ滴っているTシャツを差し出した。

「ごめ、ごめんなさい、オレ」

「出て行つて。」

お願いだから、ぼくに、関わらないで」

藤枝紫朗は身をひるがえして、浴場から逃げ去った。

忍はTシャツを固く絞った。

鏡の前に立つ。

色白の、肋骨の浮き出たやせぎすの身体。

白い肌の上を肩から胸に、幾重にも肉をえぐり血を滴らせた鞭の痕。

背にも、縦横無尽に痕跡がはしっている。

だから人には見せられない。

だから人とは深くかわれない。

（仕方ない）

（仕方がないんだ）

そう、自分で決めたのだから。

藤枝紫朗のことも。

自分から歩み寄ると決めた。

小さなデスクライトがひとつ灯っただけの部屋に戻ると、藤枝紫朗は自分のベッドに腰掛けて頭を抱えていた。

「すみませんでした」

忍が戻ると、立ちあがって、直角に頭を下げる。

あえてそちらへ顔を向けなかった。

「いいよ、もう。」

寝よう」

「でも、オレ」

「もう、いいから」

忍は強く言って、デスクライトを切った。

天川忍はわずかに空けた、ベッドのスペースにもぐりこみ、布団を頭の上からかぶった。

自然と涙が零れてくる。

嗚咽をこらえるため、奥歯を噛みしめた。

「頼むから……」。

そんな風にひとりで泣かないでくれ」

悲鳴のように、藤枝紫朗が言った。

布団を跳ね上げて、起きる。

夜の室内には、月明かりだけが射しこんでいる。

紫朗は散らかった部屋で、あちこちにぶつかりながら、忍のベッドの傍らに立った。

「オレが悪かった。

オレが考えなしだった」

「藤枝くんのせいではないから」

紫朗はじつとうなだれたまま、立ちすくんでいる。

月明かりだけが差し込む、夜。

夜の闇は、理事長のように深く優しく、なにもかも覆い隠してくれる。

忍は壁に体をむけ、足を抱えて丸くなった。

仕方ないんだ、と、紫朗に言うより、自分に言い聞かせるように呟いた。

「父さんがぼくのこと好きなんだ。  
好きで好きで、ぼくを見ていると自分でもどうにもできなくなっ  
ちやうんだ。」

でも母さんは父さんのことが好きだから、ぼくが許せなくて。

でも泣く。

母さん、ぼくを鞭打ちながら泣くんた。

しょうがないじゃない。

父さんはどうにもできないくらいぼくのが好きで、そんな父  
さんをそれでも母さんが好きなんだもの。

誰も悪くない。

そうでしょう?。」

藤枝紫朗の熱い手が、忍の肩を握った。

小刻みに震えている。

思わずその手を上から握った。

電流でも走ったかのように、熱い力を感じる。

ゆびとゆびを交差させ、しっかりと力を込めた。

壁を向き、紫朗に背を向けたまま、忍はつつけた。

「同じ家で姉さんも兄さんもどうしていいか分からず、ずっと一緒  
に、ぼく以上に傷ついていた。」

父さんの立場もあるから、こっそりと医者に行ったりカウンセリング  
を受けたりしてたけどどうにもならなくて、家族全員で心療内科  
にかかったりしてもどんどん事態は悪くなっていった。

そんな時、理事長からこの学校に来ないかと申し出があった。  
全寮制だし、生活にも配慮するからって。

あの人、子どもが大好きで、子どもを保護するための色々なプログラムや会とつながりがあって、ぼくのことを知ったみたい。

その時、みんながほっとした顔をした。

それで分かったんだ。

ぼくさえこの家にいなければ、何の問題もない、みんな、幸せなんだって」

「そんな……っ。

そんなふざけたことあるか！」

忍は思わず顔を上げた。

月明かりの中、藤枝紫朗は泣いていた。

白黒のコントラストのはっきりした眼を見開いたまま、顔をゆがめず、大粒の涙をほおに流していた。

握ったままの手からは熱い力が流れ込んでくる。

いいコだ。

熱くて純粹で。

「もう寝よう。明日も学校がある」

「うん」

そう答えながら、紫朗はベッドに隙間を作って腰を下ろす。

「アンタが寝てから、寝る」

「いいよ、そんなの」

「罪滅ぼし」

月明かりのなか、紫朗は白い歯を見せて、極上の笑みを浮かべた。

すこし。

かなり照れくさい。

でも。

ちよつと甘えると決めた。

まぶたを閉じる。

藤枝紫朗の手は、まるで忍全体をつつみこむように、力強く、温かい。

今日はなんだかすごく恵まれた日だ。

授業サボって、理事長とも食事しちゃったりするし。

そう。

これもあれも。

藤枝紫朗が来たから。

理事長が紫朗に引き合わせてくれたから。

だから、ぼくはきつと、恵まれた子なのだ。

そう思いながら、温かい眠りについた。

明け方。

うとうとと目覚めると、藤枝紫朗は薄明かりの中、まだ忍の手を握っていた。

ほとんど隙間のない忍のベッドに腰を下ろしたまま、ずっと忍を見守っていたようだ。

手のひらが、温かい。

忍の体内に、精神に、紫朗の体温がもう充分に蓄積されている。

「ずっと……起きてたの」

紫朗は答えずに微笑した。

優しい眼だった。

もう窓の外はぼんやりと明るくなっている。

「ありがとう」

忍が言うと、ようやく紫朗は手を離れた。

散らかりきった二人部屋をぐるりと首をめぐらして見る。

「それにしても、こっちからみるとさらに凄い部屋だね」

「片付けるってば」

「ホントウ？」

まるきり信じていないようだ。

「すこしは、片付けているんだけど」

うーん、そうかも？ と紫朗はあまり信じていない口調で相づちを打ち、大きくあくびをした。

「すこし、寝る」

「うん」

すぐに藤枝紫朗の規則正しい寝息が聞こえてくる。

部屋、ぜったいに片付けよう、と忍は決心した。

「ちょっと困ったね」

とさほど困っていないさそうな口調と表情で、稲穂先生が言った。  
むしろがっくりと肩を落とし、困りきっているのは中等部2年a組の生徒たちである。

文化祭の初日が終わって、麻井芙弥也が発案したメイド喫茶は惨敗だった。

喫茶店に改装した教室で、反省会の真っ最中である。

半分に仕切った教室で、寄せた机に、赤と白のチェックのテープ  
ルクロスを敷き、あちこちをレースやフリルで飾っている。

内装は悪くない。

食べ物も飲み物も、麻井芙弥也がこだわったので、けっこう高めの  
コーヒーや紅茶、焼き菓子を仕入れてきた。

問題なのは。

「頑張ったっすけどねえ」

野太い声でメイドたちが言った。

次々と、声変わりをした太い声が頑張った頑張った、と慰めあっている。

まだメイド服のままで、クラスメイトですら、正視できる姿ではない。

はあっと、クラス委員長兼会計担当の、浅葉檸檬がこめかみに指

をあて、ため息ついた。

なぜだかメイド志願者が、いかつい、体育会系の生徒たちばかりだった。

それと。

「そうだよ、ぼくたち頑張ったよ。  
でもなぜかお客さんが逃げていくんだ」

真剣な顔そのもので、麻井芙弥也がきっぱりと言った。

うーん、と微妙な、いやーな空気が流れる。

麻井芙弥也自身は小柄だし、顔も可愛い。  
ただし。

メイド服の上に、なにやら少女戦隊ものの服も来て、ネコ耳とウサギ耳をつけ、でかいリボンもつけ、天使の輪っかもつけ、羽もつけ、なにやら魔女っ子のスティックか何かを持っている。

（どうして誰も何も言わないのだろう）  
（っていうか、早く誰か教えてあげたら）

という視線ばかりが、麻井芙弥也の周囲で行きかうのだが、肝心の当人はその気まずい空気をまったく感知していない。

こうして、中二aのメイド喫茶はお化け屋敷以上に怖い、と評判が立った。

怖いもの見たさの生徒とか、つきあいや義理で入口まではそこそこ人が来てくれるのだが、過剰に（というかキ。ガイのように）着

飾った麻井芙弥也がハイテンションで、

「もえもえびいむ」

とかハートのスティックを振り回したとたん、一目散に生徒も教師も逃げ出した。

とりのこされた芙弥也はきょとんとして目をぱちくりさせ、芙弥也なりに反省をしたのか考えたのか、次の客にはさらに過剰に呪文を唱える……といった悪循環になっていた。

ばん、と音を立てて、浅葉檸檬が帳簿を閉じた。

「赤字だけは、やめよう」

みんな頷く。

そりゃあ、だれだって赤字は嫌だ。

「計算してみた。

そのためには明日、ざっと500人は来てもらわなきゃダメだ」

ほえー、へー、そうなんだ、と感嘆の声が上がる。

天川忍はおもわず考え込んでしまった。

「500人ってかなり厳しくない？

クレマティスの全生徒で600人じゃない」

山奥の学校の学園祭だから、来場者はほとんどが身内である。教職員や卒業生を合わせても、訪れるのは1000人弱。

き、と浅葉檸檬が顔を上げた。

「そう。」

そのくらい厳しいの。だから天川もちゃんと参加してよ」

「え、でも……。」

ぼく、こんなのできないし、ぼく、無理……」

忍はぼそぼそと反論した。

メイド服を実際に見た瞬間、これは着れない、と全身で拒否ってしまった。

おまけに芙弥也が教えてくれた呪文も、忍の感性ではついていけないものではなく、今日一日、誰が何と言おうと裏方に貼りつき、メイド服も着なければ接客もしなかった。

だから、正直なところ、肩身が狭い。

けれど、忍ひとりがメイド服を着たところで、この状況がそんな簡単に変わると思えない。

「そういえば、明日は理事長が来られるとか言っていた。楽しみにしているみたいだったけど」

のんびりと稲穂先生が言った。

「え、理事長が」

忍だけでなく、クラスメイトがざわめく。

みんな、綺麗で優しい理事長のことは大好きだ。

「あのう、スティックはおかしいと思います」

おずおずとひとりの生徒が手を挙げ、ついに言った。  
次々に、戦隊服はいらない、もう少し似合う生徒を投入しよう、  
呪文を見直そう、と提案が出てくる。

浅葉檸檬は要領よく板書をし、まとめていく。

スティックにはじまり、ミミやら輪っか、羽をとりあげられた麻井笑弥也はかなり不満そうだ。

「あとは……やっぱり、天川くんがやってくれないと」  
「うん。」

天川くんに校内宣伝して回ってもらうとか

「チラシ配る？」  
「写真とかどう」

檸檬はこっくりとうなずき、鋭い視線を忍に向けた。

「え、でも、ぼく」

嫌だ嫌だ嫌だ。

忍にできるとは思えない。

でも、せっかく理事長が来てくれるのに。  
それに赤字はまずい。

頭の中がぐるぐる回り、葛藤する。

「わ、わかった……」

忍は折れた。

歓声が上がる。

浅葉檸檬はうなずき、パソコンを開いた。

「じゃあ、これ見て覚えておいて。  
今日ずっと暇だったから、メイド喫茶って何なんだか分析してたんだ。」

いろいろキャラクターの傾向と対策をまとめた。

呪文って、何パターンがあるんだ。

天川によさそうなの、ダウンロードしてあるから  
「う、うん」

忍は細い髪をいじりながら、しぶしぶ頷いた。

浅葉くんて、ものすごく頭がいいのに。

なんかいつも向いている方向が間違っている気がする。

「メイドはこの前の健康診断の結果から、身長の高い順、体重の低い順に選出しなそう。」

それと絶対領域はハズしちゃいけないんだって」

「てなに？」

「ミニスカートとソックスのあいだの、生の手もも」

「絶対、いやあっ」

忍は絶叫した。

笑弥也が忍の手をがしつと握る。

「天川。」

「ばくもつきあうから、ふたりでこの過酷な環境に耐えて、勝ってみせようっ。」

浅葉を見返してやるんだっ」

芙弥也が片手で忍を抱き、片手をつきだしてポーズを決めると、  
おおおおっ、とどよめきが起きる。

浅葉檸檬がため息をこらえて、ぴくぴくとこめかみを痙攣させて  
いる。

どちらかというと、忍の心情や思考はいつも檸檬に近い。  
ぜったいに、麻井芙弥也とは別。  
同じだったことはない。

(どうしよう?)

檸檬に視線で訴えると、ぴっぴと手を振る。

とりあえず、赤字脱出のため、檸檬をのせとけということらしい。

はあああああ。

忍は深く深くため息をついた。

翌朝。

腹をくくった忍がメイド服を着てクラスメイトの前に出ると、どよめきが起きた。

「うわあ、かわいい」

「というか綺麗」

「やっぱり、似合うよね」

露出を極力避けるため、黒の長そでのメイド服に白いフリルのエプロンをつけた。

髪飾りもしろいレース。

スカート丈は超ミニで、見えてもいい(?)という下着をブリーフの上につけている。

黒の膝上ハイソックスを履き、浅葉檸檬の命令にしたがって、絶対領域の部分だけしろくて細い、生足を見せている。胸にはパッドを入れて、ブラジャーをつけている。

「そ、そうかなあ？」

忍はもじもじとスカートの裾を引っ張った。

足がすーすーして頼りないと言っか、落ち着かない。

「天川、腹をくくれ」

メイド服姿で、腕組みをして浅葉檸檬が言った。

責任感の強いクラス委員長兼会計担当は、自分がクラスで2番目に低いからとメイドになると決めた。

もともと小柄で華奢で、顔立ちは女の子みたいだから似合っていると言えば似合っているが、生真面目な仏頂面である。

檸檬の調査によると、メイドには色々なキャラクターがあつて、「ツンデレ」というのはこれでいいらしい。

「ねえ、これ、地味じゃない」

シンプルなメイド服の、超ミニなスカートの裾をはねあげて、麻井芙弥也はくるりと回転をした。

昨日とは比べ物にはならないマシな姿だが、当人的には不満らしい。

「ないないない」

「よく似合っている」

「すっごく可愛いし」

「そうそう、すっごく可愛い。麻井くん、可愛いよね」

クラスメイトから口ぐちに褒められ、根がお調子者の芙弥也は、えへ、本当？ とすぐに上機嫌になった。

他のメイドたちも、今日は小柄で、華奢な子ばかり。

浅葉檸檬がそれぞれの性格に合ったキャラクターを選び出して、一夜漬けでセリフも叩きこまされた。

傾向と対策はばっちりだ。

「本当に浅葉くんて頭がいいのに、方向がなんか違ってあるよね。もったいない」

思わず忍が言うと、

「ぼく、赤字って大っきらいだから」

顔をずいとよせて、檸檬はきっぱり言い、

「じゃ、みんな、作戦通り。  
いいね」

とクラスメイトにむかって声を張り上げると、おーっとときの声  
が応えた。

作戦 A

とにかく昨日の「お化け屋敷より怖い」という汚名を返上しな  
く  
てはいけない。

そのためには校内可愛いコPR作戦である。

アニメ絵が得意なオタクが可愛いメイドのプラカードをつくり、  
それを忍が持つ。

昨夜つくったビラを配るのは芙弥也ともうひとり、愛嬌が良くて  
元気なコだ。

それで校内を一周する。

作戦 B

可愛い声、第一声作戦。

とにかく喫茶店に入らせないといけない。

だから、覗きに来たりしたとき、まだ声変わり前の生徒を集めて、

「お帰りなさい、ご主人さまあ」

といっせいに呼びかける。

それで昨日のように、店の前まできた客を逃がすコトはぐんと減るはず。

作戦C

高いものを頼ませよう作戦。

現実にクレマティスの規模で、500人の客なんてのは無理である。

ということは、ひとりの客に、なるべく高いものを頼ませなきゃいけない。

アンリ・シャルパンティエのフィナンシェ、ダロワイヨのマカロン、レオニダスのチョコレートをテーブルに並べて、稲穂先生に延々と美味しそうに食べ続けてもらう。

これで完璧、とクラス委員長兼会計担当兼メイド兼作戦指揮官の浅葉檸檬はいう。

檸檬自身はすべてを統括するため、喫茶店にはりつき指示を下したり、場合によってはメイドをしたりする。

そんなにうまくいくかしら、と忍は半信半疑だけど、ここまできたらやらないわけにはいかない。

なるべくプラカードに隠れるようにして、おそろおそろ喫茶店から外へ出た。

人通りが多いのは、校舎内より校庭。

模擬店とかが並んだり、ステージでなんかのコンテストやライブ、

イベントをやっている周辺である。

「こんにちはあ、ご主人さまあ」

明るい芙弥也の声に、生徒たちがいつせいに振り返る。

「中2aの教室でメイド喫茶やっていいます。  
ご主人さま、来てくださいねっ」

芙弥也が右に左に、前後左右に分身したようにつぎまわって、  
ピラを配ってまわる。

「へーっ、可愛いじゃん」

「あれ、お化け屋敷より怖いと聞いたけど」

「えー、でもこのコら滅茶苦茶可愛いくない？」

「でも、ウチの生徒だからオトコだろだろ」

わらわらと生徒たちがよってきて、忍のスカートを覗き込んだりする。

「きゃあっ」

思わず忍はスカートの裾を押さえた。

「うわあ、マジ可愛い」

「キミ、この喫茶店に居るの」

上級生たちに囲まれて忍がオロオロしていると、すかさず芙弥也  
が全身でわって入った。

「もっちょーん。  
後で来てね、もえもえ」

芙弥也がハートマークを作って右へ左へふりふりしてポーズを決めると、先輩たちはでれーっとなった。

性格を知らなければ、芙弥也はものすごく可愛い少年なのだ。

「行く行く、絶対行く。  
待ってるよ」

こんな調子で校内を一周して喫茶店に戻ると、すでに満員になっていた。

教室の外まで行列ができています。

席が足りなくなつたから、さくら役の稲穂先生も解放されて、うろろろ、食器を下げるのを手伝ったりしている。

会計をやっている浅葉檸檬と目がばっちりあった。ぐっと親指をつきたてる。

好調のようだ。

うわあつとざわめきが起きた。

理事長が入口に立っている。

忍と約束したとおりに来てくれたらしい。

美しい貌に、にこつと無邪気な笑顔を浮かべる。

「うーん、すごい盛況ですね。

これはやはり並ばないといけませんよね」

惚けた口調で理事長が言うと、いえいえいえいえ、理事長はどうか先に行ってください、並んでた生徒たちが口々に言う。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

理事長が先頭に並ぶと、喫茶店内にいた生徒が飲みかけのジュースを吹き出し、あわてて席を立ちあがった。

「ど、どうぞ」

と席を譲って後ずさっていく。

「ありがとうございます」

理事長が笑顔でお礼を言うと、生徒たちはかつと真っ赤に照れてもごもごとなにやら呟き、逃げ去っていった。

「理事長、お忙しいところわざわざご足労いただき申し訳ありません。こちらのお席へ」

と稲穂先生が案内しようとすると、架奏恭一郎は眉根をひそめた。

「忍くんは？ 忍くんがメイドをするというから、楽しみにやってきたのに」

入り口で突っ立ったまま、中に入ろうとしない。

仕切った黒幕の裏から様子を見ていた忍は、あわてて飛び出した。

「理事長、じゃなくて、その、お帰りなさいませ、ご主人さま」

言ってみたものの、あまりに恥ずかしくて顔を上げられない。両手でスカートの裾をぴつと下にひっぱって、もじもじする。

架奏恭一郎はでれつとまなじりを下げた。

「うわあ、やはり可愛いですねえ。

会食断って来たかいありました。ええと、どうすればいいんですか」

「えええっ？ いいんですか、断っちゃって」

「いいんですよ、お爺さんたちばかりだし、つまらない話だし。学園の文化祭の方がよほど大事ですから」

理事長はいろいろな事業を経営している実業家で、しかも財界にはそうとうに顔のきく実力者らしいと噂を聞いたことがある。

本当にいいのかな、理事長がいいと言っているならいいのかな、と思いながら席に案内する。

メニューを広げると、忍の知っているメニューではなかった。

妙に見やすくなって、メイド姿の萌えキャラがあちこちに書かれている。

スペシャルセット、写真付きなんていうのがいきなり加わっている。

「写真付きってなんででしょう？」

理事長に聞かれても、忍自身が知らないのだから答えられない。忍がうるたえていると、ずっと浅葉檸檬が近づいてきた。

「スペシャルセットをオーダーしていただくと、ご指名のメイドの写真がおまけでつきます。

ちなみにこれが写真です」

浅葉檸檬はズラりと写真を並べた。  
どれもメイド姿の生徒たちの写真で、いつ撮られたのか、忍の  
もある。

「うわあ、可愛い、じゃ、私これにします」

ずい、と麻井芙弥也が割って入った。

「ずるーい、天川ばかり。ぼくの写真も買ってよ。

ね、ご主人さまあ、お、願、い。

もえっっ」

こら、と稲穂先生があわてて麻井芙弥也を引っ張ったが、やだや  
だやだ、と芙弥也はごねて、理事長のテーブルから離れようとしな  
い。

理事長がにつこりと瞳を細めて、メニューを閉じた。

「そうですねえ、忍くんだけじゃ覇気しているみたいで良くないで  
すものね。

わかりました、じゃあ、生徒みんなの分、スペシャルセットくだ  
さい」

え、いいんですか、と忍が言う間もなく、

「やったあ。理事長大好き」

芙弥也が理事長に抱きついた。

えっと、と檸檬がボールペンの後ろで頭をかく。

「そうしましたら、飲み物とお菓子がすごい数になってしまいますが、どうしましょうか」

「それは後でみんなが打ち上げするときに食べてください。」

本当に、ひさし先生が羨ましい。

こんな可愛い生徒ばかりで。

クラス分け、間違えましたかね」

はははは、と乾いた声で、稲穂先生は笑った。

「ええ、まあ、可愛い生徒たちばかりですよ。」

勿論。

みんな大事な生徒です」

なかばやけっぱちのように、でも真実味のある声で、稲穂先生が言った。

理事長はにこにこつれしそうに全員分の写真を持って帰っていた。

それを見ていた生徒たちが、次々に、スペシャルセットを頼みだした。

理事長効果はやはりすごい。

文化祭の終了前に、用意した食材すべて売り切り、メイド喫茶は終了した。

後夜祭の後、制服に戻り、教室を片付け、みなで集まって打ち上げがはじまった。

打ち上げと言っても教室で、理事長が残っていてくれたお菓子や、稲穂先生から差し入れの軽食、売上利益で買った飲み物とかを

みんなで食べたり飲んだりするだけだ。

浅葉檸檬が乾杯をして売り上げを発表し、あとはクラスメイト達はめいめい勝手に気の合う者同士でにぎやかに騒いで、はじけている。

すこしはなれて、稲穂先生がにこにこ様子を見ている。

「やっぱり浅葉くんはすごいね。」

浅葉くんの言った通りになった」

「理事長のおかげだし、その理事長を呼んでくれたのは天川だから、実際には天川がすごいんだ」

つまらなそうな声で、浅葉檸檬は言った。

「え、でも浅葉くんがいなかったら」

「そう、みんな都合のいい時はばくを当てにして、でもばく自身のことは」

浅葉檸檬は言いすぎた、という顔をして言葉を切った。

「ごめん、なんかあまりに上手くいったから、緊張が解けちゃって」  
「うっん、やっぱり浅葉くんがすごいんだよ」

忍が言うと、浅葉檸檬はやはりつまらなそうな、どこか寂しげな顔をした。

褒めているのに。

褒めたつもりだったのに。

ちょっと気になったが、すぐに麻井芙弥也が忍に絡んできたのですぐに忘れてしまった。

この時に、どうしてもっと檸檬のことを真剣に考えてあげなかったのか。

後々、忍は何重にも後悔をした。

文化祭翌日は振り替え休日である。

ぐったりとして寝て過ごす生徒もいれば、まだありあまっているエネルギーをもてあまして、駅前や東京まで遠征する生徒たちもいる。

メイド喫茶の緊張からようやく解放されて、忍は昼前まで熟睡した。

物音がして目覚めると、ちょうど藤枝紫朗が部屋に戻って来た時だった。

昨晚はどこかに泊っていたらしい。

ジャケットをひよいと肩にかけ、タイもはずしたくつろいだ姿である。

あ、と紫朗は軽い声を立てた。

「起しちゃった？

すみません」

「うつん、ちょうど起きようと思っていたところだし」

忍があくびをしながら起きあがると、紫朗は白い歯を見せて笑った。

「すごい人気だったんだって？ メイド喫茶」

「う、うん、まあ、赤字にはならなくてすんだ。

浅葉くんの作戦のおかげ」

「そう？ 天川先輩の人气がすごかったって聞いたけど」

紫朗は意味ありげな眼で笑うと、ポケットから写真を取り出した。

忍のメイド姿の写真。

勝手にスペシャルセットなんて言って、忍が知らぬ間に販売していたヤツだ。

紫朗は写真をぴらぴらと振り、

「いや、これ、オトコに見えないって。すっげー可愛い。

いーよな、こんなコいたらマジやばいかも」

「ちょ、ちよつと、藤枝くんっ。

それ、返してよ」

「返してってオレのだもん。

来てほしくないって言うから、ちゃんとクラスメイトに行ってもらったんだ」

「ダメだつてば」

忍は紫朗から写真を奪い取ろうと腕をのばした。

紫朗が届かないように、手を背に回す。

「もうっ、藤枝くん、からかわないでよっ」

忍はなんとか写真を奪い取ろうと、体をねじ曲げた瞬間、足をPケースにぶつけてバランスを崩した。

藤枝紫朗がとっさに腕をのばして、忍の身体を受け止める。

柔らかい音を立てて、紫朗は忍のからだを抱いたまま、ベッドに倒れ込んだ。

藤枝紫朗の胸は、遅しく、広がった。

男の、くすぐったい甘い匂いがする。

熱を帯びた手が、忍の背に置かれていた。

熱い感覚に、意識がぼおっとなる。  
時間が止まる。

この瞬間が全てのよう。

「大丈夫？」

紫朗の声にはっと我に返った。

「い、ごめん……」

紫朗は両手で忍の肩を押すようにして体を起き上がらせた。  
紫朗にしては珍しく視線を反らして、言いにくそうにしている。

「あのう、前々から言おう言おうと思っていたのだけど」  
「な、なに」

紫朗の口ぶりからして、あまり良い話ではなさそうだ。  
心臓がぎゅっと凍りつく。

「その……」

「うん」

「部屋、片づけない？」

「え」

紫朗は困った眼をして、

「そのう、これは片づけが進んでいる状態？　なのかどうか、ずっと様子を見て悩んでいたんだけど。」

やっぱり生活しづらいし、危ないってのは問題外じゃない？」

忍はいたたまれず、しゅんとなってしまった。

確かに、紫朗が片づけろとしつこく言わなかったので、ちょっとサボっていた。

その間、ずっと紫朗は忍が片付けているのか観察していたとは考えもしなかった。

藤枝紫朗は両手を組んでくるりとかえすと、天上につきあげて伸びをした。

「今日休みだから、手伝う。

一緒に片づけませんか」

「うん」

忍がうなずくと、紫朗は目を細め、人なつっこい笑顔をみせた。

稼働していないPCを紫朗はてきぱきと積み重ね、洗濯済みの衣類はたたんで、きちんとクローゼットに収めていく。

主である忍はぎゃくにおろおると、メモ用紙を右に左に動かすだけだったが、紫朗はなにも言わない。

期待値ゼロを感じて、妙に居心地悪い。

「そういうば、藤枝くんのクラスは文化祭どうだったの」

「ん？ まあまあ」

「何やったの」

「ハムレット」

忍は思わず顔をあげた。

「え、すごい本格的。

時間ないって言ってたのに。

藤枝くんは何やったの」

「ハムレット」

すまして紫朗は言った。

忍はメモ用紙の束を膝においた。

てきばきと室内を移動する紫朗を、目で追う。

意志のはつきりした眼。

浅黒い皮膚の、彫りの深い顔立ち。

均整のとれた、美しい体つき。

まだ男になりかける前の、いずれは凄い美男になると予感させる美少年。

器用だし、優しいし。

おまけに転校してきてそうそうに文化祭で主役をやってしまうなんて。

存在そのものが凄すぎる。

今さらながら、こんな少年と同室に生活していたことが妙に落ち着かなくなってくる。

藤枝紫朗の首筋が、異様に艶めかしく目に突き刺さる。

「どうしました？ 置き場所違う？」

忍の視線に気がついて、教科書やノートを棚に戻していた紫朗が手を止めた。

「う、ううん。」

ちよっと、藤枝くんてすごいな、と思って。

なんか同室に居るの、恥ずかしくなっちゃった」

「へえ、オレのこと、好きになった？」

「え」

好き。

心臓が相づちを打つように、強く鳴った。  
胸がきゅっと締めつけられ、息苦しい。

（好き）

（そう、好きなんだ）

忍の反応に、藤枝紫朗は逆にびっくりした顔をした。  
動作を止めて、忍をみつめる。  
視線がぶつかりあう。

お互いに、動けない。

息もできない。

何も言えない。

沈黙だけが続く。

藤枝紫朗が口を開いた時、館内放送が流れた。  
忍を呼び出している。

「なんだろう、ちよっと行ってくる」

ほっとして忍は部屋から飛び出した。

廊下に出て、深呼吸を何度もする。

――ぼく、藤枝紫朗のことが好きなんだ。

自分の気持ちを知って、戸惑う。

しかも紫朗に知られてしまっている。

どう思ったのだろう。

これから、どう接しよう。

ぐるぐると様々な想いを巡らせながら、階下に降りて行った。

寮監の横に、すらりとトレンチコートを着た女性が立っていた。

忍をみて、嬉しそうに目を細める。

「昨日まで文化祭だったから、今日は休みだと思って。

忍のことだからずっと部屋にひきこもって、PCいじっていたんでしょ」

姉の天川美紗子は快活に言った。

「そんなことないよ、部屋の片づけをしていた」

「ええっ、天川くんが」

寮監がびっくりして言った。

あわてて、しまったと言うように口をおさえて美紗子を横目でみた。

美紗子はくちびるをなか開きにして、はーん、と頷いた。

「相変わらず、ってどこかしら」

「そんなことない、同室の後輩がすごい几帳面で、ちよつといろいろ言われて一緒に片づけていた」

へえー、と美紗子はほとんど信用していない口ぶりで言い、くすつと笑った。

「良かった、元気そうで。」

お昼まだでしょう、食べに行きましょう。外出届はこれだって、はい、ちゃっちゃんと書いて、制服に着替えてきなさい。

変わった校則よね、外出には制服着用だなんて」

寮監から外出簿を奪うようにしてとって、忍に書かせると、ぱんぱんと手を叩いて、早く着替えなさい、とせかす。

三人兄弟の長女。

家族の中ではいちばん気が強くて、仕切り屋だ。

部屋に戻ると、ひとりで藤枝紫朗は衣類をたたんでいた。

「ごめん、姉さんが来たので一緒に食事してくる。部屋、帰ってき  
たら片付けるから」

「お姉さん？ 美人？ 美人だよな、天川先輩のお姉さんなら」

いきなり立ちあがって言う。

予想外につよい食いつきだ。

「うん、美人だと思うけど」

でも、年上か、いや、その方がしっかりしていいかも、とあ  
ごに手を当て、なにやらぶつぶつ紫朗が言っている。

「お姉さんて高校生？ どの高校？」

「ううん、社会人。フルート奏者。」

ヨーロッパで演奏活動している。

ちよつと年が離れているんだ、ひと回りくらい」

そうなんだ、そんなに年上か、とあからさまに紫朗はがっかりし  
た。

それでも、忍が着替えて出て行こうとすると、顔を見るだけ、と  
いいながらぴたりとついてくる。

いつも前向きで活動的だが、ここまで気合が入っている姿は初め  
てみる。

「あのう、藤枝くんて女好き？」

「男なら誰だってそうでしょ？」

それに、オレ、はやく結婚したいから」

「結婚？」

びつくりして忍はオウム返しに返した。

まったく予想外の単語だった。

まだ中学生。

結婚のことなんて考えているコ、他にいるのだろうか。

「なんで？」

「家族が欲しい、というより息子を育てたい、育てなきゃいけないんだ。」

父さんがオレを育てたように」

きり、とした横顔で、紫朗は言った。

へえ、すごいね、ともごもごと返しながらも、どんと気持ちが重くなった。

ロビーに戻ると、美紗子は寮監とにぎやかに話をしていた。

というより、一方的に日本の学校教育やら情操教育やらなんやらまくしたてていて、寮監はあいづちうつ間もない。

やだなあ、もう、恥ずかしいと思っていると、藤枝紫朗が口笛を吹いた。

「たしかに美人。」

年上でもいいかも」

胸が痛い。

姉さんは美人で、褒められるのは悪い気はしないけど、藤枝紫朗が誰かを褒めるのはたとえ姉でも聞いていたくなかった。

忍たちに気づいた美紗子は、あ、と顔を向けた。

すかさず藤枝紫朗は頭を下げる。  
この辺のそつなさは、紫朗らしい。

「天川先輩にはいつもお世話になっています。  
一学年下の藤枝紫朗です」

「あのう、おなじ部屋の、後輩」

ぼそぼそと忍が紹介すると、美紗子は驚いた顔をした。

「あらっ、忍や苓よりよっぽどしっかりしている。  
はじめまして。

忍がいつも迷惑かけているんじゃない？ 末っ子だから甘えん坊  
で」

「いえ、天川先輩は学園中の人気者ですから。  
学園祭でも、あ、そうだ写真」

うわわわわ、と忍はあわてふためいた。  
ポケットから写真をとり出そうとする紫朗の手をおさえこむ。

「なに？」

手を腰にあて、不満そうに美佐江は忍を睨みつける。  
なんだか悪戯がばれたときのよう。

忍はなににも悪いことはしていないのだが。

「な、なんでもない」

「言いなさい」

「え……」

忍が身をすくめて言い淀んでいると、あっ、と美紗子が時計を見

て驚いた。

「こんな時間。限定三十食なのよ、急がないとなくなっちゃうわ。ほら、なに愚図愚図しているの。」

あ、藤枝くん、このコのこと宜しくお願いします、じゃあ、またねー」

ネコの仔のように忍の襟首をつかむと、美紗子は早足で歩きはじめた。

「ちょ、ちよつと、姉さん、なに」

「蕎麦よ蕎麦。」

いまだけ限定三十食セットがあるの。

信州蕎麦。もう、パリに居る時からずーっとネットで調べていたんだから。

食べ損ねたら、忍だって許さないからねっ」

駐車場でレンタカーに押し込められ、スピード違反している速度で車を運転していく。

右に左に振られていく運転に生きた心地がせず、シートベルトをしつかりとめ、てすりにすがりついた。

車で三十分ほど、古民家を改築した蕎麦屋についた。

趣のある、木のテーブルについて、広い庭を一望する。

天気が良い日で、さわやかな風が抜ける。

すごく居心地がいい。

「いいカンジ」

「でしょでしょ、忍と来るの、楽しみにしてたの。」

更科、鴨なん、二人前ずつ、あとてんぶらの盛り合わせ、あ、発

芽そばも」

注文を取りにきた店員もびっくりしている。数えて行くと六人前になる。

「誰が食べるの」

「わたしたちふたりに決まっているじゃない。

蕎麦なんて、腹にたまらないんだし、男の子ならそのくらい食べなさい」

無理だ、というと余計に食べさせられそうで、そばを一心不乱に食べるようになった。

七割方は、美紗子が食べる。

この細い身体はどこに入るのだろうと思うのだけど、フルート奏者というのはものすごくカロリーを消費するらしい。

すべてを平らげて、美紗子はあー美味しかった、満足、とお茶をすすった。

食べ過ぎた忍はすでに気持ち悪くなりかけている。

はい、胃薬、と美紗子に薬を渡された。

薬を渡すくらいなら、腹八分目でやめさせてくれればいいのに、それは許せないらしい。

「それでね、忍、今回帰国したのは」

両手で茶碗をくるんで、美紗子が視線を落とした。

「日本の家が売れて。

その手続きのために私だけ帰国したの」

忍はうなずいた。

「みんな元気？」

「ええ、そうね、元気と言えば元気。」

父さんも母さんも、毎日遅くまでボランティア活動をしている。ひたすら働いている。

苓もいろいろ動きまわっているし。

それでね、みんなで話して、家を売ったお金はすべて忍に渡すことにしたの。

生前贈与という形にして、ちゃんと公正証書も作成して、苓やわたしも相続放棄のサインしたから」

忍は黙ってうなずいた。

こんな時、どういう風にすればいいのかわからない。

お礼を言うべきなのか。

文句を言うべきなのか。

別れたくないと、駄々をこねるべきなのか。

だから、いつも黙ってしまう。

美紗子はほおづえをついて、笑顔を見せた。

実の姉ながら、やはり、綺麗だな、と思う。

「やっぱり、一緒に暮らそっか。」

兄弟三人で

「だめだよ、姉さん、仕事があるじゃない。」

この前、ソロコンサートしたんでしょ」

「ぜんぜんダメ。ボロボロ。」

すごい批評書かれちゃった、猿には木の棒を持たせておけとか何とか。

専業主婦になって忍に養ってもらおうかな」

忍は茶碗をみつめた。

そば茶の表面に歪んだ顔が映っている。

「でも、姉さん、負けないじゃない。

兄さんだって行きたかった大学に行けたんだし」

元々、父がドイツの神学校で教鞭をとる前から、姉も兄もヨーロッパの大学に留学していた。

忍が両親と離れて暮らすためには、兄も姉も人生を諦めて帰国するしかない。

それに演奏活動に打ち込みたい姉も、学業に打ち込みたい兄も、家族のサポートが必要。

兄弟三人で暮らすためには、姉や兄に犠牲になってもらわなければいけない。

それは忍自身、望んでいないし、その重さに耐えきれない。

「ぼく、大丈夫だと思うなあ。

学校、全寮制だし、みんないい人だし。

プログラミングの仕事もね、下請けの下請けの下請けくらいだけで、ちよつとずつ入ってきている。

だから、大丈夫だよ」

美紗子は顔を上に向けた。

ぐつと歯を食いしばって、ぎゅつと瞬きを何度もする。

「分かった。

私たちは会えなくなるわけじゃないしね。

来月には手続きとか全部終わるし、苓と一緒にくるから」  
「兄さんも帰国するの」

美紗子は笑顔を作った。

「女ひとりじゃ不安だろって、言うの。  
あの弱虫がよく言うわよね」

美紗子は持参してきた書類を出して、忍に署名させた。  
今後の為、あちこちに口座を作り、現金だけでなく、国債や外貨、  
投資信託など分散させて資産運用をするようになっていらい。  
忍の、一生分の生活費。  
贖罪の手切れ金。

受け取った方がいいのか、受け取らない方がいいのか、これもよく分からない。

でも、姉さんがやってくれていることだから、と、言われるままに署名をする。

一式の書類を記入して、店を出、車で学園の正門前まで送ってもらった。

「じゃあ、またね。  
来月来るから」

車の窓から手を振って、美紗子は去っていった。

次に会う約束をして、家族と別れるのは初めてだった。  
そして、おそらくこれが最後だ。

日本の家を売却したなら、もう、天川の家族は日本に戻る気はないということだ。

父親の経歴から言っても、数年もしたらドイツで永住権が認められるはず。

兄さんはずっと前から父さんの後を継いで、聖職者になるつもりだ。

姉さんはヨーロッパを中心に演奏活動をして、いつかは結婚するんだろうな、と漠然と思う。

おそらく、そんなに忍のことばかり構ってられない筈。

レンガで舗装された道を、一步一步、跳ねるように歩いてみた。

やはり、どんな感情を抱いていいのか、忍には分からなかった。

部屋に戻ると、愕然とするほど、きれいさっぱりとしていた。

なんだか妙にピカピカしているし、空間も広い。

床もあるし、ベッドの上にはモノがない。

「お帰り」

窓枠に腰をおろして、雑巾で窓拭きしていた藤枝紫朗が笑顔を見せた。

妙にほつとする。

心が温かくなる。

「なんか、部屋間違えたかと思った」

「ずいぶんさっぱりしたでしょ」

「うん、ありがとう、ごめんね」

藤枝紫朗は降りてくると、バケツで雑巾を漱いだ。

「お姉さん、ずいぶんにぎやかな人だね」

「うん。」

家族の中でいちばんしつかりしている。そうじゃないとソリストは務まらないんだって」

「へえ」

紫朗は部屋のあちこちを指しながら、ここに洗濯モノ、PCはここ、ここ、メモ類はここ、と教えてくれる。

卒業までの数年間は藤枝紫朗と一緒にんだ、と今さらながらに気づき、心が温かくなった。

学園には理事長がいる。

クラスにはちよつと問題児だけど、にぎやかな麻井芙弥也もいるし、しっかり者で気の合う浅葉檸檬もいる。

先生も優しいし、たぶん、ぼくは大丈夫だ。

「夕飯に行く？」

「あ、蕎麦、食べすぎちゃって。六人前」

「えっ」

「あ、いや、ふたりでだけど」

「それでもすごい。蕎麦好きなんだ、知らなかった」

「ぼくじゃなくて姉さんが」

「じゃ、オレ一人で食べてくる」

紫朗はバケツを持って出て行こうとした。  
その背に駆け寄る。

「一緒に行く。」

「食べないけど」  
「了解」

藤枝紫朗は人なつっこい笑顔を見せた。

たぶん。

ぼくは大丈夫。

忍は自分にそつと言い聞かせた。

文化祭が過ぎると、山の空気は冷たく引き締まった。

日没も早くなり、期末試験もあるし、なんととはなしに気ぜわしくなってくる。

ほとんどの生徒は年末年始は帰省して、家族とすごすから、その準備も始めたり、家族と連絡をとったりしている。

忍は紫朗に頼まれて、掃除と引き換えに勉強を教えることになった。

決して勉強ができないわけではない。

基礎に戻って説明をすると、要領よく理解して行く。

はつきりしたことは言わないが、言葉の端々を繋ぎ合わせると、クレマティスに来るまで学校に通っていなかったらしい。

それでいながら、転校してきた早々あれだけすばやく周囲にとけこんでいたのだ。

本当に努力していたんだ。

それなのに、忍は自分のことばかりでずい分と冷たい態度をとっていた。

今さらながら酷いことをしたと思うし、紫朗のことがますます好きになる。

心底尊敬する。

藤枝紫朗は学園内で誰も知らない人がいないくらい人気者になり、部屋を空けたり外泊することも多くなった。

それでも朝食と夕食は忍と一緒にとるよう努力してくれる。

どうしても都合の悪い時には、先に連絡をくれる。

たぶん忍の卒業まではこの関係が続くだろう。

だから姉からすべて手続きが終了したと電話があった時も、ずいぶん冷静に対応できた。

もつしょうがないことなのだ、と覚悟を決めた。

霜月の夕暮れ。

空気はすでに冷え切っている。

忍は厚手のコートを着て、ぐるぐる巻きにマフラーを巻いた。

「じゃあ、行ってくるから。

明日、昼ごろ帰ってくる」

「うん、美人の姉さんによろしく」

ベッドに寝転んで本を読んでいた紫朗は、顔を上げずに言った。紫朗には兄弟三人で温泉で一泊して、食事をすると言っている。最終のスクールバスの時間に合わせて、葛籠錦駅前で待ち合わせだ。

スクールバス乗り場に向かうとするが、足が重くなる。

なんでだろう。

姉さんや兄さんに会いたいのに、体が言うことを聞かない。のろのろと歩いていると、

「おや？ 早く行かないとバスが出ちゃうよ」

すれ違いざまに言われた。

思わず振り返った。

甘い残り香が漂っている。

黒髪の流れる、華奢な後ろ姿だ。

一学年上の生徒、葵信吾。

独特の雰囲気をもった、非常に美人な先輩だ。

一時期よくちょっかいを出されたが、すこし、忍は苦手である。

なんだか妙な胸騒ぎがしてくる。

なんだろう？

ぼんやりと考えながらバス停についた。

まだバスは行っていない。

乗り込みかけて、足を止める。

「忘れ物？」

と運転手に聞かれた。

「これ終バスだよ、とりに行っておいで。

戻ってくるまで待っているから」

「うっん、違うんです。

乗るのやめます。ありがとうございます」

忍はなかば走るようにして部屋まで引き返した。

おおよそ、予期していた通り。

室内には葵信吾がいて、紫朗と話していた。

ベッドに腰かけ、やけに硬い表情の紫朗は忍をみて驚いた。

「天川先輩、バスは？」

回転椅子に座って、紫朗のつくえにほおづえをついていた葵信吾

は形の良いくちびるから、ちろりと舌を見せた。

「口がすべっちゃったかな」

紫朗がすさまじい形相で、葵信吾を睨んだ。

「葵、なんとも言っている。

コイツは関係ない。巻き込む気はない」

「分かってる、分かってるって。

本当に口がすべっただけ、まさか気づかれるとは思ってなかった」

奇妙な取り合わせだ。

この二人が一緒にいるのをいままで見たことがないし、紫朗から葵信吾の話を聞いたこともない。

学年も二学年違う。

「だって、ぼくは自分の予定を藤枝くん以外にしゃべっていないし、藤枝くんがぺらぺら他人にしゃべるとも思えないから」

忍はマフラーとコートをはずして、自分のベッドに腰を下ろした。

室内がピンと緊張している。

たぶん、際どい話だ。

他人の目に着く場所では話せないような。

じゃなければわざわざ忍の不在を狙って、計画的に会ったりしない。

でも、なぜこのふたりがそんな話をする必要がある？

「天川先輩、でも、お姉さんたちは」

「いいんだ。もう。」

会わなくても。

会わない方がいいんだ」

紫朗に、というより、自分自身に言い聞かせるように言った。

そうきめてしまった方がすつきりする。

これきり別れる、否、捨てられるのに、どいう顔をして会えばいいのか、分らない。

なんと言っておカネを受け取ればいいのか、分らない。

それに、自分はひとりきりでもなんとかやっていける筈。

「会いに行けよ」

紫朗が立ちあがって怒鳴った。

「あんた、家族がいるんじゃないか。

生きているじゃないか、今、待っているんだろ。

行けよ、会いに行けよ」

「いいよ、もういいんだ。

どっちにしたって、これつきりなんだ。

ウチの家族、みんな海外に移住するんだ。

日本の家ももう売った。

おカネは全部ぼくにくれるって、きょう会うのはそのため。

でも、ぼくは」

「ああっ、苛々する」

紫朗はがっつとクローゼットを開けると、自分のコートを取り出して着込んだ。

「葵、最後の件以外はぜんぶ条件を呑む。

それでどうだ」

葵信吾は両手の指先をつけ合わせて、ゆらゆらと椅子を揺らした。

「異存はない」

「じゃ、出てけ」

「冷たいなあ」

葵信吾は面白そうに言うと、忍をちらりとみてにっと笑い、優雅な身振りで出て行った。

「なにしてんだよ、行くぞ」

「え、だって、バス行っちゃったし。」

もついいんだってば」

紫朗は携帯電話を取り出し、電話をかけた。

タクシーを一台、正門前まで呼んでいる。

こんなことをする生徒ははじめてみた。

茫然としている忍にコートを着せ、紫朗は正門前まで引きずって行った。

「ねえ、藤枝くん、その色々してくれる気持ちはありがたいんだけど、ぼくは本当に」

「いいから行くぞ」

忍ひとりじゃまた戻ってくると思ったか、紫朗はタクシーに一緒に乗り込んだ。

タクシーの後部座席で忍はうつむく。

本当は会いたくないと思っている自分の本心に気づいてしまった。先ほど、バス乗り場に向かった時より、さらに気が重い。

藤枝紫朗が手をのばしてきた。

忍の手を強く握る。

紫朗にも聞きたいことはあった。

どんなつながりが葵信吾とあるのだろうか。

駅前に着いた時には、すでに日は落ちていた。

スクールバスの乗降車口のベンチに、ふたりの人影がいるのがみえた。

通りすぎてから、タクシーを止めて降りる。

姉はまっすぐに顔を向けたまま、もうバスの来ないバス停をみつめていた。

傍らで兄がうなだれ、頭を抱えていた。

「ぼく、本当に会いたくないんだ」

もういちど、忍は言った。

その背を紫朗が押す。

「じゃあ、直接言えよ。」

言えるときに」

はっと気がついた美紗子が立ちあがった。

ほおに涙が流れる。

やはり綺麗だな、と思う。

「来ないと思っていた」

「来たくなかった、本当は」

ベンチで頭を抱えていた兄がびくりと肩を震わせる。

「もう会いたくなかったし、お力ネも欲しくない」

そうよね、とかすれた声で美紗子は呟いた。

「現実にはあなたを捨てるのに、今さら最後に仲の良い兄弟のふりをしようだなんて。

虫が良すぎたわね」

美紗子は書類封筒を忍の手に押しつけた。

「でも、これは受け取っておきなさい。

邪魔にはならないでしょう。

苓、行くわよ。

電車に乗り遅れたら、宿の夕食、間に合わないわよ」

「でも、姉さん」

「行くわよ」

ヒールの音を響かせて、美紗子が歩きだした。

苓はちらりと忍を見て、あわてて姉を追いかける。

「藤枝くん、あの子をお願い」

すれ違いざま、言う。

藤枝紫朗は腕組みをしたまま、美紗子と苓を睨みあげた。

「ふざけんなよ、オレは他人だ。」

血のつながった家族はあんたたちだろ」

「そうよ。」

私たちは自分のやりたいことのために、弟を見捨てるの。この負い目、一生背負って生きていく覚悟はした」

美紗子の背に、忍は叫んだ。

「そんな負い目、背負わないでよ。」

ぼくのことなんて忘れちゃってよ。

だって、ぼくさえいなければみんな仲良くやっていけるんでしょ  
う」

「忍は相変わらず馬鹿ね。」

そんなこという弟を、どうやったら忘れることができるの。

一緒に居ても地獄、分かれても地獄。

ならばあなたに、私たちに未来への可能性を残したかっただけ。

ほら、苓、とつとと行くわよ。

今日は露天風呂で熱燗なんだから」

美紗子はじぶんより背の高い弟をどやしつけて、引きずって行く。  
苓は幾度か振り返ったが、けっきょく何も言わず、姉に引きずられて去って行った。

忍は封筒を抱えたままベンチにへたりこんだ。

横に藤枝紫朗が座って、足を組む。

「悪かったな、おせっかいで」

「ううん。ありがとう。」

いつも藤枝くんには助けられてばかりだね」

藤枝紫朗はかつと真っ赤になった。

「いや……、オレも助けられているし。  
それにアンタってほんとけないし」

しばらくぼうつとしていたが、

「帰ろうか」

紫朗が立ちあがって、真っ直ぐに手を差し出す。  
その手をとった。

「うん」

「せっかくだから歩いて帰らない？  
色々話したいことがあるんだ」

藤枝紫朗はぎゅっと忍の手を握った。

藤枝紫朗は地図も見ずに忍の手をひいて歩いていく。

「藤枝くん、ひょっとして、前にも歩いて帰ったことあるの」

「ちよくちよく。」

遅くなってタクシーとか捕まらないときに」

「え、そうなの」

たしかに消灯時間に部屋に居ないことはあった。

夜中にこっそり帰ってきたり、時には朝、帰ってきたりもしていた。

紫朗はクラスメイトの部屋で話しこんでいた、と忍には言っていた。

「紺野溝近、って知っている？」

「うっん」

「紺良グループ会長の孫息子なんだけど、オレ、その人の愛人やつているから。」

だから溝近さんから呼び出されるたび、寮を抜け出してたんだ」

忍は思わず足を止めた。

まじまじと紫朗の美貌を見つめる。

藤枝紫朗は肩をすくめた。

「そんな顔をしないで。」

溝近さんはいい人だよ。クセはあるけど、カッコいいし、けつこ  
う情もあるし、いい兄貴ってカンジ」

紫朗はひとなつつこい笑顔で、忍を引っ張った。

つられて歩きだすが、気持ちかもやもやとしている。

いくら相手がいい人だからって、なんでこんなキレイでカッコよくて人気者の藤枝紫朗が、愛人なんかやっているのだろう。

「オレの父さん、事業に失敗して母さんと妹を殺して自殺した。本当はオレのことも殺そうとして、でも出来なかったんだ。

紺良の血族には男子を残すのが義務となっている。

そして、すべての男子の名付け親になってくれるのが、アンタが理事長と読んでいるあの人だ」

「理事長？ 理事長は理事長でしょう？」

「紺野良房の血をひくすべての男子の名付け親。

そして紺良グループに君臨する神。

ふつつ、おいそれとは近づけない。

アンタくらいだ。気軽に話しこんでいるのなんて」

「だって優しい人だよ。

すごい気さく。ぼくにとっては唯一話しやすい大人のひと」

紫朗はくびを捻じ曲げて忍を見、言葉を選んで話を続けた。

「でも、人間じゃない。

紺良の血族なら誰でも知っていることだけど。

オレやオレの父親や爺さん、ご先祖さま、みんなあの人の名づけ子。

記憶にある限り昔から、ずっとあの姿のまま、とみな言っている」

忍は返事が出来なかった。

いくら紫朗にそう言われても、忍にとっては優しい信頼できる大人である。

紫朗は公道から細い山道に入った。

外灯もほとんどない、暗い、人通りのない道。

月明かりだけが頼り。

こんなにも月光は明るいのかと、今さらながら驚く。

いままで忍は歩いて帰ったことはないが、駅から学園まで、一、二時間はかかるんじゃないか、と漠然と想像する。

紫朗は何度もこの道をひとりで歩いて帰ってきたのか。

そのなんとかという人に会うために。

紫朗はその人のことが好きなのだろうか。

「だから父さんはオレを殺せなかった。

男の子だから、大丈夫だろう、必ず男子を作れ、と最期に言つてオレは父さんを破産させたヤツのペットとなった。

そいつが本当に欲しかったのは母さんで、それじゃなければ妹でもふたりとしないからオレに全てをぶつけた。

でもオレはそいつに媚びるて喜んでもらうしかなくて、ただ、妹や母さんが生きてなくて良かったとだけ考えていた。

そんな中、溝近さんが計画したりゾート開発にそいつの事業がぶつかって、溝近さんはそいつの全てをブチ壊して、戦利品としてオレを手に入れたんだ。

学校にも入れてくれて、時々、呼び出されたときに会えばいいくらい。

本当に溝近さんには感謝しても感謝しきれない。

でも、オレ、このままでは終わりたくない。

ちゃんと自分の足で生きていきたいんだ」

「うん」

紫朗はいちど口を閉ざすと、しばらく無言で歩いていたが、また、話し始めた。

「学校の敷地の端に、いま、新しい寮が建設されているの知っている？」

「駐車場の向こう？　なんか工事しているみたいだけど、寮なの？　ずいぶん立派そう」

「葵が、さつき部屋に居ただろ？　あの気障で厭味ったらしいヤツ、あいつが香紀をそそのかして建てさせたんだ。

香紀はあのひと——理事長の息子。

来年には入学するんだけど、理事長の座も一緒に引き継ぐらしい。さすがに香紀をみなと一緒にの寮には居させられないって、名目で新しい寮をつくるんだ。

葵はあの寮、丸ごと娼館にするつもりだ。

アイツも過去に色々あった、紺良の血族。

溝近さんともいろいろ因縁があったらしいけど、今のところ手を組んでいる。

年内には完成するって。

その時にはオレもそっちの寮に移るから」

忍は立ち止った。

手が、紫朗の手のひらからすっぽりと抜ける。

急に山の冷気が足元から立ち上ってきた。

藤枝紫朗は白い歯を見せて、笑った。

「だから、部屋、もう片付けなくていいよ。  
それと今までありがとう」

忍の頭は真っ白になった。

姉や兄との別れは、もうとうに覚悟をしていたこと。

でも、紫朗とは、少なくとも卒業までは一緒に居られると思って

いた。

「ぼく、ぼくもその寮には入れない？」

「言ったら、娼館だって。」

アンタには無理だって。その必要もない」

藤枝紫朗は肩をすくめて笑って、手を伸ばしてきた。

「ぼく……」。

ぼく、藤枝くんと一緒に居たいんだ。  
一緒に居させて、せめても卒業まで」

藤枝紫朗の貌から表情が消えた。  
差し出していた手を引く。

「ぼく、藤枝くんのが好き」

「ごめん、アンタの気持ちには応えられない」

紫朗は視線を落とすと、忍に背を向けて歩きだした。

藤枝紫朗の後ろ姿が、夜の闇に消えた。

忍はそのまま山道にへたりこんで、両手で身体を抱えた。  
いきなりいろいろな話を聞かされて、心の整理がつかなかった。

理事長が人間じゃないとか。

いきなりいわれても冗談としか思えない。

それよりも。

代変わりすると聞かされた方が、忍にはショックだった。

毎日は学校には来ていなかったが、それでも時折、理事長の姿を見たり、挨拶したりするだけで、すごく嬉しくてほっとした。

それがまったく消えてしまう。

学校内に娼館が建つということも、信じられない。

次の理事長は何を考えているのか。

どんな人なのだろう。

あの理事長の息子さんならば、そんな変な人ではないと思うのだけれど、なんでそんなことを許すのだろう。

いったい、この学校はどうなってしまうのだろう。

藤枝紫朗と卒業までおなじ部屋で、おなじような関係でずっといられると思っていたのに。

それも崩れてしまった。

紫朗の過去。

紫朗の背負っているもの。

それでも前向きに生きて行こうとしている。

——やっぱり、藤枝くんはすごい。

藤枝紫朗が好き。

その気持ちは変わらない。

だから応援したいと思う。

足を引つ張る真似はしたくない。

忍は立ちあがった。

山の一本道だ。

たぶん迷わずに帰れる。

「やっぱり、自分で立ちあがるんだ」

いきなり声をかけられ、忍は飛び上がった。

すこしはなれた暗闇から、藤枝紫朗が姿を現した。

「い、い、い、いたの」

ばくばく鳴っている心臓を押さえて、ようよう言う。

「そりゃあ。

クレマティスのアイドルになにかあったら、オレ、ただじゃすまないじゃない」

「なにかって？」

「道に迷ったとか、クマに襲われたとか、変質者に誘拐されたとか」  
「……ないと思うし。」

それにぼく、アイドルじゃないよ」

藤枝紫朗は目を細めて、まぶしそうに忍を見つめた。

「アンタって案外、強いんだよな。」

みんなにちやほやされて守られているようで、周りに甘えていないし、相手に迷惑もかけない。

夜遅くまで、パソコンいじっていてオタクかと思っていいたら、あれ、仕事してたんだよな。

散らかった紙もプログラミングのメモで、一方的に片づけるなんて言えるものじゃなかった。

ちゃんと自分の生活費自分で稼いで、勉強もちゃんとして、きちっと生活してたんだ。

みんなに聞いたんだ。

天川忍のどこがイイのかって。

綺麗で優しい、って言われて、正直、嘘だと思っていた。

じっさいにオレにはあまり優しくなかったし、どちらかということばーっとしてるカンジだったし。

でも、アンタ、表面だけ取り繕ったり、その場しのぎのことを言ったり、適当なところで誤魔化したりしないんだ。

いつも心の中むき出しだった。

それで誰も否定せず、嫌悪せず、肯定的に受け入れるから、みんなアンタのことが好きなんだ。

こういう言い方、卑怯だけど、オレ、本当はアンタのことが好きだから」

忍はびっくりして、一、二歩、下がった。

「ちょい、なんで逃げる」

「なんか、信じられない」

だよなあ、と紫朗は呟いた。

「実際にはオレ、アンタの気持ちには応えられないからなあ。

今のオレの財産、この顔と体だけ。

今稼げるなら稼いでおきたい、いつまでも溝近さんに頼ってられないし。

将来は早いうちに家庭をちゃんともって、息子を育てたいし。

でも、だからといって自分の運命恨んだり、家族のこと忘れたり、父さんの想いを裏切ったりしたくない。

オレは前に進みたいから」

忍はうなずいた。

真っ直ぐに紫朗の目を見て言う。

「うん。

ほくも藤枝くんにはちゃんとした家庭をもって欲しい。  
足手まといにはなりたくないよ」

藤枝紫朗は苦笑いして、重い息を吐いた。

「そんなこと言うから、アンタのこと、益々ほおっておけなくなるんだ。

ひとつ、頼みがある」

「なに」

「f寮——こんど建つ寮の名前だけど、ここには関わらないでほしい、絶対に。

虫のいい話だけど、アンタには、やっぱり綺麗なままでいてもらいたい」

忍は返事をしなかった。

紫朗の気持ちはすごく嬉しい。

好きと言ってもらえて、綺麗なままでいてもらいたいと言われ、心底嬉しい。

でも、忍は紫朗と一緒に居たい。

紫朗に結婚願望が強いならなおさら、紫朗といれる時間なんて、本当に今だけしかない。

その間、どんなこととしてでも、一緒に居たい。

「そんなの嫌だ。

だいいち、ぼく、綺麗じゃないし」

「綺麗だ、すごく綺麗」

藤枝紫朗は両腕を広げると、忍の身体を羽交い絞めにした。

温かい。

熱い、体。

藤枝紫朗の体温と、匂いにぼおっとなる。

「頼むからっ。

アンタを、他のヤツの好きにさせたくない」

ぎゅっと、背骨が折れそうなほど、強く抱きしめられる。

「そんなの、藤枝くんが勝手すぎる」

忍はなにもかも覚悟したうえで、紫朗と一緒に居たいのに。

「なあ、こんなことで、もめたくないんだ。  
一緒に居られる時間、あとすこしなのに  
無駄にはしたくない」

それは忍も同感だった。  
頷いた。

紫朗はほっとしたように笑顔を見せた。

忍の手をにぎってぶんぶん振り回し、嬉しそうにはしゃいでいる。  
学校内の誰がどうか、当たり前障りのない話ばかり選んで、にぎやかにしゃべり続けていた。

たぶん、話す内容はなんでもよかった。

こうしてふたりで、ふたりきりで、夜の山道をてくてくと歩いて  
いることが、大事だった。

この時間が貴重だった。

この時の月明かりに照らされた、紫朗の横顔。

冷たく乾いた山の空気の中の、紫朗の体温。

絶対に忘れない。

ただもうひたすら、この道を歩いていた。

藤枝紫朗がそう考えていることも、感じる。

たぶん、ぼくは幸せなんだ。

ぼくは恵まれている。

でも。

それと、紫朗の望むまま、紫朗と離れて綺麗でいるかどうかは、

別問題。

忍の決めることだ。

紫朗は、f 寮に移るまでは、今まで通り仲良くやって行こうと言ったけれど、現実にはやはり、なにかが違ってきた。

お互いに意識的に明るくふるまうだけに、かえってよそよそしく感じるようになった。

もう、部屋を片づけると紫朗は言わない。

逆に、忍が窮屈そうにしていたら、境界線を越えてモノをおけばと促すくらい。

でも、そうすれば紫朗が出て行くことを認めたようで、ぜったいに、それだけではできなかった。

それに何の準備だかはわからないけど、紫朗はやたらと忙しそうだった。

無理して忍と一緒に居る時間を作ろうとしているようだったが、それでも、部屋に居ないことが多くなった。

「今日、遅くなるから。

帰るの明け方かも、先に寝ててね」

夕食後、紫朗が言って、慌ただしく出て行った。

ぼんやりと紫朗が出て行った部屋で、PCに触る気にもならずにいた。

いまに、ずっとこんな風になる。

紫朗が来る前、どうやってひとり部屋で暮らしていたのか、当時の自分が何を考えてひとりで食事をしてひとりで寝てひとりで目覚めていたのか、思いだそうとしても思い出せない。

忍は立ちあがった。

コートを着込んで、第一寮に向かう。

訪れるのは初めてだけど、有名人だから、葵信吾の部屋のことは知っていた。

三階の角部屋。

葵信吾、番場純、と名札のかかった部屋の前で立ち止まる。

ノックをしようとして、すこし、躊躇った。

紫朗は忍がf寮に関わることも、葵信吾と接触することもしないようにと、何度も念を押していた。

忍自身、葵信吾は苦手だった。

不意に人魚姫の寓話を思い出す。

良くないことが起こる気がする。

逆に、これで、紫朗との残り少ない時間までも失うかもしれない。

でも。

ぼくは紫朗が怒っても。

忍に失望しても。

忍のことを嫌いになっても。

今だけは一緒に居たい。

忍はノックした。

乾いた木の音がやたらに響く。

中でなにやら応対する声が出て、扉が開く。

出てきたのは人の良さそうな顔の上級生だ。

「ア。天川忍」

びっくりしたように言う。

「あのう、葵先輩、いらっしゃいますか」  
「いいよ、入ってもらって」

よく通る声が響いてきた。  
上級生はにこりとして、

「どうぞ」

忍を招き入れた。

ソファアの上、ネコ科の生き物のようになやかに横たわっていた葵信吾が体を起こした。

特徴的な、キツイ、切れ長の眼で忍をみつめてくつと笑う。

魔女だ。

人魚姫の声を奪った魔女。

眠りの森の美女に呪いをかけた魔女。

葵の口車に乗ってはいけない、忍の頭の中で紫朗の声が響く。  
でも。

忍は紫朗と共に居たかった。

「すみません、夜遅くに。」

ちよっとお話、ご相談、したくて」

「ウン」

葵はソファーに深くもたれて座ると、すらりと足を組んだ。

「どうぞ」

と自分の横に座るように勧める。

もうひとりの上級生、このひとが番場純だろう、は紅茶を淹れて、サイドテーブルに置いてくれた。

ずいぶん変則的な間取りの部屋。

備え付けのベッドとデスクはふたり分とも、ぴたりと片方の壁に寄せている。

たぶん、このふたりはすごく仲がいいのだろう、と思う。

そうでなければあんなに密接したベッドで寝るのは、苦痛になるはずだ。

そして空いた半分のスペースに、毛足の長い純白のカーペットを敷き、革張りのソファーとガラスのテーブルのセットを置いている。

葵はごくしげんにソファーの背にしなやかな腕を伸ばし、忍の肩を抱くような姿勢をとる。

光る眼にみつめられ、忍は葵を見ることができずに、うつむいた。

「ナニ？」

笑いを帯びた声で、葵が問う。

「あのう、f寮のこと」

「ウン」

「ぼくも入れてほしいんだ」

ひゅつと番場が口笛をふいた。

「やった。これであうやくそろった」

「そろった？」

忍が尋ね返すと、番場はソファ―に腰を下ろした。

忍の方に体を傾け、にこにこ顔をのぞきこんでくる。

「うん。本当に綺麗だね。」

文化祭のメイドも可愛かったけど、やっぱり制服姿がいちばん」

忍はたじろいで身を引いた。

そうすると葵信吾に体がくつつく。

どちらにもいたたまれず、身を細めた。

「B J、残念ながらそう簡単にはいかない」

葵は、忍の髪をつかんでさらさらと流しながら言った。

「どうして。」

葵、天川忍のこと、ずっと狙っていたじゃない」

忍より先に、番場がむくれて言った。

狙われていたんだ。

妙に納得だ。

学年も違うし、何の接点もないのにいきなり話しかけられたり、なれなれしくされたり、そんなことがしょっちゅうあった。

そういえば、藤枝紫朗が転校してきたあと、葵から絡まれることがなくなっていた。

「だってサ、なんで私たちに直接言いにくるの。」

紫朗に言えばいいことなのに。

要は紫朗が反対しているから、こっちに言いに来たんだろ。それって迷惑」

葵はさらさらと忍の髪を弄んでいたが、手を離すと、たちあがった。

「別にいいじゃん、本人が乗り気だもん」

番場純は頭の後ろで手を組んで、ソファーにもたれかかって言う。葵信吾はドアの前に立って振り返った。

「あの紫朗の粘着質で執念深い性格考えてみる。勝手にそんな真似したら、この話、すべてひっくり返される」

「そうかなあ。そこまでするかな？」  
「する。」

アイツなら。

さあ、お帰り。

個人的には歓迎したいところだけど、天秤にかければ、藤枝紫朗はビジネスパートナーとして私には必要。

今の段階で、アイツを怒らせるわけにはいかない」

葵はドアを開けた。

出て行けということらしい。

「嫌だ。」

藤枝くんは関係ない。ぼくは」

葵信吾は片手を腰にあて、首を傾けた。  
長い黒髪がさらりと流れる。

「出て行かない？ キミも頑固だもんね。  
紫朗といい勝負だ。」

じゃ、こっちが出て行く。

B J、行こう」

「えーっ、オレ、もすこし、天川くんの顔を見たい」  
「行くよ」

葵信吾がコートをひょいと肩にかけて出て行くと、番場純もあわてて後を追った。

じゃあまたね、と忍に手を振って、駆け出していく。

変わった間取りの部屋にひとり残され、忍は頭を抱えてうつむい

た。

考えが甘かった。

葵に言えば、あっさりと入寮を認めてくれると思っていた。その結果、どういうことになるうとも、紫朗のそばに居られればいいと覚悟していた。

チャラチャラしているように見えて、葵信吾は真剣なようだ。

口先ではどう言おうと、二学年下の紫朗のことを、ずい分と理解して、対等に、敬意を持って接している。

紫朗もそうだ。

なんだかんだいいつつ、葵信吾に一目置いている。

中途半端に小手先で動いても、たぶん、このふたりの関係に割り込むことはできない。

やはり紫朗を説得しなくては前に進めない。

忍は覚悟を決めて、紫朗と話しあうことにした。

自分の部屋にもどって、紫朗の帰りを待つ。

室内は、いままでにないほど、すっきりと片付いている。

今、散らかすと、紫朗が出て行くことを認めたようで、意地でも散らかすまいと決意していた。

日付がかわり、深夜になっても紫朗は帰ってこない。

明け方に帰ってきたことも何度があった。

ベッドに腰掛け、うつらうつら睡魔に襲われてこっくりとしていたら、藤枝紫朗が帰ってきた。

足をもつれさせ、ほおが上気している。

「どうしたの」

深夜なので、声を押し殺して聞く。

「ちょっと……アルコール」

紫朗の身体が傾いた。

あわてて支えようとしたが、紫朗の体重を、華奢な忍では支えきれない。

ふたりして足をもつれさせ、忍のベッドの上に倒れ込んだ。

ああむけに倒れた忍の上に、藤枝紫朗は覆いかぶさったままごめん、と笑った。

真横に藤枝紫朗の顔がある。

ほおにかかる息がアルコール臭い。

「藤枝くん」

「ん？」

「ぼく、今日、葵先輩のところに会いに行つたよ。

f寮に入りたいって。

でも断られた、紫朗が反対していたらダメって」

藤枝紫朗はくつくと喉の奥で、機嫌良さそうに笑った。

「そうだろ」

「ぼくは藤枝くんと一緒に居たいんだ」

「うん、オレも」

あっさりと紫朗が言った。

聞き間違い？とおどろいて顔を捻じる。

すぐそこに紫朗の顔が、強い目があった。

「でも、いまはダメ。  
もうすこし待って。  
もうすこし待ってくれたら、きっと」

藤枝紫朗の指が忍の髪をつかみ、さらさらと撫でる。  
葵に触れられた時とは全く違う。  
全身が、痺れるように気持ちいい。

「こんどこそ……」

「え」

「こんどこそ、お兄ちゃんがちゃんと」

紫朗は全身の力を抜くと、寝息を立てはじめた。

忍は紫朗の体をおして、両腕を抜きだし、藤枝紫朗の背に回す。  
涙がにじむ。

一瞬の淡い期待が、もろく消えて行く。  
酔って、寝ぼけて、妹と間違えたようだった。

藤枝紫朗の広い背に触れ、硬い髪を撫でる。

夢の中ですら、亡くなった妹を守ろうとしているのか。  
そんな紫朗が哀れで、愛おしい。

決して、紫朗の足手まといになりたいわけじゃない。  
紫朗が父親との約束を守って、男親になりたい夢を妨げる気もない。  
い。

だからこそ、今だけ。  
今だけでいい。

その先はなにも望まないのに。

なぜ、紫朗は頑なに忍を拒むんだろう。

結局、紫朗とは話ができないまま、f寮が完成し、冬休みにこっそりと、紫朗たちはf寮に移動をしていた。

三学期になると、学園内は静かになった。

山奥だけあって、地面には昼も霜がおりたまま。

体の芯まできいんと染み透る冷気に、外を歩く生徒はぐんと減る。

昼休みに校庭で遊ぶ生徒も数えるほど。

放課後、屋外で活動していた体育会系のクラブは室内に活動を切り替えたり、休みに入ったりした。

高校三年生は大学受験が始まり、学校をはなれて東京などでウィークリーマンションやホテル暮らしをしている。

「天川あ、図書棟行こ」

終業後。

もこもこにコートを着込んで、ベレー帽をちょこんと頭にのせた麻井芙弥也が、にこにこしながら誘いに来た。

「うん」

と立ちあがって、忍もコートをきっちりと着て、マフラーを巻いた。

クレマティス学園の図書室はかなり変わっている。

理事長の趣味で、古い洋館を移転してきた赤煉瓦の建物丸ごとが、図書室となっていた。

理事長のコレクションである、革表紙の貴重な洋書も鍵もかけず

に並んでいて、生徒が自由に読めるようになっている。

洋館丸ごと図書室なので、麻井芙弥也は図書室ではなく、図書棟なのだと言い張るが、ふつうの生徒は図書室と呼ぶし、他の校舎から離れた上、山道の上に建つので、もったいないほど利用者は少ない。

藤枝紫朗が寮に移動してから、忍は時間を持て余していた。もともと友人らしき友人はいなかったし、クラブ活動もしていない。

今さら、クラブに入る気にもなれず、本でも読もうかと図書室へ行ってみた。

そこで麻井芙弥也とばったり遭遇した。  
入学以来、図書室に日参していると言う。

麻井芙弥也を図書室に置いておいて大丈夫なのか、他の人に迷惑をかけていないのか、かなりびつくりして、司書の先生にも確認したが、大人しくて礼儀正しい、本の扱いも丁寧でものすごくいい生徒だと言われた。

実際、読書している麻井芙弥也の姿は、教室とは別人だった。

背筋をまっすぐにのばし、両手で本を持って、いちページ、いちページ、きちんと読み進めていく。

読んでいる本も、西欧の著名な古典小説が多い。

それらをきらきらと頬を輝かせて、真剣に読んでいる。

忍が図書室通いをはじめたと知ると、嬉しそうに放課後一緒に行こうと声をかけてくるが、図書室内でとりとめもなく話し続けるこ

とはしない。

洋館の扉を開くと、もわっとするあったかい空気にじんわりと包まれる。

「あったかい」

「あったかいね」

防寒着を脱ぎながら、カウンター内に居る司書の先生に挨拶をして、二階の閲覧室に上がる。

数名の生徒が、点在して本を読んだり、勉強をしたりしている。

忍は今日は勉強をするつもりだったので、数学の問題集を広げた。図書室で勉強するのは邪道だと芙弥也は言うが、そもそも入学以来、忍たちのクラスの勉強が異常に遅れているのは、芙弥也のせいである。

これじゃあダメだとほとんどの生徒が危機感を抱き、自主的に勉強をしたり、頭の良い浅葉檸檬が放課後や夜、勉強を教えたりして、なんとか他のクラスに追いついていけているのだ。

横にならんで座った麻井芙弥也は、ちょっと不満そうに、くちびるを突き出して下目で忍の問題集をみた。

ダルタニヤン物語をいつもの姿勢で広げるが、すぐに閉じて、背をまるめてあごを机に乗せ、忍の問題集をじいっと見ている。

「ぼくも勉強しようかな」

とぼそりといった。

シャープペンスルの芯をカチカチと出していた忍は、思わず手を止めた。

「どうしたの、いきなり」

「大学受験の時、困るじゃない」

「大学……」

麻井芙弥也らしからぬ単語だ。

どうしたんだろう、いきなり。

またどこかで、誰かから、なにかを聞かされて、なにか激しい思い込みをしているのだろうか。

どうして、と聞こうとした時、不意に麻井芙弥也がくびを捻じ曲げて振り返った。

そこに高校三年生の生徒が立っていた。

長身の、眼鏡をかけた、すこし神経質そうで、いかにも頭の良さそうな生徒だ。

「先輩、合格おめでとうございます」

快活に麻井芙弥也が言った。

「凄いですね、第一志望校、推薦で決まりって」

あ、と思った。

クレマティス学園にしてはずば抜けた秀才がいて、医者の子で、有名な医学部に推薦で合格したと、たしかに噂になっていた。

へえ、この先輩なんだ、と思って眺めていると。

「大学には行かない。やめたんだ、やめることにした」

上級生は早口に言った。

奇妙に、焦った、苛ついた目で芙弥也を見下ろしている。

「なに言っているの、先輩。」

だって実家の病院の後継ぎなんでしょう。ストレート合格で将来も決まっただけで

「やめる、やめてお前と一緒に居る。

どこにも行かない」

麻井芙弥也は困ったような、迷惑そうな顔をした。

「でも、だって。

そんなわけにいかないじゃない」

「お前が言っただじゃないか。

ずっと一緒に居たいって」

芙弥也はきゅっとくちびるを噛んで、視線を落とした。

鈍い忍にも、このふたりがつきあっているのだ、ということが分かった。

「もう、いい」

上級生は身をひるがえした。

まったく、ゆるぎない足取りで、まっすぐに窓に向かい、窓枠に昇る。

窓を全開にすると、冬場の冷気がどつと流れ込んできた。閲覧室内に居た生徒が、悲鳴を上げて、顔を上げる。

最期に。

上級生は振り返った。

視線は真っ直ぐに麻井芙弥也に向かっている。

くちもとに、皮肉げな、どこか満足そうな笑いを浮かべ。

そのまま窓の外に身を投げた。

ほんの微かな落下音。

幻聴のような衝撃音が聞こえる。

麻井芙弥也は笑っていた。

透明な。

神々しいまでに透き通った笑みだった。

室内の生徒が悲鳴を上げる。

何人かが窓に駆け寄り、下を覗き込んでいる。

「天川、逃げて」

落ちついた顔で、麻井芙弥也が言った。

震えている忍の荷物をまとめて学生かばんに入れ、防寒着ごとにひとまとめにして、手の中に押しつける。

「今の話、誰にも言わないで。

先輩、誰にも知られたくないって言ってたから」

つややかな、美しい鳶色の瞳が、忍を映していた。

ああ、麻井くんて、すごく綺麗なコだったんだ、と場違いにも忍は考えていた。

「で、でも、麻井くんは」

「ぼくは大丈夫。

だから行って。

天川は噓つけないでしょう」

麻井芙弥也は、大人びた笑顔で言った。

天川忍は図書室から逃げ出した。  
人のいない方、人のいない方へと、人気を避けて逃げていく。

構内にはほとんど人氣がなく、だれも忍を見ていないのに、だれ  
かから見られている気がして、なんども後ろを振り返って確認する。

忍自身が犯罪者にでもなったよう。

ぐるぐるとさまざまなことが、脳裏を巡っている。

（麻井くん）

（麻井くんて）

——すごい嘘つき。

目の前で人が死んだ、しかも付き合っていたらしい上級生が自殺  
したのに、あんなに落ちつきはらっているなんて。

「天川は嘘つけないでしょ」というくらいだから、本人は嘘をつき  
とおせる自信があるんだ。

忍の性格のことも、ちゃんと把握していたなんて。  
いつもはあんなに傍若無人に振る舞っていたくせに。  
ぜんぶ分かってやっていたの？

麻井芙弥也の透き通るような笑顔、艶やかな鳶色の瞳が、脳裏に  
つきささっている。

あんなに綺麗だったとも、気づかなかった。

いたい。

いたい、あのコは誰なのだろう。

あの賑やかで、いつも迷惑をかけてばかりの問題児は、誰だったのだろう。

気づくと構内の外れ、人気のまったくないf寮の前に立っていた。立派な建物だ。

鉄筋の四階建てのマンションのようにつくり。

入口はオートロックで、マンションのようにつくりだ。外側からは、中がまったく見えないようになっていた。

自動ドアが開いて藤枝紫朗が中から出てきた。

忍を見て、ぎゅっと眉根を寄せる。

久しぶりに、紫朗の顔を見た。

胸がぎゅゅと縮こまる。

忘れようとしても、忘れられない感情。

心臓を針で刺されたように、痛い。

「f寮には近づくな、って言ったはずだ」

険しい声で、紫朗が言った。

忍はうなずこうとしたが、震えてうなずけなかった。

コートも着ずに、図書室からここまで、逃げ続けてきた。全身が凍えている。

ぶるぶると発作のように震えた。

「つか、かく、隠れ、隠れさせて」

紫朗が不思議そうな顔をする。

「なにがあつた」

「し、死んで、死んだ、と思う。」

図書室の窓から、ぼく、嘘つけないからって、いま、だれにも会えない、頼まれて」

藤枝紫朗は鋭い視線を周囲に巡らせると、いきなり忍の肩を抱いた。

ひさしぶりの紫朗の熱い体に触れ、血液がどくどくと巡り出す。引きずるようにしてf寮の中に入れる。

オートロックキーを生体認証で開くと、自動ドアが開いた。

目の前には壁があつて、すぐには中が見えないようになっていた。

中は温かかった。

床に、忍はへたりこんだ。

全身の力が抜ける。

コートもマフラーも鞆もそのまま床にばらまいた。

藤枝紫朗は床に片膝をつき、両手で忍の手をくるむように握った。強い、コントラストのはっきりした眼で、まっすぐに忍を見る。

「なにがあつた」

「と、図書室で」

「うん」

「上級生が、……窓から、そのう、飛び降りた」

藤枝紫朗が訝しげな顔をした時。

「関係者以外は立ち入り禁止。  
それとも入寮を決めた？」

揶揄するような声で、葵信吾が現れた。  
B Jこと番場純も一緒だ。

紫朗が立ちあがった。  
きつと葵をねめつける。

「緊急避難だ」  
「ふうん」

片手を腰にあて、意味深な眼で葵は睨み返す。

「図書室で上級生が自殺したらしい」  
「だれ？」

紫朗が忍に視線を向けた。  
たぶんすぐにみなに知られるから、これは言ってもいいだろう。

「名前は知らないけど……有名な人。  
高校三年生で、推薦入学で医学部に合格したって最近よく聞く  
だけだ」

「田儀東弥」

葵は呟くと、「見に行ってくる」と身をひるがえした。  
コートを手に戻ってきて、出て行く。

「オレも」

B Jがついて行こうとすると、

「B Jは残って。」

そのふたり、見張っていて」

「見張られるようなことは何もしない」

紫朗が怒鳴ると、葵はひらりと手を振って出て行った。

忍は手の甲で、ひたいを拭った。

すぐに紫朗に甘えそうになる。

いまさら紫朗に頼れる筋合いは、どこにもない。

「ごめん。迷惑かけて。」

すぐに出て行くから」

「いや、オレももう出なきゃいけない。

落ちつくまで、ここで休んでいろ。

B J、頼んでもいい？」

「まかせてえ」

B Jが能天気な声で言うと、紫朗はマフラーの端を肩にかけなおして去って行った。

知らない先輩と、こんなへんな場所でふたりきりになってしまった。

どうしよう。

妙に気が落ちつかない。

「あのう、中に入りなよ。」

「って、そこまでしかダメだけど」

B」はにこにこと言って、床に散らかった忍の荷物をまとめた。

中が見えないようになっていいるついたてを回ると、広いラウンジとなっていた。

暖色系の、居心地の良さそうなソファや椅子が、数十人分はある。

新聞や雑誌、テレビもある。

「どこでも好きなのとこ、座って。

飲み物、ホットミルク、ロイヤルミルクティ、カプチーノ、ココ

ア、なにがいい？

ほかにももつとあるけど」

「あのう、ええと、じゃあミルクティ」

忍はやわらかなソファに腰を下ろした。

非常に座り心地がいい。

天井も高くて、ものすごい贅沢なつくりになっている。

普通の寮とはまったく設備が違う。

すぐにB」がクリームのかたまり乗ったミルクティを持って戻ってきた。

ブランディの香りがする。

胃に、温かい液体が染みていく。

「この寮、何人いるんですか」

「いまはまだ、三人。本当は」

といいかけて、B」は余計なこと言えないんだ、と肩をすくめた。

忍の向かいに座って、にこにこ忍を眺めている。

余計なことはなにも聞いてこない。

悪い人じゃないんだろうな、と思う。

そうじゃなければ、紫朗が忍とふたりきりにしないはずだ。

そう、紫朗はこの人のことを、信頼しているはずだ。

そう気づくと、とたんに気が楽になった。

この暖色系の空間は、はじめての場所とは思えないほど、居心地がよかった。

「すごい立派なんですね、びっくりしました」

「でしょ。」

葵も紫朗も、根がお坊ちゃまだから贅沢なのかなあ、でも、それでいてケチだから、もー大変。

しかもびみょーにふたりとも数字に弱いし。

でもプライド高いからそれ認めなくて、計算とか合わないんで、毎晩怒鳴りあいの大喧嘩」

うわあ、と忍は身をすくめた。

あのふたりが本気で怒鳴りあっている場所なんて、居たくはない。

「大変ですね」

「ウン、面白いよ」

「面白い？」

聞き間違いかと思って尋ね返した。

BJは足を深く組んでソファーにもたれると、

「ふたりとも顔つきが変わっていくから。」

そうだね、とくに紫朗は、クレマティスに来た当初はすごいピリピリしていたというか、警戒していたじゃない。

いまは日に日に男っぽくなっていくと言っか、顔つきに責任感が出てきたというか。

いい男になるよね。

なんかその過程を見ているんだな、と思うと、楽しいし嬉しいなあ。

わくわくする。

葵もどんどん綺麗になっていくしね、ウン」

「へえ」

言われてみれば、藤枝紫朗の顔つきが変わっているかもしれない。たしかに出会った時には、もっと作ったような笑顔や、鋭い顔をしていた。

いまはどこかしら、頼りになるような、男っぽさが出てきている。

B Jは目を細めた。

「守るものが出来たからかな。  
いいよね、キミたちの関係」

B Jの声は柔らかくて、落ち着いている。

でも、内容がすつとぶので、いまひとつ話についていけない。

どういう意味、と聞いた方がいいのか、流した方がいいのか、迷っている、葵信也が帰ってきた。

よほど寒かったのか、ぶるりと身震いして手で腕をこすっている。

「すごい騒ぎ、って、あれ、こっちまで入れちゃったの。

紫朗は？」

「もつとっくに出ていったよ」

葵がソファに座ると、B Jがすぐにアールグレーを淹れてきた。やはりこのふたり、すごく仲がよさそうだし、呼吸もぴたりと合っている。

「サンキュ。」

いちおう、警察とかレスキュー隊とか呼んだみただけど、ほら、図書室の裏手って崖じゃない。

もう日が落ちるし、たぶん、今日中の搜索は無理だし、おそらくあの高さなら即死だろうって。

麻井芙弥也がなんかやったんだって？」

「え？」

忍はびつくりとして葵の顔を見た。

ふざけたり、冗談を言っている様子ではない。

「何人が閲覧室に生徒がいたらしくて、直前に麻井と田儀東弥が話していたのを見ている。」

口論になって、田儀が飛び降りたとか、麻井が突き落としたとか「麻井くんはそんなことしないよ、してない」

葵は手のひらを忍に向けた。

「そんなの、見りゃわかる。」

麻井のあの体格や性格で出来るわけがない。でも、田儀ってちょいクセがある優等生で、そこそこファンとかいたんだよな。

そのあたりやつかまれたかな？」

葵はあごに手をやりながら、考え込んだ。

「ねえ、麻井芙弥也ってエヴァ・リンの息子？」  
いきなりBJが言った。

はあ？ と葵が吃驚した声を出した。

あ。

やはり、B Jは話が飛ぶんだ、わからないのぼくだけじゃないんだ、と分かってほっとする。

「違うの？ 違うのかなあ。」

この前のメイド姿みて似てるって気づいたんだけど」

うーん、とB Jは考え込んでいる。

「ええと、そのエヴァ、さんて、誰」

「知らないの？ 有名な女優だよ。昔CMにも出ていた。」

ア、写真集持ってくる、待ってて」

ばたばたとB Jが駆けだすと、まったく、とため息をついて、葵が髪を掻き上げた。

「B J、変わっているだろ。」

でも、けっこう信頼できるし、頼りになるんだ」

「そんな感じですね」

B Jが淹れてくれたミルクティを両手で包んで、忍は言った。ものすごく温かくて、美味しい。

すごくいい人なんだろうと思う。

このBJが仲良くしているなら、葵信吾もかなりつきあいにくが、  
そう悪い人物ではないのかもしれない。

すぐにBJが写真集を持って戻ってきた。

海外のものらしい。

英語の、ぶ厚くて立派な写真集だ。

表紙に移っているのは、水着姿で濡れた髪を顔にはりつかせた可愛らしい少女の貌。

——似ている

心臓がわしづかみにされそうなほど、似ている。  
眼だ。

まっすぐにこちらを見つめる、つややかな瞳。  
つまんだような、形の良いくちびる。

麻井芙弥也によく似ている。

思わず写真集を開いて、ばたんと閉じた。  
はだかの女性の写真が並んでいる。

膨らんだ胸とか。

やわらかそうな腰とか。

ざあっと血の気が引く。

「じ、ゴメンナサイ、こういうの……」

くらりとめまいがして、ソファーにぐったりともたれた。

「そんなに過激？」

「うーん？」

B Jがページをめくるのを、葵が横からのぞきこんだ。

「ただのヌード写真集じゃない」

「ヌード写真集じゃなくて、エヴァ・リンの追悼写真集なんだけど、でも、役柄こういうシーンが多かったからかなあ。

読者も期待しているのはこっちだし」

「そういえばなんか覚えがある。ハリウッドの映画女優じゃない？ セックスシンボルのな。

車のCMじゃ意味もなく水着を着替えて、ものすごく話題になった。

なんか父さんが隠れてビデオ見て、母さんに怒られていたような」

「あ、ウチもウチも。

多かったよね、それで夫婦げんかしている家。

クラスの大半がみんなそうだった。

主婦から抗議が殺到して、CMが中止になったつけ。

ええと、この辺なら見れる？」

B Jは服を着た写真が並んでいるページを開いてくれた。

横に、このまえのメイド姿の麻井芙弥也の写真を置く。

見比べるまでもない。

たしかに、よく似ている。

「言われてみれば似ているなあ」

葵が言った。

でしよう、と上ずった声で、B Jが興奮して言った。

「ずっと探していたんだ。

芸能界に居た時、エヴァ・リンが日本で私生児を生んだとかつて噂きいて。

まさか同じ学校に居るなんて思わなかったけど。年からしても勘定があうんだけど。

麻井くんて家族は？」

「そういえば、聞いたことがない。

休みの時はすぐに家に帰っているけど、家族とかの話はしたことはないかも。

探してたって、知りあいなんですか？」

「うっん。顔が好きだから」

生真面目な顔でB Jがきつぱりと言った。

葵が天井を仰いで嘆息する。

「あまり気にしないで。

ちよっとしたビョーキだから。

じゃ、わたしも迎えが来ていると思うから行ってくる」「  
いつてらっしゃあい」

B Jは手をにぎにぎしながら葵を見送った。

そうだ、彼らは今から仕事なのだ、と気づいた。

「あ、ごめんなさい、長居して。

ごちそうさまでした、いろいろありがとうございました」

忍が立ちあがると、寮まで送っていく、とB Jが言った。

「いえ、大丈夫です。」

だってこれから出かけるんでしょう」

「あー、オレ、この顔だし、客とかいないし。  
夜、留守番だから」

ハハハと乾いた声で自虐的に笑って、B Jはがつくりと肩を落とした。

「ええと、そのう」

「ほら、みんな葵とか紫朗のような綺麗な顔がいいわけじゃない。  
オレじゃ人気ないの」

じゃあ、ここで何をしているんだろう、そもそも人気がないと言  
うのもよく分からない。

忍はB Jの顔はいいと思う。

すごい目立つ方じゃないけれど、それなりに整っているし、なに  
より人がよさそうで、信用できる感じがする。

ああ、でも。

葵や紫朗に比べたら、たしかに目立ちはしない。  
比較対象がすごすぎるんだ。

外に出ると真っ暗で、木枯らしが吹き荒れていた。  
身震いして、体をすくめる。

B Jは雲のかかった、重い夜空を見上げた。

「今夜、雪かな。」

搜索活動遅れるかも」

図書室の窓から身を投げた田儀東弥の姿が、網膜に蘇る。  
最期に見せたシニカルな笑顔。  
対して。

見送った麻井芙弥也の澄んだ笑顔。

今頃、麻井芙弥也はどうしているのだろう。

もう寮に戻って、いつものとおりにぎやかにはしゃいでいるのか。

いろいろなことが頭をぐるぐる回る。

黙りこくって歩いていると。

「あのさ、変なこと聞くようだけど。

天川くんて、女性、まったくダメ？」

「え」

「ほらさっき。

写真集をみたときの反応が。

オレなんかは綺麗であれば男でも女でもOKなんだけど。

葵や紫朗は基本はノーマルでしょ」

思わず足を止めてしまった。

ぼかんとしてBJを見上げる。

考えたこともなかった。

BJはきまずそうな顔をした。

「余計なこと、言っちゃったかな」

「そのう、紫朗がはやく結婚して子どもがほしいと言っているのは知っているけど」

忍自身は……。

たしかに、そういう意味で女性に興味を持ったことはなかった。

「ああ、紺良の血族の掟がどうか？  
葵も言っている。

けど、正直、その感覚はオレにはついていけない。なんか別次元の話ってカンジ」

忍は地面を見つめたまま、頷いた。

たぶん。

頭の片隅では、薄々気づいていたこと。

忍は女性に興味はないし。

紫朗はそういう意味では同性には興味ない。  
むしろ早く結婚したがっている。

たぶん。

やっぱり。

忍は紫朗のそばにいちやいけないんだ。  
どうやったって、藤枝紫朗の人生の足手まといになる。

あーっ、とBJが頭をかきむしった。

「余計なこと、言っちゃったよな。

ごめん。

なんかホントに考えなしで」

忍は首を振った。

「うっん。

べつに番場先輩のせいじゃないし」

「BJ」

「え」

「本名嫌いなんだ。」

B Jと呼んで。その方がカッコいいでしょ。」

「ええと、B J先輩……？」

「先輩、知らない。」

紫朗もそう呼んでいるじゃない」

人のいい顔で、いつになく早口に、むっとしてB Jがまくしたてた。

コンコンと忍は空咳をした。

「ええと、そのう、B J」

「なに」

嬉しそくにB Jが答えた。

B Jは嬉しそうだけど、忍には違和感があつて、もじもじと照れてしまう。

ぺこりと頭を下げる。

「そのう、今日はいろいろありがとうございました。  
ここでばく、大丈夫ですから」

すこし離れて、第三寮の明かりが見えている。

できれば人目につかずに、こっそりと寮に戻って、今日はひとりで休みたい。

「あ、ああ、そう」

じゃ、気をつけて、またね、とこによこによB Jは口ごもった。  
なにやら気まずげに、靴の先で、地面を何度か蹴る。  
なかなか立ち去ろうとしない。

忍も離れることができなくなってしまった。

「あのサ」

とB Jが声を落として言った。

「内緒なんだけど、オレがこんなこと言ったなんて知れたら、葵にも紫朗にもメチャ怒られるけど。」

f 寮にちゃんと天川くんの部屋、用意しているから」  
「え」

「紫朗、頑張っている。  
ほんとうにすごく頑張っているから」

ひといきに言うつと、じゃあね、とB Jはf 寮に帰って行った。

忍はぽかんとしてB Jの後ろ姿を見送った。

悪い人じゃないのは良く分かる。

だけど、やはり話が飛ぶ。

忍の部屋があるって。

でも、紫朗はぜったいに忍をf 寮に近づけさせないし。  
それで紫朗が頑張っているって？

いまひとつ。

何を言われたか、分からなかった。

寮に戻ると、いつになく入口の横の食堂には生徒があふれていて、  
みな興奮してなにやら話し込んでいる。

自殺

麻井芙弥也

高三の

と単語がときれときれに聴こえてくる。

寮監や、ふだんは寮に來ない先生たちがいて、必死になってなだめようとしているが、騒ぎは収まりそうにない。

人目につかないようにこっそりと階段をのぼった。

部屋の前。

壁にもたれるようにして立っていた、細い人影が身を起こした。

「どこ行っていたの。

遅かったね」

常に冷静な委員長。

浅葉檸檬が真正面から忍を見つめた。

「浅葉くん、どうして？」

入学式以来、クラスは一緒。

席は前後で、よく話す方と言えば話す方、それなりに仲はいいと思うのだけど、教室の外ではあまり会話をした記憶はない。

檸檬の寮は第一寮だし、いままで部屋に訪ねてきたことはなかった。

「どうして？　すごい騒ぎだよ。  
知らないの」

キツイ口調で、咎めるように檸檬は言った。

知らないわけではない。

その真っただ中に居たのだから。

忍はドアを開けて、檸檬を中に入れた。

できれば会話をしたくはなかったけれど、廊下で人目につく方がもつとまずい。

それに、檸檬は頭の回転が速いし、信頼は出来る。

部屋に入るなり、うーん、と浅葉檸檬は腕組みをして仁王立ちになった。

「凄い部屋だね。  
褒めているんじゃないって」

部屋の整理整頓に関しては、まったくもって、申し開きが出来ない。

紫朗が去ってから、意地になって、部屋半分は空けたままにしている。

どうしてもその空間を侵入することはできなかった。その結果。

忍の専有部分の散らかり方は、紫朗が入寮してくるより前よりも、凄まじいものとなってしまった。衣類などは胸の高さまで積み上がり、時々、雪崩を起こしている。自分でも、どうやって生活しているのか、理解できなくなる時がある。

あれ、と檸檬は眉をひそめた。

「前に、下級生と同室になったって言ってなかった？」

「藤枝くん、出ていったから」

どこへ、とは言わなかった。

聞かれてもどう答えていいか、分からない。

「じゃあ、いまはひとり？」

忍がうなずくと、檸檬は空いているベッドに腰掛けて、へえ、となにかを考え込んだ。

「どうしたの」

「いや、空いているなら、ばく移ってもいいかな、って考えてみたんだけど」

自主性を重んじるクレマティスでは、生徒同士の合意があれば寮の部屋の交換は認められている。

入学時にはランダムに入居させられるが、生活が合わなかったり、相性が合わなかったり、ストレスをためる生徒が多い。

だから生徒どうしで交換する相手との交渉や、同室の相手との話し合いなど、すべてが解決できるのであれば、寮を超えて部屋を移動することも認められている。

檸檬はたしか同じクラスの生徒と同部屋だった。

なにかあったのかな、とも思ったが、深入りしなくなかった。紫朗の為にあげてある空間にも、来てほしくない。

ほんとうは誰かに来てもらって、すっぱりと気持ちを切り替えた方がいいのかもしれないのに。  
やはりそこまで割り切れない。

「それで、ばくに何の用？」

忍は檸檬の横に座って、意図的に話をそらした。

考え込んでいた浅葉檸檬が、はっとなって顔を上げた。

「高校三年生の田儀東弥先輩が図書室で自殺したって。それは知っているよね」

「うん」

「麻井くんが取り調べを受けている。」

閲覧室にいた生徒が、麻井ちゃんと口論しているのを見ていたらしい。

突き飛ばしたとか、そんな話も出ている。  
変だよな?」

忍はうなずいた。

「麻井くんはそんなことしないよ。  
そんなコじゃないもの」

「違う。」

そういうことじゃない。

天川はどこにいたの? 一緒に図書室に行つたでしょ」

浅葉檸檬はくつきりとした眼で、詰問するように忍を真正面から見た。

忍は膝の間で両手を組んで、視線を落とした。  
脇の下に、じんわりと汗がにじみだす。

入学してからずっと、浅葉檸檬の頭の良さには驚かされてきた。  
同い年とは思えないくらい、目端がきく。

学業に専念したり、得意なことに集中していればさぞかし優秀になるだろうに、なぜか些細な感情のやりとりとか、クラス内を平穩にすることとか、そういったことにものすごく神経を配って、頭脳を消耗しているように見える。

こんな山奥の学園に居るより、海外に留学した方がよほど世の中の為ではないかと思うのに、当人にはそういった欲はないらしい。

「はじめ、麻井と一緒に警察に連れて行かれたのかと思ったのだけど、だれも天川のことはなにも言わないんだ。

まるではじめから居なかったみたいに。」

でも、教室を出る時は一緒に図書室に行くって、ふたりで話していたよね」

「警察？ 麻井くん、警察にいるの？」

だって田儀先輩は自殺したんだよ。自分で窓から飛び降りたんだ。麻井くんは何もしてないよ。

室内にいたみんな見ているはず」

鋭い目が、忍をみつめていた。

「その時、居たんだ。

なんで誰も天川のことは言わない？」

忍は背をまるめて、両手で頭を抱えた。

たぶん、口先で誤魔化したって、嘘をついたって、この切れ者の学級委員にはすぐに見破られてしまう。

「ごめん、言えない。

何も言わないって、そう麻井くんと約束したんだ」

「それって世の中舐めてない？ ひとが死んだんだよ。

しかも田儀先輩って志望校に合格したばかりで、自殺なんてするわけないのに。

黙っていたら、もっとすごい騒ぎになると思っけど」

「でも、ぼくは言えない。

麻井くんと約束したんだ」

そう、と檸檬は呟いて立ちあがった。

「ふたりとも世間知らずだから、って、心配したんだけど。どうやら気づいたほうが厄介者なんだね。

いいよ、黙っておく。  
そうして欲しいんですよ」

浅葉檸檬は無表情のまま、部屋を出て行こうとした。  
いつも冷静。

いつも落ちついてる。

それでも檸檬が本当に芙弥也や忍を心配していたこと、忍に拒絶されて傷ついたことが分かった。

「浅葉くん、待って。」

そのう、ぼく、どうしたらいいのか分からないんだ。  
どうしたらいいのか、一緒に考えてくれない。

浅葉くんが来てくれて、ほんと、助かった」

浅葉檸檬は立ち止って振り返った。

いつもとおなじ無表情。

だけど、ほんのりほおが染まって、嬉しそうだった。

「ぼくで役に立つなら」

元の場所に座って、じいっと鋭い目で忍を見る。

とつさに引きとめてしまったが、なにをどう、どこから話せばよいのだろう。

どこまで話していいのだろう。

今さらながら、f寮は居心地良かったし、紫朗、葵、BJと話すのは気楽だった、と気づく。

忍が黙りこくっていると、じれたのか、ぼくの想像だけど、と前置きして檸檬が口をひらいた。

「麻井って田儀先輩とつきあった」  
「どうして知っているの」

びつくりして言うと、やっぱり、という顔で檸檬が何度もうなずいた。

「推測。

まえに田儀先輩が『図書室』でなく『図書棟』と言っていて、麻井とおなじ言い方をするんだ、とひっかかっていた。

あと麻井の読んでいる本で、貸出カードをみると田儀先輩の名前があるものばかりだし。

それでこの話を聞いて、ピンときた」

忍は瞼を閉じて、天井を仰いだ。

やはり檸檬は周囲をよく見ているし、頭もいい。

「麻井が黙っててというのは、ふたりの関係を周囲に知られたくないから。

麻井自身は人目を気にするタイプじゃないから、田儀先輩のことをずっと庇おうとしているんだろっね。

天川は、そうしてくれって麻井に頼まれたんだろ？」

忍ははあっと息を吐いて、肩を落として頷いた。

「浅葉くんはごまかせないよね。

そう、そうなんだよ。

ぼくその場にいたんだ。

でも、麻井くんに『逃げて、天川は嘘つけないでしょ。誰にも言わないで』と言われて逃げ出した。

たぶん、みんな落ちた田儀先輩や麻井くんに気を取られていて、ぼくがこっそり出て行くところなんて見ていなかったと思う。

田儀先輩がいきなり妙なことを言いだしたんだ。

卒業しない、麻井くんのそばにずっといるって。

麻井くんがダメだ、って言ったら、田儀先輩がそのまま窓に向かって」

そのときの光景を思い出して、忍はぶるりと体を震わせた。

「噂では、麻井が突き落としたとか、なにか酷いことを言ったとか言っているけど」

「突き落としてなんかないよ、距離あったし。」

会話はしたけど、麻井くんはなにも酷いことは言っていない」

浅葉檸檬はじいっと空間を睨んで考え込んでいたが、

「このままじゃマズイことになるんじゃない？」

天川、今の話、先生に言ったら」

「言えないよ。」

だって麻井くんに約束したもの」

「あんまり世の中を甘く見ない方がいいよ。」

麻井ってけっこう嫌われているし。

タイミングを外さない方がいいと思うけど」

え、っと、忍は思わず声を上げた。

「麻井くん、嫌われているの？」

誰が？ どうして？」

「どうしてって、どうして嫌いにならないの。」

ぼくもあまり好きじゃない。

でもだからといって、クラスメイトだし、一方的に悪者にされるのも嫌だし。

だから、早めに手を打ちたいんだけど」

忍はびっくりして、檸檬の横顔を見つめた。

「そのう、どこが嫌いな」

檸檬は、え、と驚いてみせた。

「いや、どうして嫌いにならないの。

うるさくて、身勝手に自己中で。

クラス中が迷惑しているじゃない。

麻井がいなければ、いなくなってくれば、なんてみんな一度は考えていると思う」

「ぼく考えたことないよ」

「天川はそうだろうね」

「そのう、ちよつとは迷惑する時もあるけど。

でも、素直だし、根はいいコだし」

「そうやって先生とか天川が庇うから、よけい、苛々させられるんだ。みんなで麻井をちやほやしているのが、嫌なんだよ。」

なんで麻井だけ特別なの、自分だって頑張っているのに馬鹿みたい、って。

麻井の悪口言ったら、こっちが悪人みたいな雰囲気だから、言えずにみんなこらえていた。

それが爆発しかかっている」

忍はどうしたらいいのか考えようとしたが、考えがまとまらない。理事長に相談したい、ととっさに思ったが、やはり麻井芙弥也と

の約束がひつかかる。

「ぼく、そのう、麻井くんのが良く分からなくなった。前までは、見たままの通りと思っていたのだけど」

「見たままって？」

「裏表がなくて、素直であけっぴろげで。」

「すっごく純粹なんだろうなって」

「どうだろ。」

「けっこう計算づくかな、って思う時もあったけど。」

「持ち物とかすごいよね、クレマティスの中でもケタが違うし」

「持ち物って？」

「文房具用品とかハンカチとか、ちょっとしたものでも、ぜんぜんほかの生徒と違うじゃない。」

「コートとか、あれ、百万円くらいするらしいよ」

「うっそお。」

「百万円のコートってあるの。どこが違うの、なにが違うの。一万円のコート百枚の方が良くない？」

「オイオイ、と、檸檬が手をパタパタさせてツッコんだ。」

「反応する場所そこじゃないって」

「麻井くんのお坊ちやまなのかな。」

「家族のこととか聞いたことないけど、なにか知っている？」

「檸檬は拳を握って、口元にあてた。」

「そこなんだよね、いつも引つかかるの。」

「麻井ってあけすけに話しているようで、肝心なこと何も言わないでしょ。」

「いったいどんな家庭に育ったんだろうって興味があって、家のこ」

ととかさりげなくきいてみても、いつも話を逸らされる。

あまりに自然なので、一回目は偶然かなと思ったけど、三回やられて確信犯だな、と気づいたんだ」

「話せない事情があるのかなあ」

BJの推測は本当なのかもしれない。

それにしても三回も聞く檸檬も檸檬だが、その檸檬の追及をかわせる芙弥也も大したものだ。

やっぱり見かけどおりではなかったんだ。

でも、そう知っても、麻井芙弥也のことは嫌いにはなれない。

いま警察だなんて、大丈夫だろうか。

麻井くんのことだから、刑事相手でもいつものようににぎやかにしゃべり続けているのだろうか。

「嬉しいだろうな」

ベッドに深く腰をかけて、両足をぶらぶら揺らしながら檸檬がぼそりと言った。

「そこまで好きな人が、自分と別れたくないからって、ものすごく恵まれているのに死を選んだなら。」

「ぼくだったらすごく嬉しい」

「イヤだよ、ぜったいイヤだよ、そんなの」

とつさに紫朗が頭に浮かび、強く忍は言った。

「ぼくだったら、絶対に幸せになってほしい。」

結婚して、子どもをつくって、ちゃんと子どもを育てて」

檸檬はびつくりした顔で眼をぱちぱちさせた。

「結婚……、子ども……って、そこまで飛ばなくても」

「あ、いや、そうだよね。」

うん、ゴメン」

忍は腰のない髪をもてあそんだ。

「そのう、麻井くんが戻ってきたらすぐに話してみる。

ちゃんと説得する、このままじゃ大変なことになるって。

こじれたら理事長にも相談する。

ありがとね」

浅葉檸檬はひろげた手を胸にあて、ほっと息を吐いた。

やはり、檸檬なりに芙弥也のことを心配していたらしい。

「たぶん、天川の言うことをいちばん聞くと思うし。

じゃね。遅くまでごめんね。

それと部屋、もすこし片づけた方がよくない？

半分余っているなら、とりあえず使っておけば。

これじゃあ麻井の部屋よりすごいよ」

はははは、と忍は笑って誤魔化して、檸檬が出ていくと、ぐでつとベッドに横たわった。

紫朗が使っていたベッド。

気のせいかもしれないが、紫朗の気配や、残り香がまだある気がする。

浅葉檸檬は嫌いじゃない。

ものすごく信頼しているし、尊敬もしている。  
それでも一緒に居ると、妙につかれる。

（f寮、なんか気楽だったな）

B Jは話がしやすいし、葵も、昔ほど嫌ではなくなってきた。  
それに紫朗はそこに居るだけで、すごくほっとする。

（顔つき、変わっていたんだ）

B Jに言われて気づいた。

はじめて会った時は葛籠錦の駅のそば。  
盗んだばかりの白い花を渡された。

今でも、あの花の鮮やかな白さと。  
そのむこうの紫朗の端正な貌が、くつきりとよみがえる。

忍は起き上がってぶるぶると頭を振った。

いまは、麻井芙弥也のことを考えなきゃ。

翌朝。

教室に入ると、田儀東弥の話で持ちきりになっていた。

麻井芙弥也がつきとばしたとか、警察に連行されたとか、どんな話が膨らんでいる。

閲覧室にそのときいたのは何年生の誰それで、その人はこう言っていて、と噂が噂に重なっている。

浅葉檸檬が言ったように、たしかにそのなかに忍の話は出て来なかった。

あのとき自分はまぎれもなくあの場にいたのに。

誰よりも近くで見ていたのに。

透明人間にでもなったように、すっぱりと消えている。

おそらく皆、田儀東弥が身を投げたあとの騒ぎの記憶が鮮明で、その前のことは見ていないのだ。

先生たち、警察、レスキュー隊が来て、騒ぎになって、いろいろな話をしたり、質問されたりした場所にいた生徒だけを覚えているのだろう。

ほんとうは見えていないのに、想像と噂だけで、見ていたかのように話が構成されているのだ。

芙弥也がどこまで予期していたかは分からないが、たしかにこう言った騒動に巻き込まれることに、忍は耐えられそうもない。

ましてやその真ただ中で嘘をつき続けることは、不可能だろう。

浅葉檸檬はなにも聞かないふりをして、予習をしていた。

忍にも話しかけて来ない。  
ぴしっと伸びた檸檬の背に、忍もちゃんとしなきゃ、と気が引き締まる。

稲穂先生が入って来ても、麻井芙弥也の席はぼっかりと空いたままだった。

知っているとと思うけど、と先生は田儀東弥が亡くなったことだけを簡潔に話した。

「麻井くんが殺したってホントですか」

いきなりクラスメイトが言った。  
忍はぎよっとなって振り返った。

「そんなはずがないだろう。  
麻井くんはそんなことをする生徒じゃない、みんなもよく知っているはずだ」

疲れ切った、くまの浮き出た顔で稲穂先生が言った。

「でも、じゃあ、なんで警察に連れてかれたんですか」  
「だって、学校に来てないじゃないですか」  
「麻井が突き落としたのを見たって」

口々に皆が言いはじめる。

背筋がぞつと凍った。

（みんな、本気で言っているの）

（冷静になつて。昨日まで、一緒にいたじゃない。よく知っているじゃない、麻井くんのこと）

「落ちつきなさいっ」

苛々とした口調で、稲穂先生が怒鳴った。

先生が怒鳴るのは初めてだった。

一瞬静まり返って、さらにわっと教室中が騒ぎだした。泣いているコもいる。

思わず立ち上がりかけたとき、檸檬の視線に気づいた。わずかに首を振る。

息を整えた。

椅子に座りなおした。

いま、忍が何かを言ったところで、事態は変わらない。もっと悪化するかもしれない。

——これが群集心理だよ。

忍にだけ聞こえる声で、檸檬がぼそつと言った。

怒鳴るようにして稲穂先生が出欠をとりはじめた。最後まで行きつくときには、さすがに教室も静かになっていたが、不満がみな の体内にくすぶっているのをひしひしと感じた。

その日、いちにち麻井芙弥也は登校してこなかった。

授業が終わると、忍はすぐに麻井芙弥也のいる第二寮に向かった。麻井の名札が出ている部屋をノックすると、ほんの少しだけ、ドアが開いた。

大人しそうな下級生が、「麻井先輩はいません。ぼく何も知りません」と気弱な声で言う。

昨日からさんざん辛い目に会ってきたのだろう。

「あ……」。

ごめん、そうだよな。

ずっと大変だったよね。ごめんね、急に押しかけて」

忍が言うと、うわあんと下級生は声をあげて泣きだして、ドアを開けた。

あわてて名札を確認して、中に入った。

名札には伊藤晋と書かれていた。

部屋の中央はカーテンで仕切られていた。

伊藤側の部屋に入った。

ごく普通の、男の子の部屋だ。

「ええと、伊藤くん、そのう、大変だったね」

伊藤はえっぐえっぐと泣きながら目をこすっていたが、ぴたりと止まった。

「うわあっ、天川先輩？」

と飛び上がった。

「ア、そうだけど。」

ええと、どこかで会ったっけ」

伊藤晋は真っ赤になってもじもじした。

「ぶ、文化祭の時……。オレ、ファンになっちゃって。そうだサインくださいっ」

「サインって、ぼく、そんなことしたことないよ」

伊藤はまったく聞いておらず、興奮して机の引き出しをひっくり返ししながら、忍としては忘れたいメイド姿の写真とペンを探しだした。

「……」

いつもなら、ぜったいにやらない。

でも、非常事態だ。

今後のことを考えるとこのコとは仲良くしておきたいし、そもそも芙弥也のことで一方的に迷惑をかけたなら、忍も責任を感じている。

「あのう、ええと、名前を書けばいいの？  
写真に？」

伊藤はぶんぶんと頭を何度もふって頷いた。

仕方なく、写真に名前を書く。

せがまれて握手もするし、一緒に写メも撮る。

「やったあ。」

オレ、一生手を洗わないし、カノジヨもいらない」

「いや、手は洗った方がいいし、カノジヨも作った方がいいと思うけど。」

麻井くん、帰ってきていないんだよね」

伊藤はこつくりと頷いた。

「なにか連絡あった？」

「なにも。」

もともとあまり会話とかしないし。

本当に同居人という感じで、カーテン引きっぱなしで、お互いに干渉しなかったから」

「開けてもいいかしら。」

あとで麻井くんにはぼくから説明するから」

「天川先輩がそう言うなら」

カーテンを開けて。

「うーん、汚い。散らかっているね」

思わず言ってしまった。

紫朗や檸檬がいたら、暴力的なつつこみが入るところだろうが、幸い、いま、この場にはいない。

「そうなんですよ」

となにも知らない伊藤晋は相づちを打つ。

忍の感性からすると、PCやメモ類が積み重なっていても、散らかっていることにはならない。

洗濯モノが散らかっているのも、生活している以上仕方のないことだ。

だが、麻井芙弥也の部屋には正体不明の雑貨や小物が山積みにな

っている。

ぬいぐるみとか人形、オモチャや木製のゲーム、知恵の輪、ありとあらゆるものが無秩序に散らばっている。

まるで片づけられない子どもの部屋だ。

持っているもののケタが違う、と言った檸檬の言葉を思い出し、小物やおもちゃをひっくり返してみた。

どれもこれもヨーロッパ製である。

よい木材を使用して、丁寧に細工のされた手作りのオモチャばかり。

机の上にある鉛筆や消しゴムも、気づいてみれば芙弥也が使用している以外の場所では、見たこともない。

手に取ると、妙にしっとりした重みがある。

どこの製品だかわからないが、かなり高そうだ。

「麻井くんてふだんはどんなだった？」

振り返って伊藤に聞いた。

ビクリとして伊藤は身をすくめる。

「そのう、ホント、オレ、何も知らなくて」

おどおどと言った。

「あ。

あのう、ばく、麻井くんとはずっと同じクラスで、だからよく知っていることは知っているんだ。

ただ、教室にいる時の麻井くんてすごい賑やかで、あのテンション

ンで寮でもしゃべり続けていたら大変だろうな、って思ってた」

伊藤は首を振った。

「食堂とかで見かけた時は賑やかだったけど、でも、部屋の中にいる時は静かだったです。

カーテンで仕切っちゃってて、よくわからないけど、本を読んでいたみたい。

部屋にいる時間も長くなかったし。

週末とか休みは家に帰っていたし。

全然、先輩っぽくなくて、大人しくて、楽だずっと思ってたんだけど」

忍はぐると麻井の部屋を見わたした。

玩具箱の中にあるような部屋。

賑やかで、素直で明るくて。

無性に、麻井芙弥也の無邪気にしゃべり続ける声が恋しい。

忍は麻井芙弥也の机に、帰ってきたらすぐに連絡をくれ、とメモを残した。

伊藤にも、麻井が帰ってきたら、忍のところにすぐに来るように伝えてとお願いする。

死んでも伝えたと真顔で言う。

忍はようやく安心して、自分の部屋に戻った。

浅葉檸檬の言ったように。

まだ世の中を甘く見ていた。

終業式が済み、みじかい春休みが終わると、一挙に学園は賑やかになった。

初々しい新入生たちが続々と寮に入ってくる。

山の小枝にも、透き通る新緑の葉が芽吹き、きらきらと春の陽光を反射させる。

一学年あがり、忍は中等部では最年長となった。

アスコットタイの色も変わる。

本来なら気合が入って活気が出てくるはずなのに、ものすごく気が重い。

忍だけではない。

新中三a組は奇妙なほどに静かだった。

理由は誰もが分かっていた。

皆がみないように、話さないようにしている、麻井芙弥也の机だった。

休み明けに、中身が空っぽになっている。

名簿からも消えている。

疲れきった顔の担任教師は口数少なくHRを終わらせ、みなを講堂に急きたてた。

あの事件から、時間が立って、みな、冷静になった。

誰もが、本心では麻井芙弥也が人殺しなんかしないことを、分かっていた。

熱病に犯されたように、芙弥也を罵った自分の言動を思い出した

くないと、自分の行動から逃げている。

それは天川忍もだった。

いや、忍の責任はただ芙弥也を悪く言っただけ生徒たちより、はるかに重い。

忍が教師にちゃんと説明をすれば、こんなことにはならなかったはずだ。

けっきょく、麻井芙弥也からの連絡はなにもなく、というより、いちども寮にすら戻ってこないまま、転校して行った。

忍は浅葉檸檬を視界に入れないように、逃げ続けた。

浅葉檸檬の視線が、表情が、背中が、忍を責め続けているように見えた。

——ぼくは言ったのに。

——キミが甘いから、こんなことになったんだ。

現実には、檸檬はなにも言わなかったが、無言のプレッシャーをかけ続けられている気がする。

幻聴のように、檸檬の声を聞く。

講堂では校長のあいさつの後、理事長が交代したと紹介があった。

そういえば、紫朗がそんなことを言っていたな、と思い出した。講堂内がざわめく。

耳障りな金属音を響かせながら、銀髪の少年が金属の松葉杖をついて、演台に立った。  
異形の少年だった。

銀の髪に、濃いエメラルドグリーンの瞳。  
人形のような、人工的な皮膚をしている。  
クレマティスの制服を着て、中学一年生のタイを締めている。

新理事長は変声期前の甲高い声で、用意された原稿を読み上げた。  
視線を一度もあげない。

生徒たちを見ることもない。

誰かが用意したのであろう、就任挨拶を棒読みすると、またそのままガシャガシャと松葉杖の音を響かせて、下がっていった。

なんなのだろう、あのコは。

なんとはなしに、イヤな感じが残る。

理事長は遠い存在で、直接生徒にかかわったりはしないけれど、でも、あの優しい綺麗な理事長がこの学園のトップだと思うだけで、なんだか安心できた。

そもそも入学してきたばかりの、中学一年生が理事長になると言うのもイヤな感じだ。

あの声も。

そっけなさも。

松葉杖の音も。

なにひとつ、好感を持ってない。

忍は膝の間で、両手を固く組み合わせた。

もう理事長には会えないのだろうか。

じぶんにできることは、何もないのだろうか。

麻井芙弥也と約束をしてしまったまま、檸檬がせっかくアドバイスをしてくれたのにもかかわらず、なにもしなかった過ちを、償う

ことはできないのか。

稲穂先生はなにひとつ芙弥也のことは触れずに、一日目を終わらせた。

誰も、なにも質問しなかった。

答えを聞くのが、怖かったのだろう。

掃除当番の生徒は残り、あとの生徒は静かに、逃げるように教室を出ていく。

いったい、このクラスはどうなってしまうのだろうか。

ぼんやりしていると、浅葉檸檬が教室を出ようとして足を止め、振り返った。

忍を見る。

とつさに目を逸らせた。

浅葉檸檬の、糾弾するような視線から逃げ出す。

誰にも会いたくない。

誰とも会話をしたくない。

すべてから、逃げていたい。

そのまま人気がない方へ早足に歩いて、校舎内の端へ来た。

これからどうしようかと、ぼんやり考えていると、ガシャンガシャンと耳障りな金属音が響いてきた。

新理事長の架奏香紀が、松葉杖をつきながら忍の前を通り過ぎる。横には架奏恭一郎がいた。

ものすごく嬉しそうに、息子にまわりつきながらしゃべり続けている。

穏やかな笑顔。

懐かしい声。

「あ、あの、あのう、理事長。  
すみません、ぼく、お話が」

忍がおずおずと呼びかけると、架奏恭一郎はぱつと振り返って、  
笑顔をみせた。

「なに」

とキンキンに響く声で、つつけんどに言ったのは架奏香紀だった。  
歩くのを止め、濃いエメラルドグリーンの瞳でキツく睨むように  
忍を見る。

「ぼくが理事長だよ」

舌足らずな声が言う。

「ああ、そう、そうなんだけど。  
そうじゃなくて、ええと、その、そうじゃなくて」  
「ぼくが理事長だ。  
ぼくが聞く」

幼い理事長は、意固地に言い張った。

（どうしよう）

忍は困った。

麻井芙弥也との約束を破っても、やはり真実を架奏恭一郎には伝  
えたい。

伝えなきゃいけない。

それがいま、忍にできる唯一のこと。

でも、この幼い、あたらしい少年にその話を聞かせたくはない。

笑弥也の個人的な話を、誰にも言わないと約束した話を、新しい理事長だろうと、恭一郎の息子だろうと、聞かせる気にはなれない。

「わたしに話があるのですか」

穏やかな声で、架奏恭一郎は言った。

忍はうなずく。

「香紀、寮に戻りなさい。」

わたしが忍くんの話を聞きましょう」

ガンッ、と、香紀は松葉杖で大きな音を鳴らした。

「ぼくが理事長なんだ。」

パパは関係ない」

架奏香紀は小さい身体を反らして、心底怒ったように、ぎらぎらと、架奏恭一郎と忍を交互に睨みつけた。

「そのう、ごめんなさい。」

ぼくの言い方が悪かったんだ。

ぼくが言いたかったのは、理事長、じゃなくて、前の理事長に個人的に相談があつて。

そのう、理事長だから相談したいんじゃないんだ。

ごめんなさい」

忍はきゅつと身を縮こめて、頭を下げた。

「忍くん、頭をあげて。

香紀、行きなさい」

架奏恭一郎が諭すように言うと、

「知らない。

勝手にすれば」

吐き捨てるように言って、架奏香紀はガシャガシャと金属音を響かせながら、去っていった。

「ごめんなさい。

ぼく……、傷つけてしまったかしら」

「構いませんよ、香紀は反抗期なんです。

ここ五十年くらい、わたしの言うことをちっとも聞いてくれなくて」

ため息をつきながら架奏恭一郎は言って、理事長室へ忍を案内した。

「冗談、と理解するが、真顔で心底困ったように言うので、笑っていいかどうか分からない。

「笑弥也くんのことですよね」

架奏恭一郎の問いに、忍はうなずいた。

理事長室の応接セットに、架奏恭一郎と向かい合って座った。藤枝紫朗がクレマティスにやってきた昨年の秋、ここでふたりで昼食をとったことを懐かしく思い出す。

理事長室はこじんまりとした部屋で、年代物のしつかりとした、机やクローゼット、本棚、応接セットがほどよい空間を保って、配置されている。

左右の窓からは、学校内の全景と正門から寮までのなだらかな上り坂がみえる。

架奏恭一郎は優しい微笑で、いつも、このふたつの窓から生徒たちを見守っていた。

飴いろの、落ち着いた室内は架奏恭一郎によく似合う。

あの銀髪の少年も、ここでおちつくようになるのだろうか。よくわからない。

もうこうして理事長とふたりで会話することも、できなくなる。そう思うと、とてつもなく寂しくなる。

「理事長が交代されるなんて、びっくりしました。すごく寂しいです」

架奏恭一郎は微笑した。

「忍くんにそう言ってもらえると嬉しいです。でも、私より香紀が理事長になる方が生徒の為になると思っています。」

香紀はこれからずっと学校にいますし、やはり学校に居られる時

間が短い私より、生徒のこともよく見れるでしょう」  
「そうでしょうか」

思わず忍は言ってしまった。

さすがの恭一郎も複雑な顔で、黙りこむ。

このひとは新しい理事長の父親でもあった。

「ご、ごめんなさい。」

そのう、新しい理事長がどうというのではなくて、みんな理事長のことが好きなんです。

理事長が学校にいないと寂しいし、不安で」

「そう言ってもらえるのは嬉しいですけど。」

まあ、香紀もまだまだ子どもですから、いろいろ勉強しなくては  
いけませんし。

忍くんも宜しくお願いしますね」

気まずい沈黙がおちた。

忍はジャケットの上から、腕をこすった。

口がすべって、余計なことを言ってしまった。

最近、なにもかも、うまく回っていない。

自分がものすごくダメな、世の中で価値のない人間のような気が  
してくる。

「それで、麻井くんのことですけど。転校したって本当なのでしょうか」

ようよう忍が切り出すと、架奏恭一郎はうなずいた。

忍はあの日、図書室で起きたことをいつきに話した。

薄々予想はしていたのだろう、理事長はとくに驚いた風はなく、  
じっと忍の話を聞いている。

「麻井くん……、麻井くん、なんにも悪くないんです。

ぼく、ずっと本当のこと知っていたのに、麻井くんに口止めされて黙っていました。

浅葉くんにも忠告されていたのに、ふかく考えていませんでした。こんなことになったの、すべてぼくのせいです」

「忍くんのせいではありませんよ」

「でも……」。

麻井くんはいま、どこで何をしているのでしょうか。元気なのですか」

架奏恭一郎は両手をひじ掛けに置き、漆黒の瞳でじっと忍をみつめた。

闇の色の瞳。

どんな過ちも過去も覆い隠し包みこんでくれる、優しい瞳。

やはりこの人がいたから、忍はこのクレマティス学園に来たのだし、そうして忍の家族は救われた。

この理事長の代わりは、他の誰でもできない、と思う。

「元気ではありません」

恭一郎の言葉に、忍は思わず息を呑んだ。

「正直なところ、わたしもどうしていいのか分からず迷っています。前に、わたしはある少年を守ろうとして、手を出すたびにその子の人生を狂わせてしまいました。

最後にわたしが最も信頼している人にもう手を出すなと怒られ、その子も自分で自分の身を守れると自立をしていきました。

芙弥也くんのことともどうすればいいのか、わたしには分からないのです」

忍は思わず恭一郎の顔をみつめた。

「ぼく……」。

ぼくは、理事長は何でも知っていて、なにも迷わずに、いつでも生徒たちの為になる、正しいやり方を知っているのだと思っているのですけど」

恭一郎は寂しげに笑った。

「本当にそんな万能な、神様のような存在だとしたらどんなにいいか。」

わたしにはなにも分かりません。

正しい答えも分からないし、ただ見守るしかできないのですよ。

失望しました？」

忍は首を振った。

「だって、理事長はぼくを救ってくれたじゃないですか」

「それが本当に正しかったのでしょうか。」

結果として、忍くんは家族と離れてしまったではないですか。

どんな状況であっても、家族と共に居た方が良かったのかもしれない。

わたしはいつも迷ってばかりですよ」

「ぼくは救われました。」

それに、見守ってくれているだけで、いいんです。みんな理事長のことが好きなんです」

架奏恭一郎は驚いたように身を反らして、息を呑んだ。  
いきなり、くっくと笑いだす。

「忍くんにはかないません。

ほんとうに忍くんはいい子ですね。

だからみんな忍くんのことが好きなのですよ」

「ぼく……、ぼく、どうなのでしょう。」

麻井くんのこともなにもできなかったし。

時々、ぼくなんか生まれていなければ良かったんじゃないかと思っています」

「忍くん？」

架奏恭一郎は哀しげに瞳を閉じた。

広げた手で顔を覆い、じっと考え込んでいる。

忍は汗ばんだ両手をこすり合わせ、固く握りしめた。

一秒一秒が長い。

「わたしは……、やはり、わたしは芙弥也くんの人生に直接、関わることはできません。

ただひとつ、理事長としての最後の仕事として、芙弥也くんをとり返してきます。

あとは生徒たち、みんながそれぞれ向き合っていくのに任せます。その先のことは、芙弥也くんを攻撃した生徒たち、忍くん、芙弥也くん自身がどう生きていこうとするかに、任せましょう」

忍は頭を下げた。

「ありがとうございます」

「礼を言わなくてはいけないのは私の方です。

芙弥也くんも名づけ子のひとりですから、ずっと気にはなっていました。

ただ自分ではどうしていいのか決断できずにいました。

このまま香紀に託して行こうとも思っていたのですが。

忍くんのおかげで決心が出来たのですよ」

「理事長、また会えるでしょうか」

架奏恭一郎は微笑んだ。

「忍くんが必要としてくれればいつでも。

鼻肩しちゃいけませんけど、でも、忍くんと話すのは本当に私、楽しいんです」

忍は理事長になんどもまた会いたいと約束をさせて、理事長室から出た。

麻井芙弥也がクレマティスに戻ってくる。

理事長が取り返してくれると言ったら、必ずしてくれるはずだ。忍はずい分と気が楽になった。

芙弥也が戻ってきたら、前よりもずっと仲良くしよう。あのとりとめのないおしゃべりも、ずっと付き合おう。また一緒に図書室に行こう、いや、それは芙弥也が嫌がるかもしれない。

そうしたらなにか他のことをふたりでやってもいい。

家のこととか、お互いのこと、もうすこし会話もしよう。ちゃんと話しあって理解をしよう。

なんだかんだ言っていたけど、やはり忍は麻井芙弥也が好きだった。

迷惑でもあったけれど、あの賑やかさや無邪気さがないとさみしい。

もう少し、芙弥也がみなとうまく折り合っていけるよう、忍も努力をしよう。

将来に向けてところが広がっていく。

だが。

戻ってきたのは、前の麻井芙弥也とは別人、一言もしゃべらない、世界と壁を作り、繭に閉じこもったような少年だった。

はじめ、それが麻井芙弥也だとは分からなかった。  
忍だけじゃない、他の誰もが認識できなかった。

その少年は空っぽだった麻井芙弥也の席に、いきなり現れて座った。

髪はぼさぼさ。

分厚い眼鏡をかけて、サイズの合っていないダボダボの制服を着て、この世界にまるでただ独りで存在しているかのように教室に入ってきた、麻井芙弥也の席に座った。

すぐに本を取り出して読みだす。

周囲がガヤガヤと騒いだり、話しかけても反応しない。  
まるきり聴こえていないようだ。

本を読む姿勢。

視線の進め方。

ページをめくる指先。

麻井芙弥也だった。

忍は息を呑んだ。

「麻井くん？」

教室が静まり返った。

その少年は皆が知っている麻井芙弥也ではない。  
こんな静かで、無口な少年ではない。

それとも、これは麻井芙弥也流のおふざけのひとつなのだろうか。

「麻井くん？ 麻井くんだよ、元気だった？  
ずっと心配してたんだ」

忍は芙弥也の机に手をかけ、勢い込んで話しかけた。

麻井芙弥也は反応しなかった。

ただ視線を走らせ、ページをめくる。

その紙の音だけが、静まり返った教室に響く。

聴こえてないのか。

聴いていないのか。

「麻井くん……」

忍の腕を、浅葉檸檬が握った。

ほおっておけと言う風に、あごをしゃくる。

始業の鐘が鳴って、稲穂先生が教室に入ってきた。なにも説明をせずに、出席をとりはじめる。

麻井芙弥也の名を読んだ。

少年は返事をしなかった。

それでも先生はなにも言わずに浅葉、天川、と読み上げていく。

稲穂先生だけではない、その後の、授業でも教師は麻井芙弥也の発言を求めなかった。

芙弥也は授業中もただひたすら、持参してきた本を読んでいた。  
そのことを注意する教師もいなかった。

この時点で、麻井芙弥也は完全に世間から心を閉ざしてしまったことを、クラス皆が身をもって知った。

自分自身の無責任な失言と、一方的な糾弾の結果を、皆が突きつけられているようだった。

ただし、このクラスに芙弥也が戻ってきたことだけは間違いなく、名簿や出席番号票、すべて修正がされていた。

それだけでも忍は充分だと思った。

同じクラスに戻してくれた。

やり直せるチャンスを与えてもらえた。

それで充分。

この理事長の信頼に、応えたい。

昼休みに、忍は芙弥也を昼食に誘った。

だが無反応だった。

ただただ本を読み続けている。

「ほっときなよ、ひとりで居たいんだろ」

つつけんに浅葉檸檬が言った。

檸檬に誘われるまま、ふたりでカフェに入る。

サンドウィッチセットをテイクアウトして、校庭わきの木陰で広げた。

忍はどんな形であれ芙弥也が帰ってきてくれて、ようやく後ろめたさなく檸檬と会話ができた。

「当人は幸せなんだろ、もう天川もあまり構うなよ」

浅葉檸檬はストローを強く噛みながらコーラをすすり、辛辣に言った。

「幸せ？ あれが？ どうして」

「だって、あの制服。」

「見ただろう」

「うん、全然合ってたない。」

「どうしちゃったんだろ」

浅葉檸檬は呆れた顔をした。

「だからさ、田儀先輩の制服なんだろう。」

自分の為に死んだ好きな人の服を着て、その人の本を読んで、その人の世界だけで生きていけるんだからいいんじゃないの。

もうほっとけよ」

「でも……。」

まえの麻井くんとは別人じゃない」

「そう？」

まったく変わってない気がするけど。

一方的で、自分勝手。

まわりことなんて何も見てやしない。

まるで赤ん坊。何も変わってないよ」

浅葉檸檬はサンドウィッチのハムが噛み切れないとヒステリーを起こし、食べかけのサンドウィッチを投げやりに紙袋に戻して、ぐしゃぐしゃに丸めた。

「食べないの？」

「お腹すいちゃうよ」

「天川なんかした？」

校庭では早めに昼食を終えた生徒たちがサッカーボールをけつたり、鬼ごっこをしたり、走り回っている。

天氣の良い、穏やかな春の午後だった。

忍は口に含んだパンを、いっきに飲み下した。

「なにかって？」

ようよう言う。

「だから。」

なんでいきなり麻井が戻ってきたんだよ。

転校したはずだったろ。

それでみんな忘れかけていたのに。

なんでわざわざ麻井なんかを呼びもどすんだよ」

忍は食べるのをやめ、浅葉檸檬に向き直った。

檸檬の真意が分からない。

麻井芙弥也が戻ってきたのが嫌なのだろうか。

もともと檸檬が、芙弥也や忍のことを気にしてくれてたじゃないか。

「たしかに。」

ぼく、理事長に全て言ったよ。

麻井くんと約束も破った。

そのことはいつか、ちゃんと、麻井くんに説明して謝る。

理事長も麻井くんのこと気にしていたから、麻井くんを取り戻してくれた。

あとはぼくたちが、自分と向き合って」

「なんでそんな余計なことしたんだっ」

忍を遮って、檸檬はいきなり叫んだ。

「みんな怖がっている。

いまの麻井を見て、忘れたい過去をつきつけられて、不安定になっている。

なんで今さらそんなことしたんだ？」

「ぼくは……。

ぼくはどんな状態であれ、麻井くんが戻ってきてくれてうれしい。麻井くんにも元に戻ってほしい。

みんなもいつかは分かってくれると思う」

浅葉檸檬は立ちあがった。

苛々とした眼で、忍を見下ろす。

「ああ、よくわかった。

自分だけ綺麗で、優しいアイドルで、皆に好かれるいいコでいればいいんだろ。

そのために周りが傷ついたってぜんぜん平気なんだ。

いいよね、人気者は。

天川が言えば理事長だつて動くんだし」

「浅葉くん、もともと浅葉くんがぼくに忠告してくれたんじゃない。

先生に話をしろつて」

「全然意味が違う。

ぼくはできるだけ波風を起こしたくないんだ。

あの時は極力騒ぎを鎮めたかったから、そう言った。

いまはもう、麻井のことはなかったことに、麻井なんていなかったことにしたいんだよ」

忍は視線を落として、地面の雑草をもてあそんだ。

ひだまりにペンペン草が生えていた。

花言葉は「あなたにすべてを捧げます」だった。

こんな細かい草に、そんな熱烈な意味がこめられているのが面白い。

胸ポケットのエンブレムに触れた。

クレマティスの花言葉は「心の美しさ、高潔。そして精神的な愛」いま、どう考え、どう行動するのがそれにふさわしいのだろう。

忍は立ちあがって制服をはたいた。

真正面から、檸檬の視線を受け止める。

「そんなのおかしいよ。」

麻井くんはクラスメイトだよ。麻井くんをいなかったことになるで、できるわけがない。みんな覚えているじゃない。覚えているから、後ろめたいんじゃない。

ぼくたち、ちゃんと向き合すべきなんだ」

「綺麗事だ」

浅葉檸檬はぎゅっとくちびるを噛むと、忌々しげに忍を強く睨んで、くるりと背を向けて去った。

忍は両手を固く組み合わせた。

いつかは檸檬も分かってくれるはず。

麻井芙弥也ももとに戻ってくれるはず。

それまで。

ぜったいに自分は逃げ出さない。

衣替えの季節になっても、麻井芙弥也は制服を変えなかった。

不格好な、だぼだぼの冬服を着続け、外界を遮断して本を読み続けている。

あいさつだけ、忍は毎日声をかけるが返事が返ってきたことはない。

それでもそこに麻井芙弥也がいるだけで、忍は満足していた。

たぶん、いつかは元のにぎやかな、うるさすぎてやっかいな麻井芙弥也に戻ってくれると信じていた。

むしろ忍が気になりはじめたのは、浅葉檸檬の方だった。

どういうわけだが、日に日に神経質になっていった。

今年もひきつづき、学級委員をやっている。

気まじめで責任感があって面倒見がいいのは相変わらず。

なのに、みんななどことなく、浅葉檸檬を避けはじめていた。

嫌いなわけじゃない。

勉強とか教えてくれるし、困っている時は先回りして助けてくれるから、感謝はしている。

それでも。

常にピリピリした檸檬の表情に、みな、息苦しさを感じるようになっていた。

むしろ異様な姿をしていたとしても、麻井芙弥也の方はずっとおなじだったし、他人に関わらない分、慣れてしまえばどうって言うことがなかった。

——まったく変わってない。

檸檬の言っていた意味が、おぼろげながら分かってくる。  
前も今も同じ。

周囲に対しては、無頓着なのだ。

だからはた迷惑なまでにしゃべりつづけることもできれば、ぴしやりとシャッターを下ろして世界を遮断することもできる。

でも、麻井芙弥也を糾弾した生徒たちにとっては、芙弥也が自分たちを責めるためにこんな態度をとっているのではないと分かっしまえば、気が軽くなる。

むしろ、罪悪感も加算されて、今の芙弥也を丸ごと受け入れよう、という空気になっている。

その空気にすら芙弥也は無頓着で、逆に、敏感に察知して、苛々としているのが浅葉檸檬だった。

苛々されればされるほど、この気まじめで几帳面な学級委員は窮屈な存在になり、みなが敬遠しはじめていた。

夏休み前に、伊藤晋が忍の部屋を訪ねてきた。  
忍はびつくりしながらも、室内に招き入れた。

「うわあ、さすが天川先輩、綺麗にしていますね。  
まるで住んでいないみたい」

と空き室の方をみていい、散らかりきった反対側をみると、

「すごい部屋ですね、誰ですか。  
どういつ神経なんだろ。」

麻井先輩よりひどいですね、よくこんなひとと同室で居られますね。どんなヤツだか顔を見てみたい」

と憤慨して言った。

忍はひきつった声で笑った。

「そ、そう？」

そんなに酷いかな？ で、何の用？」

「あ、そうそう。」

転校生が出て、空き部屋が出来たので、オレそっちに移ることにしましたから。

いちおう、天川先輩にも報告しておこうと思って……気にしているかなって」

「あ、ああ、ありがとう」

「そんな、礼を言われることなんて。

オレ、なにもできなかったし」

伊藤はどことなく後ろめたそうに視線を逸らした。

「そのう、やはり、麻井さんと居るのは大変だった？」

伊藤はこっくりとうなずいた。

「なんかこんなこと言うの嫌なんですけど、戻って来てから、妙に気味が悪くて。

変な気配がすると言うか。

それに、毎晩、外に出ているみたいで」

「え？ 外出？」

「良くわからない。

居ないと思っていると、部屋にいたりするし。でも居ないような気配もして」

伊藤晋は青ざめた顔でぶるりと身震いをした。  
よほど気味が悪い思いをして来たのだろう。

「そう。」

きみにはずっと迷惑をかけたよね、ゴメンね」

「ううん。」

別に迷惑はかけられてないんだけど。

でも、やっぱりちよつと気持ち悪くて。

「ごめんなさい」

「伊藤くんが謝ることは何もないよ。」

それより、わざわざ教えに来てくれて、ありがとう」

忍が礼を言くと、真っ赤になってごにごになにやら呟き、  
飛ぶようにして帰って行った。

忍は腕組みをしたまま、考え込んでしまった。

（外出しているのに、居ないと思っていると居る？）

（妙な気配？）

まるで暗号かなにかのよう。

それに毎晩、出ていくような場所がこの学校周辺にあるのだろうか。

もしかしたら夢遊病か何かだろうか。

でもふらふらと学校内を歩いているのであれば、目撃情報とか出て、噂になってもよさそうだ。

忍は空きベッドに腰をおろし、ぴんと張ったままのシーツに触れた。

藤井紫朗がこの部屋から出ていつてから、もう半年たった。

学校内での人気どころか、いまはどこでどう噂になっているのか、近隣の（といってもかなり離れてはいるが）学校の少年少女たちがファンクラブを作り、紫朗を見にわざわざ学園前までうるついたりしている。

芸能界からのスカウトもたくさん押し寄せている。

学校内で時折見かけても、とりまきたちに囲まれて、近づいたり、声をかけたりなんてできる状態ではない。

それでも、自分でもびつくりするほど辛抱強く、忍は紫朗のことを想い続けていられた。

藤枝紫朗の記憶は鮮明なままだった。

出会った時のことから、いがみ合っていた時のこと、ふたりで山道を歩いて帰って来た時のこと。

紫朗の体温が、冷たい怒った眼が、人なつっこい笑顔が、手の感触が、すべて残っている。

だから自分はまだ大丈夫。

まだやっていける。

不意に、浅葉檸檬は好きな人がいるんじゃないか、と浮かんだ。

浅葉檸檬と話していたとき、どこかに芙弥也を羨ましがっている響きを感じた。

妬んでいるようにも聞こえた。  
たぶん。

思い通りにならない、辛い恋を檸檬はしている。

それにしても、あのお硬い生真面目な委員長にそんな思いをさせるなんて、誰なのだろう。

学校内の顔を順繰りに思い浮かべてみたが、誰もピンとこない。

年上なのか年下なのか。

檸檬と張り合えるほど、頭はいいのだろうか。

それともスポーツマンかなにか特技があるのだろうか。

どこかで。

落ちついたら、檸檬ともちゃんと腹を割って話したい。

その時は、元気になった麻井芙弥也も加わっていると嬉しい。  
いつかそんな日が来る。

忍はその時のことを思い浮かべ、微笑した。

約一ヶ月半の夏休みがはじまった。

大半の生徒が帰宅するが、家庭の事情などで、まったく寮から出ない生徒も一割くらいはいる。

家族のない忍も、行く宛はないから寮に残るしかないのだが、どちらかというと帰れない生活を忍は楽しんでた。

山の中の夏は適度に涼しくて、空気も澄んでいて心地よい。

授業はないから、朝はいくらでも遅くまで寝ていられる。

寮の人数も減るから、共有設備も少人数で悠々と使える。

食事も頼めば三食提供してもらえる。

いくらでもプログラミングの仕事に打ち込めたし、時おりは、暇を持て余した寮生たちと気分転換に遠出をしたりもした。

下請けの下請けの下請けの仕事を片づけてメールで提出した朝、忍はすこしは体を動かした方がいいと気づいて、ぶらぶらと校内を散歩することにした。

晴天だ。

真っ青な空に、入道雲が出ている夏休み。

陽射しは強いが、山の中だけあって風は爽やかだ。

蝉の声を聞きながら、右に左にぶらぶら歩いていると、おなじ寮の後輩が本を抱えてえっちらおっちら歩いてくるのが見えた。

体つきは高校生のように大きいが、顔つきは小学生のようにあどけなく、いつもひとりではおっとしている少年だ。

すれ違いざま、忍が会釈しても気づかずに、熊のようなのっそりとした動きで通り過ぎて、ゆっくりと図書室に入って行った。

（あの子、本好きなんだ）

そう言えば食堂でも、本を読みながら最後の一人になってもものんびりと食事をしている。

いちど賄いのおばさんに注意されたら、体格に似合わぬ小心さで泣きだしてしまった。

寮監が仲裁に入り、以後はマイペースに生活させてもらっているようだ。

（図書室って夏休みもやっていたっけ？）

司書の先生が残っていたかどうか、記憶にない。

好奇心に駆られて、下級生の後をおって図書室に入った。

驚いた。

麻井芙弥也がカウンターの中に座っていて、しかも先ほどの下級生と会話をしていた。

依頼した本は書庫だからとか、事務的な会話だが、それでも麻井芙弥也の声を聞くのは久しぶりだった。

びっくりして見ていると、麻井芙弥也と目がばちっと合った。とぼけた眼だった。

分厚い眼鏡の奥の、澄んだ鳶色の瞳。

つややかなほおも。

小さな可愛らしいくちびるも。なにも変わっていないかった。

芙弥也はすぐに視線を落として、カウンターの内側で本を読みはじめた。

下級生はのそのそと二階の閲覧室に上がって行く。

忍はカウンターに両腕をついて、身を乗り出した。

「びっくりした、麻井くんがこんなところにいるなんて。

司書の先生はどうしたの」

「夏休み。

でも、ぼくが仕事するなら、夏の間も図書棟を開けていいって言うから」

期待はしていなかったのに、答えが返ってきた。

しかも生まれて初めて聞く、麻井芙弥也のまっとうな答えだ。

どうしよう。

全身の血液がどくどう脈打ち出して、すごい速さで体内を駆け巡った。

話したいことはたくさんある。

でも、いざ話してみても、また繭にこもられても怖い。

あたりさわりのない話を選んだ。

「いまのこ、うちの寮の後輩だけど、本が好きみたいだね。いつもひとりで本を読んでいる」

芙弥也はしかめっ面になって、首をねじ曲げ、階上へつづく階段を見上げた。

「大丈夫か、アイツ」

麻井芙弥也が誰かを心配するなんて、忍のクラスの生徒が聞いたら幻聴だと思っだろう。

というより、麻井芙弥也に心配されるなんて、人として終わって

いると判断するに違いない。

「どうだろう、けっこうマイペースみたい」

芙弥也はすこし考える顔をしたが、すぐに視線を手元の本に戻した。

もう話したくはないらしい。

忍は頷いて、図書室から出ようとした。

「天川」

背に、芙弥也の声がかかった。

「ぼくはまだ混乱している」

思わず振り返った。

麻井芙弥也はいつもの教室の姿と同じように、外界を遮断して繭に閉じこもり、本を読んでいる。

「分かった」

忍は答えると、いつきに駆け出した。

心臓が爆発するほどに無茶苦茶に駆けて、苦しくなっても足を止めずに部屋に戻った。

大声で叫び出しそうになって、両手で口を塞ぐ。

とにかく嬉しい。

無茶苦茶に嬉しい。

人とコミュニケーションが取れることが、こんなにも嬉しいことだなんて知らなかった。

まだばくばく鳴っている心臓を、拳で押さえた。

——ぼくはまだ混乱している。

その言葉の意味は、はっきりとは理解できない。

でも、まだ、という以上、いずれは混乱から抜け出そうという意志があるはずだ。

それはいつだろう。

明日、明後日ではないだろうけど。

始業式とか、もしかしたら次の文化祭？

高校生になる時かもしれない。

ここまできたら焦ってもしょうがない。

じつくりと腰を落ち着けて、その日を待とう。

そうだ、浅葉くんにも伝えなくてはいけない。

ここしばらく苛々していた浅葉くんだから、さらに身勝手だとか怒り出すかもしれないけれど、そうしたら一度、きちんと会話をしよう。

忍は両手を胸元で硬く組み合わせた。

本当に良かった。

すべてに対して、明るい兆しが見えてきた気がした。

だが。

始業式の日、浅葉檸檬の姿はなかった。

浅葉檸檬がいないことに真っ先に気がついていたのは、後ろの席の忍だった。

でも、真面目で几帳面な檸檬にしては珍しい、とぼんやりと思うくらいだった。

浅葉檸檬がルールを破るということなど、考えられないからだ。

稲穂先生が教室に入ってきて来て、出席を取ろうとして困惑した。

「浅葉くんは？」

誰ひとりとして答えなかった。

がやがやとざわめきが起きるが、誰も浅葉檸檬がなぜ居ないのか、知ってはいなかった。

「高瀬くん、高瀬くんは浅葉くんと同室だったよね。  
なにか知らないのかい」

稲穂先生に名指しされて、高瀬はひどく嫌そうな、面倒くさそうな顔をした。

「さあ……」。

「っていうか、寮にはいなかった」

「いなかった？」

「荷物があったから、学校には戻ってきていると思うんだけど」

稲穂先生は顔をしかめた。

「天川くん、かわりに出席をとっておいて」

終わったら始業式だからみんなを講堂に誘導して。ちょっと寮まで見に行ってくる」

あわただしく言って、稲穂先生は出て行った。

忍は教壇に立ち、名簿を手を取った。

なんだか嫌な感じだ。

浅葉檸檬に限って、遅刻やサボリなんて考えられない。

荷物があるというなら、クレマティスには戻ってきたはずだ。

でも、寮にいないのなら、どこに今、いるのだろう。

ぐるぐると頭の中を考えが回るなか、代行者としてひとりひとりの名を呼んで出欠をとって行く。

「高瀬」

呼んだのに返事はなかった。

高瀬は周囲の生徒に、興奮してなにやら自慢げに話しをしていた。

「だから……電車には乗っていたよ、オレのコンパートメントに来たもん。」

でも気分が悪いとかいうからそのままひとりにして来たんだ。

もしかしたらそれっきりかな？ でも荷物が部屋にあったし」

「気分が悪いって？」

それで、そのままほおってきたの、浅葉くんを？」

聞き捨てることができず、思わずキツイ口調で言った。

教室の中ほどの高瀬の席につかつかと歩いて、詰め寄った。

「え……」

見下ろす忍に驚いたか、高瀬は身を縮めて、へらへらと媚びるような笑みを浮かべた。

（コイツじゃない）

とつさにその考えが脳裏に浮かんだ。

浅葉檸檬は、あの学級委員はこんなヤツには惚れたりしない。

「だって、居たって何もできないジャン。それに酔い止めとか渡そうとしたのに」

最後まで聞いていられず、拳で高瀬のほおを殴りつけた。高瀬の身体は椅子から吹っ飛んで、斜め後ろの生徒の机にぶつかる。

教室中が静まり返った。

「な、何すんだよ、イキナリっ」

プライドを傷つけられたか、高瀬は真っ赤になって怒鳴り出した。

「なんだよ、自分だけはいつも綺麗で清純なふりしちゃって。人気者でいい気になって、勘違いしているって、浅葉がいつも言ってた。」

ホントは浅葉、天川のこと嫌っていたんだ。

天川がいるから学校に来ないんじゃないのかよ」

忍は教室を出た。

背後でうわあつと凄い騒ぎになったが、戻らなかった。

先生に、皆を講堂に誘導するように言われていたけれども、そんなの、もう、どうでもいい。

右手がジンジンと痺れている。  
生まれて初めて、人を殴った。

人だけじゃない、小動物にも植物にも、生命あるものには優しく接するよう、物心ついたときから育てられてきた。  
それでも、あの高瀬の態度だけは許せなかった。

浅葉檸檬はいつでも他人のために一生懸命で。  
重くてうつとおしい時もあつたけど、でもクラスのことを懸命に守ろうとしていた。

そんな檸檬自身が気分が悪いと言っている時に、だれも助けてあげなかったなんて。  
だれもそばにいなかったなんて。

どう思っただろう。  
なにを感じたのだろう。

その時の浅葉檸檬の気持ちを想うと、高瀬を殴らずにはいられないほど、居たたまれない。

——ホントは浅葉、天川のこと嫌っていた。

それは薄々感じる事があつた。  
でも、檸檬は忍のことを嫌いながらも、それ以上に忍のことを認め、理解してくれていた。

忍は檸檬が嫌いではない。  
檸檬が抱えている不満も苛立ちも、理解している。  
いつかどこかで理解しあえると、信じていた。

忍は寮に戻った。  
ひとり切りになりたかった。

これからのこと、ひとりでちゃんと考えたかった。

空っぽのベッドに腰を下ろす。

半年前にはここで檸檬と並んで話をした。

その前にはいつも、ここに、藤枝紫朗がいた。

何かあるたび。

何もなくても。

いつでも紫朗を想う。

たぶんこの先、重なることのない人生でも、ずっと紫朗を想う。  
その想いが忍の力になる。

「まだオレのこと好き？」

「もちろん」

とつさに答えてから、吃驚して振り返った。

藤枝紫朗が立っていた。

「藤枝くん……？」

忍は目をこすった。

藤枝紫朗がここにいるわけがない。

もう始業式が始まっている。

それに紫朗はもうこの寮にはこないはず。

「よかった、間に合って」

藤枝紫朗は白い歯を見せて笑うと、つかつかと室内に入ってきて、忍の前で片膝をついた。

「間に合う、って？」

紫朗は答えずに、掬いあげるようにして忍を見上げた。

顔つきが変わっている。

尖った子どもっぽさが消えて、逞しさとゆとりが出てきている。

肩幅も広くなっていた。

男らしくなった。

でも、まだ少年らしいはりつめた肌と、生命力みなぎる眼をしていた。

「クラスメイトを殴ったんだって？」

すごい騒ぎになっている」

「え、そうなの」

「そりゃあクレマティスのアイドルだもん」

紫朗は忍の右手をとると、指を一本一本、丁寧になぞって確認した。

紫朗の指先が皮膚を撫でていく。  
体の芯が震える。

なにかを言いたいのに、声が出せない。

藤枝紫朗にこれ以上、甘えてはいけないのに、その手が振りほどけない。

紫朗はコントラストのはっきりした眼で忍を見上げて視線を絡め取ったまま、忍の手にくちびるをつけた。

「この華奢な指が折れてないか、気になって」

「そんなことあるわけないじゃない。」

「そんなにか弱くないよ」

「知っている」

紫朗は笑うと、立ちあがってぐるりと部屋を見わたした。

夏休み中、せっせと仕事に集中できたおかげというか成果で、室内は学期中以上に洗濯モノが散乱していた。

「うーん、想像以上？」

「引っ越し大変そう。」

「どっから手をつけるかな」

「引っ越し？」

「来るんでしょう、f寮に」

忍はぽかんと口を開いて、紫朗を見上げた。

開いた窓から、爽やかな秋の風が流れ込んでいる。

窓の外はすがすがしい秋晴れ。

浅葉檸檬のことも、クラスのこと、なにかもが吹っ飛ぶ。

「そりゃあ、ぼくは行きたいよ。」

散々そう言っただじゃない。

でも、藤枝くんが邪魔するんじゃない」

「当たり前だろ、アンタを狒狒ジジイどもの好きになんかささせられるかっての」

忍は手を口にあて、首をかしげた。

頭の中をクエスチョンマークが飛び交っている。

「オレ、頑張ったんだから」

紫朗は忍にぴたりと体をつけて、ベッドに並んで座った。

「褒めて」

とひたいを忍の肩につけて甘える。

「う、うん。エライ、エライ」

良くわからないまま、とりあえず紫朗の頭を、いい子いい子と撫でる。

紫朗は心底嬉しそうに、目を細めてほおを紅潮させた。

コントラストのはっきりした、いつも強い意志の力をはっきり放つ瞳が、しっとり潤んで忍を見つめた。

「一緒にいられる方法、いくつも考えた。

アンタが綺麗なままで居られて、オレはオレで居られる方法を探した。

だから、オレたち売り手側の価値を、馬鹿みたいに吊り上げるこ

とにしたんだ」

「価値を吊り上げる、の？」

「それで一緒にいられるの？」

「そ。

主導権はこっちにある。

客はものすごく限定してメンバー制。客からの指名はあっても、判断するのは売り手側。

断ることもできる。

こちら側の情報は基本的に、一切公開しない。

他にも色々と」

「そんなんでやっていけるの」

「やっていけるようにしたんだって。

ちゃんと表の世界で、いち中学生としてすごい話題になるように、人気が出るように仕向けて。

だから人をひき連れて校外を出回ったり、目立つようにして、オレの名と顔をとにかく売りまくった。

べらぼうな条件ですら、それでもオレが欲しいって、客が殺到するようにつくったんだ。

だからアンタがf寮に来て、アンタの顔は客に知られないし、アンタが了解しない限り客はとらなくていい。

これで、一緒に暮らせる」

忍は茫然とした。

嬉しいという感情をすっ飛ばして、ただ、もう、信じられない。

そんな都合のいい、夢みたいな話はあるのだろうか。

もしかしたら、これは夢じゃないのだろうか。

「唯一心配だったのは、アンタの気が変わったり他に好きな人ができたらどうしよう、ってこと。

毎日不安で焦っていたんだ」

「そんなこと、絶対ない。ありえない」

紫朗は口角をひいた。

両手で忍の頭の上から肩、背中、腕、指先、忍の存在そのものを確かめるかのように、丁寧になぞっていく。

くすぐったいような、もどかしいような、なんともいえない気分になる。

「なにしているの」

「触りだめ」

「つてなに」

「f寮は寮生の自由恋愛禁止だから。」

こんな風に自由に触れられなくなる。

だから今のうちに、触っておこうと思って」

自由恋愛禁止。

自由に触れられない。

その言葉が、鋭い棘となって心を刺した。

「葵がさ、口やかましくて、色々ルールを作ってたんだよ。」

まあ色々もめたけど、全体的なことを考えるとこれは葵の言い分に理があるし、仕方なかった。

それじゃあ、嫌？」

忍は首を振った。

「じゃあ、ばくも」

瑞々しくはりつめた紫朗のほおに触れる。  
硬い黒髪に指を絡める。

もう、こうして触れることはできなくなる。  
近くにいて、おなじ寮で一緒に生活して、目の前にいるのに触れられなくなる。

もしかしたら。

記憶と思い出だけの今よりも、辛くなるかもしれない。

それでも、紫朗が選択した。

忍とともに居られる為に頑張ってくれた。  
だったら、その道に進むことを躊躇いたくはない。

「いい男になったね」

たくましくなった鎖骨をなぞりながら言った。

藤枝紫朗が吃驚した顔をする。

つーっと、鼻血が流れた。

「え？」

うわああと、紫朗は慌てて鼻血を拭い、耳まで真っ赤になって頭を抱えた。

「い、言わないで。」

誰にも、ぜつたいに。とくに葵には「

「言わないけど、横になる？」

紫朗はちよつと拗ねた顔をしたが、おとなしく忍の太ももに頭を

のせて、横たわった。

両腕で顔を覆って、はああつと重い息を吐く。

「強くなりたいのに。

カッコよく決めたかったのに。

みつともない……」

忍は紫朗の髪を撫でた。

「カッコいいよ、世の中で一番。

それに凄いや。

無理難題片付けて、ちゃんとぼくを迎えに来てくれるんだもん。  
藤枝くんはやっぱりすごいよ」

「ストップ」

コントラストのはっきりした眼が、忍を見上げる。

「それ以上言われると、また、鼻血が出そう」

忍は声をたてて笑った。

こんな風に笑えるのはずいぶんと久しぶりだ。

「笑うなよ、傷つくなあ」

紫朗がちょっと子どもっぽい、むくれた顔をした。

「ゴメン、ゴメン。

つい嬉しくて。はしゃぎすぎ?。」

紫朗はにっこりと笑って、体を起こした。

「行こっか」  
「ウン」

差し出された、逞しい手を握る。

もう、こうして触れることはできなくても。  
それでも一緒に居たい。

忍の「好き」と紫朗の「好き」は微妙に食い違っている。  
いつか、忍は紫朗の前から姿を消さなくてはいけない。  
一緒にいればいるだけ、辛くなるかもしれない。  
それでも紫朗の用意してくれた道を進みたい。  
別れの時が来るまで。

たとえ、触れることができなくても。

## 28・(後書き)

残り1話です。

次作は12月1日21時より掲載いたします。

「遅い」

苛々と爪を噛みながら、葵信吾がロビーで右へ左へ行ったり来たりしている。

忍はソファーに座ってクッションを抱えたまま、目を動かして右へ左へとみた。

「葵、座りなよ。」

香紀だって理事長なんだからさ、しょうがないだろ」

忍の横で、ソファーにもたれてうとうとしているB Jが言った。  
睡魔に勝てず、なんどもこっくりと落ちかけている。

「なにがしょうがないんだ。」

アイツはまだ子どもなんだ、もう寝る時間だぞ。  
職員連中、香紀をこき使いやがって」

「そんなこと、ないと思うけど」

B Jはふわあああときなあくびをした。

目をこすりながら立ちあがった。

「もう限界。先に寝る。」

お休み」

「ああ」

忍は思わず時計をみた。  
まだ九時である。

忍からしてみれば、ようやく一日が始まる時間だ。

「あー、B」は朝型だから。

じいさんみたいだけど、気にしないで」

「うん」

自動ドアの開く音がした。

「香紀」

葵信吾は長い黒髪を揺らして振り返る。

入ってきたのは藤枝紫朗だった。

につこりと笑うと、つかつかと葵を無視して横を通り過ぎ、忍の  
まえで上体をかがめる。

「ただいま」

「おかえり」

「ご飯は」

「まだ。」

藤枝くんを待ってた」

だと思った、と紫朗ははしゃいだ声で言った。

「じゃ、食事にしよう」

「うん」

ふたりでいちゃいちゃと食堂へ行こうとすると、

「ちょっと待て」

こめかみを痙攣させながら、葵信吾が紫朗を睨みつけた。

紫朗はあからさまにむっとしてあごを突き出し、葵を睨み返す。  
空中で火花が散る。

「言つとくけど、なーんにもルールに違反することしてないぜ。  
オレ、清廉潔白」

紫朗の先制攻撃。

「帰ってくるの早すぎだろーが。  
お前、手を抜いたな」

ふふん、と紫朗は鼻で笑った。

「手を抜く？ このオレが？  
誰に向かって言ってた。

ちゃーんと満足させてきたって。

そういう葵こそ、なんでこの時間にいるんだ、おかしいじゃない  
か」

「香紀が色々テンパっているから。  
側にいてやろうと思ったんだよ」

「ドタキャンしたっての？

それってアリ？」

「香紀は大事なスポンサーだろ」

ちょ、ちよつと藤枝くん、と忍は紫朗の袖をつかんだが、藤枝紫  
朗はふり払った。

ぺろりとくちびるを舐めて、嗤う。

「オレだつたら、ドタキャンなんかせずに、ちゃんとこの時間に帰ってくるけど?」

きいっと、葵信吾は両肩を吊り上げた。

「要は葵が二流ってことじゃん」

うわあと忍が体をすくめたとき、ドアが開く音がした。

「香紀」

葵信吾が振り返ると、こんどは架奏香紀が立っていた。  
ボロボロの姿である。

埃だらけ、煤だらけ、クモの巣までついている。

ガシャンガシャンと耳障りな松葉づえの音を立てて、中に入ってきた。  
げっそりと疲れ切っている。

「香紀、大丈夫?」

葵が手を貸してソファーに座らせた。

汚れた銀の髪をすんと垂らして、香紀はうつむいた。

「ずっと探してたけど、みつからなくて」

「探してたって、浅葉檸檬を?」

香紀はこっくりうなずいた。

「倉庫とか車庫とか、屋根裏部屋とか全部見てきた。」

けど、いない」

「浅葉くん、そんなところにいるかなあ」

思わず言ってしまった。

子どものかくれんぼじゃあるまいし、あの浅葉檸檬がそんなところに隠れているはずがない。

そもそも、一生けん命らしいのは分かったが、自ら探して回るなんて理事長がすることではない。

あまりにも的外れだ。

苛々する。

香紀は忍に気づいてびくりと飛び上がると、

「な、な、な、なんで、コイツ、ここにいるの」

と金切り声をあげた。

「なぜって、今日からf寮に入ることになったから」

「香紀、知らない。聞いてない」

「でも、紫朗が決めちゃったし」

藤枝紫朗はコントラストのはっきりした眼で空を睨み、その眼を忍に流した。

「嫌われる心当たりは」

「うーん、あるかも」

忍が香紀とのやり取りをひそひそと話すと、

「あー、それ、しゃーねーな。」

香紀、ファザコンだし」

紫朗は面倒くさそうに髪を掻いた。

「香紀、ファザコンじゃない。  
ファザコンじゃないの」

キンキン声で、香紀がわめいた。  
慣れているようで、葵も紫朗も顔をしかめて、耳を塞いでいる。

こんなので大丈夫なのだろうか。  
浅葉檸檬を見つけることができるのだろうか。  
前の理事長だったらもつと素早く、生徒のために動いていた、と  
どうしても思ってしまう。

エメラルドグリーンの瞳が、きつと忍を睨みあげた。

「香紀だってできるんだから。  
香紀だってちゃんと、麻井をとり返すことできたのに」  
「そうだったのかもしれない。」

でも、これはゲームじゃないんだ。  
できるかもしれない、父親に負けたくない、なんてことで任せたくはないよ。

「大事な友だちなんだ」  
「大事な、友だち……？」

香紀は深緑の瞳をぱちくりさせた。

「警察には言ったの。  
浅葉くんの家族はなんて？」

「え、ええ、と。」

家には稲穂先生が電話しててつながらないって。

警察に連絡する前に家族に断った方がイイって、弁護士が」

「遅くない？」

いま、この瞬間、浅葉くんは助けを必要としているかもしれないのに。

心細い思いしているかもしれないのに。

理事長だって言うなら、自分で探しまわるより先にすること、たくさんあるじゃない。

お願い、理事長——前の理事長に浅葉くんのこと伝えて」

香紀はぎゅっとくちびるを噛みしめた。

口惜しそうに、ぼろぼろと涙をこぼす。

「分かった……」

ガシャンと耳障りな音で香紀は立ちあがった。

あわてて葵が手を貸して、エレベータに乗って部屋に戻って行く。

ふうつと、紫朗は息を吐いて、じゅうたんに両膝をついた。

ひたいをぎゅっと拭う。

「冷や冷やさせないでよ。」

さすがに香紀を怒らせたら、もう、どうにもできないんだから」

「ゴメン」

「まあ、それが忍のいいところだけど」

ファーストネームを呼ばれて、どきんと鼓動が止まる。

に、と紫朗が笑った。

「f寮は年功序列なしだから。

オレが決めたんだけど、葵もそーゆーところはしこらないんだよね。  
なんだかんだいって、葵はすごいよ」

「そう思っているんだ。

さっきは藤枝くんがすごい突っかかるから、ぼくだって冷や冷やしちゃった」

「紫朗」

「え」

「言ったでしょ、年功序列なしって。

葵も香紀も、紫朗って呼んでる。

言って」

「し、紫朗……？」

口にしてみても、すごく気恥ずかしくなって、顔を上げられない。

「うん」

につこりと紫朗は返事をして立ちあがった。

「忍、食事しよう。

つくってあげる」

「作るの？ 紫朗が」

「作るというかあっためるだけ。

シェフが色々用意してってくれるんだ。

教えるからこっち来て」

忍は紫朗の背を追って、食堂へ入る。

浅葉檸檬はいまごろ、ちゃんと食べていられるのだろうか、と、  
ふと思う。

元気で居てほしい、と思いたいののに、なぜか昏い予感が胸にわだかまっている。

「忍？」

紫朗が振り返って、怪訝な顔をする。

「なんでもない」

忍は笑顔を作った。

ずいぶんと忍はきつく言ってしまったけど、新理事長は生徒思いだし、一生懸命なようだった。

すごく傷ついていただけ、あの様子なら生徒の為に私情を捨てて父親に連絡してくれそうだ。

だったらたぶん大丈夫。

前の理事長だったら、なんでも解決してくれる。

忍はそう自分に言い聞かせ、紫朗がはしぎながら食事の準備をするのを手伝った。

紫朗の端麗な横顔を見ながら、忍と紫朗をひきあわせてくれた理事長に、今さらながら感謝をする。

そう、あの理事長だもの。  
絶対に。

浅葉檸檬も取り戻してくれるはず。

忍は昏い予感をふり払って、紫朗と一緒にテーブルにつき、短い祈りをささげた。

この世のありとあらゆるものへ感謝する。

紫朗の人生の幸せを願う。

たぶん、ぼくは幸せなのだから。

この先何があるかと、ひとりで生きていける。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3810n/>

---

10月の少年

2011年10月7日10時02分発行